

一、豫審判事ノ命令ニ依ル昭和九年七月九日附同上鑑定人作成ニ係ル鑑定書(記録五百七十丁以下)中被告人ニ對スル豫審第二回及第三回訊問調書ニ被告人ノ供述トシテ記載セラレアル判示殺害方法ハ檢事ノ囑託ニ依ル被害者豐市並ヨシ兩名ノ死因等ニ關スル前記昭和九年六月二十日附鑑定書記載ノ鑑定ノ結果ニ符合スル旨ノ記載並

一、押收ニ係ル西洋手拭一本(證第十號ノ一)ノ存在

ヲ綜合シテ之ヲ認メ得ヘク犯意繼續ノ點ハ被告人カ判示ノ如ク短時間内ニ同種行爲ヲ反覆果行シタル事跡ニ徴シテ明瞭ナルヲ以テ以上認定ニ係ル事實ヲ綜合スレハ判示事實ハ其ノ證明十分ナリ

法律ニ照スニ被告人ノ尊屬殺害ノ所爲ハ刑法第二百五條第五十五條ニ該當スルヲ以テ所定刑中死刑ヲ選擇處斷スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和九年九月二十日

廣島地方裁判所刑事部

一五六 尊屬殺、死體損壞、遺棄

判決

本籍 福島縣岩瀨郡廣戸村大字柿之内字坂下十九番地
住居 不定

無職

小磯 茂利 登

大正三年六月二十五日生

右ノ者ニ對スル尊屬殺及死體損壞遺棄被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告茂利登ヲ死刑ニ處ス

訴訟費用中證人朴五出、角田キク、内山サイ並鑑定人大原八郎ニ支給シタル分ハ被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ福島縣岩瀨郡廣戸村大字柿之内字田内百七番地戸主小磯茂三郎(明治十年生)ノ六男トシテ右本籍地ニ生レ陰性沈鬱寡言ノ性格者ニシテ昭和三年九月頃郷里廣戸村小學校高等二年ヨリ栃木縣那須郡川西町小學校ニ移リ昭和四年三月同校ヲ卒業シ同年秋東京市ニ出テ昭和九年春迄同市向島區寺島町大和護謨製作所及同市本所區向島町東京護謨工業所ノ各職工トシテ勤メ昭和九年春徴兵検査ヲ機會ニ歸郷シ前記本籍地ナル父茂三郎及同人長男亡茂一長男茂倫(明治四十四年生)等ノ許ニ在リテ農事ニ從ヒタルカ父茂三郎ハ被告人ヲ格別ニ愛顧ノ結果昭和九年四月中旬頃右茂倫ノ反對ニ拘ラス家屋敷ノ外田一畝十歩畑五反六畝歩及山林五畝歩ヲ被告人ニ贈與シテ廣戸村大字柿之内字坂下十九番地ニ分家セシメ父茂三郎ハ茂倫等ト別離シ被告人ニ隨伴シテ之ト同居シタル上昭和十年四月中旬頃被告人ニ近藤ミキ(西白河郡矢吹町幸八妹)ナル女ヲ妻ニ迎ヘ與ヘ父茂三郎ハ牛馬商ヲ爲シ被告人ハ右妻ミキト共ニ前掲田畑山林ノ外岩瀨郡鏡石村大字久來石鈴木武壽所有ノ田五反六畝歩ヲ耕作シテ農業ニ從事シ三人ニテ生活シ來リタルトコロ偶昭和十年十

一月頃父茂三郎ハ内山サイ(岩瀬郡廣戸村大字柿之内)ナル寡婦ヲ後妻ニ迎入レントシテ之ヲ被告人ニ諮リタルニ被告人ハ生活難ヲ招クト稱シ反對ヲ唱ヘテ肯諾セザリシヨリ茲ニ感情ノ衝突ヲ惹起シタルカ父茂三郎ハ之ヲ斷念シ兼ネ其ノ後モ牛馬ノ取引先ヨリ酩酊歸宅ノ際等屢々右後妻迎取ノ件ヲ申出テ被告人ハ復タ其ノ都度依然之ニ反對ヲ強調シタル爲爾來父茂三郎ト被告人トハ益意思ノ阻隔ヲ來シ時々口論ヲ演スル等親子ノ愛情頓ニ疎ク比ノ間ニ介在シモ亦居堪ラスシテ實家ニ逃戻リシコト再三ニ及ヒ次テ昭和十一年二月下旬頃父茂三郎ハ被告人方土藏ニ起臥スルニ至レリ茲ニ於テ被告人ハ此ノ儘父茂三郎ト生活ヲ共ニセンカ妻ミキト離別ノ結果ヲ來サムコト恐ラク必至ノ勢ナルモミキトノ離別ハ得テ堪フルトコロニ非サルヲ以テ縱令父茂三郎ノ身ハ如何ニナリ行クトモ妻ミキヲ喪ハサルヘクト焦慮中恰モ鈴木武壽ヨリ前掲小作地取上ノ通告ニ接シタルヨリ昭和十一年三月上旬頃父茂三郎ヲ振り離シ同人ヨリ貰受ケタル前記田畑等ノ不動産ヲ處分シ賣上金ヲ懷中ニ妻ミキヲ携ヘ東京市ニ出テ夫婦生活ヲ享樂セント思惟シタルカ父茂三郎カ生存シ居ルニ於テハ同人ニ無斷ニテ該田畑等ノ處分ヲ敢行スルコトヲ得サルヘク又父茂三郎ヨリ故障ヲ申出ラレルヲ以テ到底右不動産ノ賣却ヲ實行シ得ヘカラサルコト明ナリト爲シ前記自己ノ恣意ヲ遂ケル目的ノ下ニ父茂三郎ノ酩酊ニ乘シ之ヲ絞殺シテ其ノ犯跡ヲ隱蔽センカ爲死體ヲ燒燬スルニ如カスト決意シ昭和十一年三月十七日先ツ豫メ死體燒燬ニ使用スヘキ諸材料ヲ調査ノ結果松薪松バタ(製板屑)ハ各十束位存在シ不足ナキコトヲ確メタルヲ以テ石油一斗入一罐ヲ買求メ居宅縁下ニ匿シ置キ右殺害及死體燒燬等ノ機會ヲ窺ヒ居リタルカ偶昭和十一年三月十九日朝父茂三郎カ歸リハ遅クナルヘシトテ商賣用ノ馬ヲ牽キ廣戸村大字白子町島清三郎方ヘ出發シタルヨリ同人ハ從前取引ノ常例通り今日モ酩酊シテ歸宅スルニ相違ナキヲ以テ之ニ尙飲酒泥醉セシメタル上前記殺害及死體燒燬等ノ計畫ヲ實行セムト企

テ先ツ居宅木小屋ノ南方表庭ニ長サ一間幅三尺深サ四尺ノ穴ヲ掘リ別ニ火焰ノ上昇ヲ防ク爲木小屋ノ屋根ヨリ波形トタン五枚ヲ剝シテ之ヲ取揃ヘテ次テ柿之内字田内角田キク方ヨリ右父茂三郎ニ飲マシムヘキ燻酒一升ヲ買求メ一切ノ準備ヲ完了シテ父茂三郎ノ歸宅ヲ待テ受ケタルトコロ同日午後六時頃同人カ案ノ如ク酩酊シ交換シタル馬ヲ牽キ裏口ヨリ歸宅スルヤ妻ミキヲ別口ヨリ密ニ實家ヘ立去ラシメテ父茂三郎ヲ迎ヘ居宅土間ノ圍爐裡ニ於テ前記酒ヲススメ午後八時頃父茂三郎カ泥醉シ豫期ノ如ク後妻迎取ノ件ヲ言ヒ出テタルニ乘シ之ヲ峻拒シテ故意ニ激怒セシメ父茂三郎カ「此ノ親不孝野郎」ト叫ヒ盃等ヲ投付ケタル後「外ニ出テ來イ」トテ表庭ニ飛出シタルニ應シ機ヲ逸セス居宅表庭既舍前ニ出テ之ニ組付キ格闘シテ午後八時三十分頃父茂三郎ヲ腰投ニテ其ノ場ニ仰向ニ倒シ先ツ右肘ニテ同人ノ腹部ヲ押ヘ付ケ右手ヲ其ノ襟元深く差込ミテ掴ミ次テ左手ニテ其ノ左襟元ヲ掴ミ約五分間位父茂三郎ノ咽喉部ヲ極力絞扼シテ之ヲ窒息死ニ致シ次ニ前記穴ノ最下部ニ古木羽葺屋根ノ長サ四、五尺幅二、三尺ノモノヲ敷キ其ノ上ニ右松薪松バタ五、六束ヲ積ミテ前記石油ノ約四半量ヲ流シ掛ケタル上ニ父茂三郎ノ死體ヲ仰向ニ載セテ之ヲ松薪松バタ五、六束ヲ以テ覆ヒテ再ヒ前同量位ノ石油ヲ流シ掛ケタル上ニ縱ニトロール一本ヲ渡シ比ノロール及穴上ニ前顯トタン板五枚ヲ煙等ノ排出ニ工夫ヲ凝ラシテ竝ヘテ火焰ノ上昇ヲ防キ午後九時頃乾燥セル杉葉ニ燐寸ニテ點火シ之ヲ死體ノ頭部及足部ノ兩方ヨリ挿入シテ燒燬ニ著手シ午後十二時頃更ニ松薪松バタ五、六束ヲ添加シ殘リノ石油全部ヲ流シ掛ケテ之ヲ續ケ翌昭和十一年三月二十日午前四時頃ニ及ヒテ死體ノ殆ト全部ヲ燒燬シ盡シタル後燒殘リタル小骨片等ハ燃殘リノ薪及薪ノ炭等ト共ニ一部ハ炭俵詰ト爲シテ午前十時頃居宅附近ノ俗ニ前川ト稱スル川中ニ投棄シ殘分ハ居宅内池ノ周圍ニ泥ヲ交ヘテ塗込メ尙右肩部ヨリ腦部迄ノ骨ハ長サ二尺五寸位幅一尺位ノ荒菰包ト爲シ同日午後六時頃福島縣西白河郡

白河町ニ到リ同町宇士多町地内ノ阿武隈川ノ假板橋ヨリ其ノ水流ニ投棄シ以テ父茂三郎ヲ殺害シ死體ヲ損壞遺棄シタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中父茂三郎殺害ノ點ハ刑法第二百條ニ死體損壞及遺棄ノ點ハ同法第九十條ニ各該當シ右ハ同法第四十五條前段ノ併合罪ナルトコロ尊屬殺人罪ニ付被告人ニ對シ死刑ヲ選擇スルヲ相當ト認メ同法第四十六條第一項本文ヲ適用シテ他ノ刑ヲ併科セス被告人ヲ死刑ニ處スヘク尙訴訟費用中主文掲記ノ分ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ從ヒ被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十一年十二月二十八日

福島地方裁判所白河支部

裁判長判事 甲 田 一 郎

判 事 乙 山 二 郎

裁判長判事 甲 田 一 郎

判事丙川三郎ハ病氣差支ニ付署名捺印スルコト能ハス

一五七 傷害致死、尊屬殺、殺人

判 決

本籍並住居 佐賀縣神埼郡蓮池町大字小松八百十一番地 農 業

小 柳 彌 一
明治十四年十二月二十二日生

本籍並住居 同 所

左官職

小 柳 直 太 郎
明治二十年三月二十一日生

本 籍 同 所 住 居 東京市荒川区日暮里町八丁目八百五番地

料理人

石 崎 松 雄
大正二年六月十九日生

右被告人小柳彌一、同小柳直太郎ニ對スル傷害致死及被告人石崎松雄ニ對スル殺人被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人松雄ヲ無期懲役ニ處ス

被告人彌一、同直太郎ヲ各懲役二年ニ處ス

一五七 傷害致死、尊屬殺、殺人

但シ被告人彌一及同直太郎ニ對スル未決勾留日數中各百四十日ヲ右本刑ニ算入ス

尙被告人彌一及同直太郎ニ對シテハ此ノ裁判確定ノ日ヨリ參年間各右刑ノ執行ヲ猶豫ス

訴訟費用中證人永田美代春及鑑定人築地美暢ニ各支給シタル分ヲ除キ其ノ他ハ各被告人ノ連帶負擔トス

理由

被告人彌一ハ齡二十三歳ノ頃先妻ムラト結婚シ二男二女ヲ擧ケタルモ三十九歳ノ時ムラニ死別シタル爲翌年父與助ノ妹亡石崎シノ長女ヨネヲ後妻トシテ娶リ更ニ一男一女ヲ儲ケタル後昭和九年五月二十日正式婚姻ノ届出ヲ爲シタルモノ、被告人直太郎ハ被告人彌一ノ實弟ニシテ彌一及其ノ家族ト共ニ彌一方ニ同居シ居ルモノ、被告人松雄ハ被告人彌一ノ二男ニシテ十七歳ノ頃迄彌一ト同居シ居リタルモ昭和七年中上京シテ東京地下鐵道株式會社ニ料理人トシテ雇ハレ爾來引續キ同會社ニ勤務シ昭和九年四月二十五日當時被告人彌一ノ内縁ノ妻タリシ石崎ヨネト養子縁組ヲ爲シテ其ノ養子トナリタルモノナルトコロ

第一、被告人彌一ハ近年妻ヨネカ強度ノ「ヒステリー」ニテ事毎ニ被告人ニ反抗シ家庭ノ圓滿ヲ缺クニ至リタルヨリ痛ク當惑シ居リタル折柄昭和十四年九月十日頃豫テ懇意ノ間柄ナル佐賀縣神埼郡蓮池町大字小松字蒲田津祈禱師宮地鶴田イマヨリヨネカ被告人及其ノ二女アキ(先妻ノ子)等ノ生命ヲ絶ツヘク數年前ヨリ同縣佐賀郡鍋島村所在ノ稻荷ノ狐ニ祈願シ居レリトノ弘法大師ノ御告ケアリタル旨虚構ノ事實ヲ申聞ケラレ之ヲ信シ恐怖煩悶ノ末其ノ對策ニ付協議スヘク同月十二日頃朝鮮京城府居住ノ長男與一及東京市居住ノ被告人松雄(二男)ニ對シ即時歸來方ヲ打電シ被告人松雄ハ彌一ヨリノ右招電ニ接シ同月十三日夜歸郷シテ彌一並ニイマヨリ前記弘法大師ノ御告ケナルモノヲ聞知

シ尙同月十六日夜イマ方ニ於テ同人ヨリ「稻荷ノ狐ハヨネノ祈願ニヨリ彌一及アキ等ノ生命ヲ奪ハントシ居レルモ、イマニ於テ彌一及アキ等ノ爲祈禱ヲ爲シ居ル故未タ生命ヲ奪フニ至ラサルモノナルカ當初狐ハヨネニ對シ若シ彌一及アキ等ノ生命ヲ奪フコト能ハサル場合ハヨネノ生命ヲ奪フヘキ旨約束シ居レルヲ以テ今ヨネノ生命ヲ奪フヘク同人ノ腹中ニ潛ミ居レルニ付之ヨリ立歸リテ狐ニ助勢シヨネヲ絞殺セヨ」トノ旨申聞ケラレヨネヲ殺害スヘキコトヲ教唆セラレタルヨリ豫テイマヲ祈禱師トシテ信賴尊敬スル同被告人ハ一途ニイマノ言ヲ妄信シヨネノ所行ヲ憎ムト共ニ寧ロ同人ヲ殺害シテ小柳家ノ禍根ヲ絶ツニ如カスト決意シ同日午後十一時頃彌一方ニ立チ歸リ被告人彌一及同直太郎ニ對シ自己ニ於テ右ヨネヲ殺害スル意思アルコトヲ秘シ單ニヨネヲ詰問シテ呪詛ノ事實ヲ告白セシムヘキ旨ヲ告ケテ其ノ助勢方ヲ依頼シ被告人彌一及同直太郎ハ被告人松雄カヨネヲシテ彌一及アキ等ノ生命ヲ奪フヘク稻荷ノ狐ニ祈願シ居レルコトヲ告白懺悔セシムル爲ニ同人ヲ折檻スルモノト思惟シ之ニ助勢スヘク被告人松雄ノ右依頼ヲ諾シ先ツ被告人松雄ハ即時就寢中ノヨネヲ呼起シテ同家座敷ニ連レ來リ其ノ場ニ仰向ニ押倒スヤ被告人彌一ハ兩手ヲ以テヨネノ兩膝ヲ押ヘ被告人直太郎ハ兩足ニテヨネノ兩腕ヲ踏付ケ更ニ被告人松雄ハ手ニテヨネノ腹部、胸部ヲ押ヘ付ケ尙咽喉部ヲ絞付クル等被告人三名共同ニテヨネニ暴行ヲ加ヘ因テ同人ノ左上胸部、左右兩上下肢等ニ數十箇所ノ大豆大乃至指頭大ノ皮下出血斑ノ創傷ヲ蒙ラシメ因テ平素慢性貧血、間質性心筋炎、心臟ノ肥大擴張、血管硬變、輕度ノ左側性陳舊性肋膜炎、慢性子宮內膜炎、限極性肝周圍炎等ノ病的變化アリテ輕微ナル暴力ト雖モ容易ニ心臟衰弱ヲ來シ得ル状態ニアリタルヨネヲシテ血壓ノ上昇ニ因ル急性心臟衰弱ヲ惹起シ急死スルニ至ラシメ

第二、被告人松雄ハ右犯行中彌一ノ三男ニシテヨネノ實子タル正春(當時六歳)カ目覺メ之カ現認シ居リタルヨリ右犯

行ノ直後前記イマ方ニ赴キ同人ニ對シ正春ニ於テ被告人等カヨネ殺害ノ事實ヲ現認シ居リタルコトヲ告ケテ其ノ處置ヲ相談シタルニイマハ松雄ニ對シ正春ヲモ殺害スヘキコトヲ教唆シタル爲松雄ハ犯行ノ漏洩ヲ怖レ正春ヲモ殺害セムコトヲ決意シ即時彌一方ニ引返シ就寢中ノ正春ヲ前示座敷ニ伴ヒ來リ其ノ場ニ押倒シタル後右手指ヲ以テ其ノ前頸部ヲ扼壓シ因テ同人ヲシテ窒息死亡セシメタルモノナリ

而シテ右松雄ノ殺人行爲ハ犯意繼續ニ係ルモノトス

(證據略)

法律ニ照ラスニ被告人松雄ノ判示第一ノ尊族殺人ノ所爲ハ刑法第二百條ニ第二ノ殺人ノ所爲ハ同法第九十九條ニ該當スルトコロ判示第一第二ノ各所爲ハ連續犯ナルヲ以テ同法第五十五條第十條ニ則リ一罪トシテ重キ尊族殺人ノ刑ヲ以テ處斷シ其ノ所定刑中無期懲役刑ヲ選擇シ被告人松雄ヲ無期懲役ニ處スヘク被告人彌一同直太郎ノ判示第一ノ各所爲ハ孰レモ同法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ各懲役二年ニ處シ同法第二十一條ニ依リ被告人彌一同直太郎ニ對スル未勾留日數中各百四十日ヲ右本刑ニ算入シ尙被告人彌一同直太郎ニ對シテハ情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條刑事訴訟法第三百五十八條第二項ヲ適用シ本裁判確定ノ日ヨリ孰レモ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘク訴訟費用ニ付テハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項第二百三十八條ヲ適用シ被告人等ヲシテ連帶負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年四月二日

佐賀地方裁判所刑事部

一五八 尊屬殺、殺人、殺人未遂、死體損壞、公務執行妨害

判決

本籍並住居 石川縣鳳至郡門前町字小石ロノ二十九番地

農業

山本定右衛門

自稱安田菊造事

明治三十七年六月二十日生

右被告人ニ對スル尊屬殺、殺人未遂、死體損壞、公務執行妨害被告事件ニ付金澤地方裁判所七尾支部ニ於テ昭和十四年十二月二十八日言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立ヲ爲シタルニ依リ當院ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ死刑ニ處ス

押收ニ係ル證第八號ノ魚扱一挺、同證第九號ノ長柄付下刈鎌一挺及同證第十號ノ鉈一挺ハ孰レモ之ヲ沒收ス
訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

一五八 尊屬殺、殺人、殺人未遂、死體損壞、公務執行妨害

被告人ハ心神耗弱者ニ至ラサルモ生來ノ變質者ニシテ判示居町尋常小學校四學年ヲ修了後農業ニ從事シ居タルカ約十年前實父山本富次郎(當時七十八年)カ被告人ノ姉川崎ちい方ニ引取ラレタル爲爾來石川縣鳳至郡門前町字小石ロノ二十九番地ノ居宅ニ母ト共ニ居住シ居タルモ富次郎ハ昭和十二年八月頃ニ及ヒ被告人方ニ歸リ老齡ノ爲其ノ扶養ヲ受クルニ至レリ然ルニ被告人ハ性強慾ニシテ悍猛且ツ貧農ニシテ右居宅ハ僅カニ雨露ヲ凌クニ足ル堀立小屋ニ過キス屋內暗クシテ採光通風ノ設ケナク生活粗惡ヲ極メ而カモ富次郎ノ歸來後徒食シ居ルヲ見テ生活費ノ嵩ムヲ憤リ暴行口論ヲ反覆シ又前記川崎ちいカ富次郎ノ煙草ヲ嗜ムヲ知り之ヲ購入シテ與ヘ居タルカ被告人モ亦之ヲ嗜ミ居タルニ拘ラス自ラ購入セスシテ富次郎ノ煙草ヲ喫ミ居タル爲屢々爭論ヲ醸シ兩者ノ折合極メテ圓滑ヲ缺キ感情既ニ離隔シ居タル折柄昭和十四年三月三十一日午前十時頃右居宅ニ於テ圍爐裡ヲ圍ミ暖ヲ採リ居ル際被告人カ富次郎ノ煙草ヲ喫ミ富次郎カ之ヲ叱責シタルニ端ヲ發シ口論ト爲リ富次郎カ咎メテ讓ラサルヤ之ヲ赫怒シタル利那同人ヲ殺害センコトヲ企テ、其ノ場ニ在リタル薪割用鉈(證第十號)ヲ持チ富次郎ノ右頭部ニ斬付ケ長サ約二寸ノ裂傷ヲ負ハシメ因テ同人ヲシテ該創傷ニ依ル失血ノ爲翌四月一日頃同所ニ於テ死亡スルニ至ラシメ次テ右犯跡ヲ隱蔽スル爲同月二日午前一時頃其ノ死體ヲ自宅ヨリ約二十間離レタル荒地内ニ搬出シ同所ニ於テ稻藁薪等ヲ以テ之ヲ覆ヒテ點火シ同月四日頃迄ノ間ニ該死體ヲ燒燬シテ損壞シ次テ同月五日午後二時半頃被告人ノ前記犯行ヲ探知シ捜査ノ爲被告人ノ宅ニ急行セル穴水警察署長警部桶段甚太郎同署司法主任警部補吉田儀政同署門前警部補派出所勤務巡査部長中島榮太郎同署谷口巡査駐在所勤務巡査中口勘次外五名ノ警察官吏ヲ目撃スルヤ逮捕ヲ免レンカ爲同人等ニ對シ屋內ヨリ長柄付魚杖(證第八號)ヲ以テ抵抗

シ右中口巡査ヨリ該魚杖ヲ奮ハレ逮捕セラレントスルヤ茲ニ同警察官吏等ヲ殺害センコトヲ決意シ屋內ニ在リタル長柄付下刈鎌(證第九號)ヲ打振り同屋內ニ入りタル前記中島巡査部長ノ頭部中口巡査ノ兩手背部ニ相次テ斬付ケ各切創ヲ負ハシメ以テ同警察官吏等ノ公務ノ執行ヲ妨害シ因テ中島巡査部長(當三十六年)ヲシテ該切創ニ基ク前頭及左頸頂骨複雜粉碎骨折ニ因リ生セル失血及硬腦膜外血腫ニ因ル腦壓迫ニ基キ翌六日午前三時過頃死ニ至ラシメ右中口巡査ニ對シテハ左右兩手背部ニ治療約三ヶ月所要ノ切創ヲ被ラシメタルモ殺害ノ目的ヲ遂ケサリシモノニシテ以上尊屬殺人、殺人並殺人未遂ハ犯意繼續ニ係ルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中實父ヲ殺害シタル點ハ刑法第二百條ニ死體損壞ノ點ハ同法第九十條ニ殺人ノ點ハ同法第九十九條ニ同未遂ノ點ハ同法第二百三條第九十九條ニ公務執行妨害ノ點ハ同法第九十五條第一項ニ各該當スルトコロ右公務執行妨害ト殺人並殺人未遂トハ一個ノ所爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ且右尊屬殺人並殺人及殺人未遂ハ連續犯ニ係ルヲ以テ結局同法第五十四條第一項前段第十條第五十五條ニ則リ最モ重キ尊屬殺人ノ一罪ト爲シ所定刑中死刑ヲ選擇シ被告人ヲ死刑ニ處スヘク而シテ右尊屬殺人罪ト死體損壞罪トハ同法第四十五條前段ノ併合罪ナルトコロ前者ニ付死刑ニ處スヘキトキナルニ依リ同法第四十六條第一項ニ從ヒ後者ニ付被告人ニ他ノ刑ヲ科セサルモノトス押收ノ鉈(證第十號)ハ判示尊屬殺人罪ノ同魚杖(證第八號)ハ判示公務執行妨害罪ノ同長柄付下刈鎌(證第九號)ハ判示殺人並殺人未遂罪ノ各供用物件ニシテ執レモ被告人ノ所有ニ屬スルヲ以テ刑法第十九條第一項第二號第二項ニ依リ執レモ之ヲ沒收スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ヲ適用シ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノ

トス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年七月十八日

名古屋控訴院第〇刑事部

五八〇

一五九 殺人豫備

判決

本籍並住居

兵庫縣養父郡八鹿町九鹿四百八十七番地ノ七

農業兼建築手傳職

廣 瀬 甚 吉

明治三十年四月二十一日生

右ノ者ニ對スル殺人豫備被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 分

被告人ヲ徵役壹年ニ處ス

但シ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

押收ノヒ首一挺(證第一號)ハ之ヲ沒收ス

理 由

被告人ハ昭和十五年四月十三日先妻ハナ子ニ死別シ其ノ間ニ男義明(當三年)アリタル爲特ニ懇望シテ同年五月末頃右ハナ子ノ實妹多田ときゑ(當二十二年)ヲ後妻ニ迎ヘタルカときゑハ同棲僅カ十日間位ニシテ病氣治療ニ言ヲ寄セ豊岡町御陵通りナル實兄多田圓方ニ立越シ滞在セルノミナラス爾來被告人ニ對スル態度兎角冷淡ナルモノアリ然レトモ被告ハ之モ同人ノ病氣ノ勢ト左シテ意ニ介セス之ニ治療費等ヲ與ヘテ心ヲ盡シ更ニ又同人ノ病氣快癒祈願ノ爲漸ク旅費ヲ調ヘ七月八日頃ヨリ約一週間小豆島八十八ヶ所ヲ巡禮シ同月十四日頃歸來シタルニ同日頃右多田圓方妻松代ヨリときゑハ被告人ノ右巡禮不在中前夫瀧尾某ト夜間密會セル旨聞知スルニ及ヒ嫉妬忿懣ノ情禁シ難ク依テ翌十五日頃親族ノ者ヲ介シときゑノ眞意ヲ確メタルニ最早ときゑニ被告方ニ復歸スル意思モナキコトヲ知ルニ至リ愈々憤慨シ以來數日失望落膽煩悶ヲ重ネタル末同月十八日頃遂ニときゑヲ殺害シ自己モ亦自殺センコトヲ決意シ同日午後五時半頃肩書自宅ヨリ殺害ノ用ニ供スル目的ヲ以テヒ首一挺(證第一號)ヲ携帯シ豊岡町ニ至リ殺害ノ機ヲ窺ヒ居タル折柄ときゑハ城崎郡五莊村中陰植恒富太郎方ニ赴キ居ルヲ聞知シ同月二十日午前八時過頃右ヒ首ヲ所持シテ同所ニ至リ以テ殺人ノ豫備ヲ爲シタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示殺人豫備ノ所爲ハ刑法第二百一條第九十九條ニ該當スルヲ以テ所定期限範圍内ニ於テ被告ノ懲役一年ニ處シ尙犯罪ノ情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條ニ依リ本裁判確定ノ日ヨリ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘク押收ノヒ首(證第一號)ハ本件犯罪ノ組成物件ニシテ被告人ノ所有ナルヲ以テ同法第十九條第一項第一號第二項ヲ適用シ之ヲ沒收スヘキモノトス

一五九 殺人豫備

五八一

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年八月十二日

五八二

豊岡區裁判所

一六〇 爆發物取締罰則違反、殺人豫備、住居侵入、殺人未遂

判決

本籍 高知縣幡多郡七郷村大字奥湊川二千九百九十六番ノ二地

住居 不定

無職

酒 井 要

明治三十五年一月三十一日生

右ノ者ニ對スル爆發物取締罰則違反殺人豫備住居侵入殺人未遂被告事件ニ付昭和十五年四月十三日高知地方裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當院ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役參年ニ處ス

未決勾留日數中原審ニ於ケル九拾日及當審ニ於ケル六拾日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ

第一、豫テ高知縣高岡郡仁井田村平申ニ居住中同郡窪川町大井野、佐竹安於(當三十五年)ト情交關係ヲ結ヒ妻子トモ別レ山口縣方面ニ出稼ニ赴キ右安於ト同棲シ居リタルトコロ手許不如意ナリシト安於ノ身持ニ付嫉妬シ兎角風波ノ絶エサリシヨリ安於カ昭和十四年九月中旬頃無斷逃歸リテ義理ノ叔父ニ當ル高知市帶屋町五十番地川瀬龜吉方ニ身ヲ寄スルヤ直ニ其ノ後ヲ追ヒ來リ再三復縁ヲ迫リタルモ之ヲ肯スル模様ナキノミナラス却テ被告人ヲ避ケテ其ノ姿ヲ晦シタルヨリ安於ニ對スル愛着ノ情愈々絶チ難キニ至リ極力同人ヲ説得シテ其ノ驕意ヲ促シ若シ肯セサルニ於テハ同人ヲ殺害シタル上自殺センコトヲ決意シ同年九月二十九日頃高知縣高岡郡仁井田村影野大倉土木株式會社火藥貯藏所ニ於テダイナマイト一本雷管十個導火線約四尺等ノ爆發物ヲ入手シ同人ヲ殺害セントスルノ目的ヲ以テ翌三十日之ヲ携帶シテ高知市ニ來リ爾來同年十月中旬頃迄ノ間右爆發物ヲ同市内ノ自己ノ止宿先等ニ持置キ或ハ之ヲ携帶シテ神戸市ニ赴クト共ニ高知市及神戸市ニ於テ安於ノ所在ヲ探索シ以テ爆發物ヲ所持シ同人殺害ノ機會ヲ親ヒテ殺人ノ豫備ヲ爲シ

第二、右安於カ復縁ヲ肯セス其ノ所在ヲ晦シタルハ全ク川瀬龜吉(當三十七年)ノ使喚ニ因ルモノト思惟シ人ヲ介シテ同人ニ對シ安於ノ復縁方ヲ交渉シタルモ其ノ結果面白カラサリシヨリ龜吉ニ對スル憤怨禁シ難ク遂ニ龜吉方飲食物ニ猫入ラスヲ投入シ同人ヲ毒殺センコトヲ企テカ爲同人ノ妻實惠(當三十九年)外數名ノ家族雇人等ニ於テ共ニ之

一六〇 爆發物取締罰則違反、殺人豫備、住居侵入、殺人未遂

五八三

ヲ飲食シ死亡スルニ至ルヘキコトアルモ已ムナシト爲シ茲ニ龜吉一家ノ者ヲ殺害センコトヲ決意シ毒物黃燐ヲ含有セル殺鼠劑猫入ラス十瓦チユープ入一箇ヲ買求メ同年十月二十七日午前一時半頃之ヲ携ヘテ前記川瀬龜吉方裏塀ヲ乘越ヘテ同家内ニ忍入り同家人ノ飲食ニ供スル爲同家臺所ニ置キ在リタル大根ノ煮物ヲ入レタル鍋及水桶中ニ右猫入ラス合計約七瓦ヲ入レ置キ龜吉等ニ飲食セシメントシタルモ翌朝同家家人ニ於テ其ノ異臭ニ氣付キ飲食セサリシ爲所期ノ目的ヲ遂ケサリシ

モノニシテ右殺人豫備ト殺人未遂ノ所爲ハ犯意繼續ニ係ルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中第一ノ爆發物所持ノ點ハ爆發物取締罰則第三條ニ殺人豫備ノ點ハ刑法第二百一條ニ第二ノ住居侵入ノ點ハ刑法第三百三十條ニ各殺人未遂ノ點ハ同法第二百三條第九十九條ニ該當シ右第一ノ爆發物所持ト殺人豫備ニ付テハ右罰則第十二條刑法第十條ニ依リ重キ爆發物所持ノ罪ニ從フヘキトコロ第二ノ殺人未遂ノ所爲ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ之ト第一ノ殺人豫備トハ判示認定ノ如ク連續ニ係リ住居侵入ト殺人未遂トノ間ニハ互ニ手段結果ノ關係アルヲ以テ刑法第五十四條第一項前段後段第五十五條第十條ヲ適用シ以上ハ結局最モ重キ川瀬龜吉ニ對スル殺人未遂罪ノ刑ニ從フヘク其ノ所定刑中有期懲役刑ヲ選擇シタル刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役三年ニ處シ同法第二十一條ニ依リ主文第二項掲記ノ如ク未決勾留日數中ノ一部ヲ本刑ニ算入スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

本件控訴ハ理由ナシ

昭和十五年七月二十三日

大阪控訴院第〇刑事部

一六一 自殺教唆

判決

本籍 愛媛縣温泉郡三津濱町久寶町十二番地
住居 神戸市神戸區北長狹通七丁目七十九番地
阿部文吉方
船員 渡部留吉

明治四十二年六月二十九日生

右ノ者ニ對スル自殺教唆被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ懲役一年ニ處ス

理由

被告人ハ船員ニシテ昭和十三年九月以降吉本汽船株式會社所有船大榮丸ニ水夫長トシテ乘組ミ居リシカ夙ニ肺患ニ罹リ常ニ厭世ノ念ヲ抱キ居リタルトコロ昭和十四年六月一日船長ト口論ノ末和歌山縣西牟婁郡關參見港ニテ下船シ同日

以降同月五日迄同町温泉旅館參見館ニ宿泊シ居リタルカ其ノ宿泊料ノ支拂ニ窮シタル結果同月六日妻梅代ヲ同郡田邊町文里飲食店萬亭事中井駒之助方ニ酌婦トシテ住込マシメ前借金百五十圓ヲ受取り右宿泊料支拂ニ赴ク途次其ノ全部ヲ遊興ニ費消シタル爲同月十一日梅代ヲ伴ヒ同郡瀬戸鉛山村千三百三十五番地みどり旅館事山崎長吉方ニ投宿シ更ニ金策ニ奔走シタルモ意ノ如クナラサリシヨリ深ク右自己ノ不始末ヲ愧ツルト共ニ益々前途ヲ悲觀スルニ至リ茲ニ梅代ト共ニ自殺セムコトヲ決意シ其ノ翌十二日同所ニ於テ同女ニ對シ共ニ自殺セムコトヲ懇懇シテ梅代ヲシテ其ノ旨ノ決意ヲ爲サシメテ自殺ノ教唆ヲ爲シ以テ同日午後八時頃同所ニ於テ同女ヲシテ被告人ト共ニカルモチン百六十五錠ヲ嚥下セシメ因テ同月十四日午前一時三十分同所ニ於テ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據略)

尙被告人ハ昭和十年十一月二十一日高松區裁判所ニ於テ竊盜罪ニ因リ懲役八月ニ處セラレ當時右刑ノ執行ヲ受ケ終リタルモノニシテ右事實ハ被告人ノ當公廷ニ於ケル其ノ旨ノ供述ニ依リ之ヲ認ム
 法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百二條ニ該當スルヲ以テ所定刑中懲役刑ヲ選擇シ前示前科アルニ依リ同法第五十六條第一項第五十七條ニ則リ累犯加重ヲ爲シタル刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役一年ニ處スヘキモノトス
 仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年七月十四日

〇〇裁判所

一六二 自殺幫助

判決

本籍 名古屋市中區葉場町六十三番地

住居 同所

鐵工業

黒田 敷 芳

當二十年

主文

右ノ者ニ對スル自殺幫助被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

被告人ヲ懲役六月ニ處ス

理由

被告人ハ昭和十四年三月頃ヨリ名古屋市中村區壽町貸座敷業惠美十樓事櫻井敏雄方抱娼妓昇事岡崎一榮(當二十年)ト馴染トナリ屢々登樓スル中遊興費ニ窮シ尙同女カ自殺ノ希望ヲ漏シタルヨリ共ニ自殺センコトヲ決意シ同年六月七日午前一時半頃同樓二階同女ノ居間ニ於テ同女ニ毒藥青酸加里ヲ與ヘテ之ヲ嚥下セシメ因テ同日午前三時頃中毒ノ爲メ死亡スルニ至ラシメ以テ其自殺ヲ幫助シタルモノナリ

(證據略)

一六二 自殺幫助

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百二條ニ該當スルヲ以テ所定刑中懲役刑ヲ選擇シ其刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役六月ニ處スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年四月十日

名古屋區裁判所

一六三 囑託殺人

判決

本籍 富山縣上新川郡大澤野村長附百三十九番地
住居 不定

元料理人

庄 司 幸 作

大正七年三月二十日生

右者ニ對スル囑託殺人被告事件ニ付檢事某關與審理判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役一年ニ處ス

理 由

被告人ハ横濱市中區本牧料理業田中竹次郎方ニ料理人見習トシテ被雇中昭和十一年秋頃ヨリ同家女給小林フミト戀愛關係ヲ生スルニ至リタルモ同人モ被告人モ共ニ病弱ナル故假令結婚スルモ安逸ナル生活ヲ爲シ得ス寧ロ合意心中スルニ如カスト思惟シ被告人ハ昭和十二年四月十二日小林フミハ其翌十三日何レモ田中方ヲ無斷家出シ相携サヘテ同月十六日午後四時頃被告人ノ妹庄司きみノ勤務先ナル福井縣敦賀市東洋紡績株式會社敦賀工場ニ至リ同人ニ面會シタル後同縣敦賀郡愛發村奥野地内タル同村疋田岸本貞見所有ノ山林ニ赴キ同夜九時頃被告人ハ豫テ用意シタルカルモチン三十錠入三箱ヲ小林フミハ同シク二箱ヲ何レモ嚥下シ一時昏睡シタルモ翌十七日正午頃覺醒シタルヲ以テ更ニ縊死セムコトヲ決意シ小林フミハ自己ノ帶止メ用ノ眞田打紐及帶揚用布紐トヲ結ヒ合セ之ヲ頸部ニ捲キ附ケ縊死セムトシタルモ果サス被告人ニ對シ死ニ致サムコトヲ依囑シタル爲メ被告人ハ小林フミカ頸部ニ捲キ附ケ居リタル紐ノ兩端ヲ強ク引キ締メ因テ即時同人ヲ窒息死ニ致シタルモノナリ

右事實ハ被告人カ當公廷ニ於テ判示事實ヲ自供セルト鑑定人桑島直樹ノ鑑定書ニ小林フミノ屍前頸部ニ於テハ舌骨及甲状軟骨部ニ項部ニ於テハ髮際ノ下方一横指ノ部ニ何レモ略、水平ノ方向ニ走レル索溝アリ其幅ハ一・五乃至一釐ニテ何レモ周圍ノ皮膚面ヨリ少シク陷凹シ溝縁ハ略、直線狀ヲ呈シ凹凸殆ントナク溝底ハ略、平滑ニテ硬度ハ軟溝部ノ皮下ニテ一般ニ出血ナク唯舌骨上ヲ通ル索溝中ニ於テ左耳下方部ニ小指頭大ノ皮膚變色部ヲ存シ同部ニ於テノミ皮下ニ出血ヲ存シ頸部ノ深部ニハ舌骨及甲状軟骨ニ骨折部カアリ其周圍筋肉内ニハ少許ノ出血ヲ認ム而シテ前記前頸部ニ存スル二條ノ索溝ト項部ニ存スル一條ノ索溝トハ一條ノ索條物ヲ頸部ニ同時ニ少クトモ二回位纏絡作用セシメタル爲メニ生シタルモノト考フ因テ本屍ハ他爲ニ因リ絞頸セラレタルモノニシテ絞頸ノ兇器ハ本屍解剖着手時ニ本屍ノ頸部ニ見出サレタル紐及帶揚ノ軟性索條物ニテ死因ハ絞頸ニヨル急性窒息死ナリト推

定スル旨ノ記載アルトヲ

綜合シテ之ヲ認ム

法律ニ照スニ被告人ノ右所爲ハ刑法第二百二條ニ該當スルヲ以テ其ノ刑中懲役刑ヲ選擇シ其刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役一年ニ處スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十二年六月四日

敦賀區裁判所

一六四 承諾殺

判決

本籍並住居

青森縣三戸郡戸來村字下丹母二十八番一號地

農業

藤村清司

大正四年十二月四日生

右ノ者ニ對スル殺人被告事件ニ付テ當裁判所ハ檢事某立會審理ヲ遂ケ左ノ通り判決スル。

主文

被告人ヲ懲役一年六月ニ處スル。

但此ノ裁判確定ノ日カラ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫スル。
訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トスル。

理由

被告人ハ昭和十二年三月現役兵トシテ關東軍騎兵旅團裝甲車隊ニ入隊服務中肋膜炎ニ罹リ各地ノ陸軍病院テ療養シタ後盛岡陸軍病院ニ移サレ昭和十四年十一月現役免除トナツテ歸郷後ハ専ラ靜養ニ努メテ居タ。トコロカ同年十二月十日頃知合ノ青森縣三戸郡五戸町ノ小料理屋一二三亭事三浦ミス方ニ立寄ツタ際偶々同家ノ抱酌婦テ千恵子ト呼ハレテ居ル細越トメト云フ女(當一十歲)ニ會ツタカ圖ラスモツレハ會テ被告人カ除隊トナツテ盛岡カラ歸郷シヨウトシテ汽車ニ乗ル時人込ミノ中テ過ツテ被告人ノ足ヲ踏ミ詫ヒタ事カアツテ確カニ見覺ヘノアル女テアツタノテ意外ナ奇遇カ緣トナツテ相識ル仲トナリソレ以來頻繁ニ同家ニ出入シテ次第ニトメト馴染ヲ重ヌルニ至ツタカトメハ實家カ貧乏ナ爲幼少ノ頃ヨリ養女ニ遣ラレ不遇ナ環境ニ生立チ數奇ニ絡マレタ女タケニ被告人ヲ見込テ熱烈ナ愛情ヲ寄セ昭和十五年三月頃ニハ女カラ求メテ終ニ二人ノ間ニ夫婦約束カ出來ルマテニ至ツタ。ソコテ被告人ハ何トカシテ女ヲ身請シヨウトシテ金ノ調達ニ苦心スル中被告人家ニ於テハ兄ノ清志カ今次事變ニ應召出征シテ名譽ノ戰死ヲ遂ケ跡ニハ其ノ遺妻テアル嫂ノソメ(當一十五歲)ト一女カアルノテ昭和十五年四月頃祖父房吉ヤ父清美ハ一家存榮ノ爲トアツテ被告人ニ對シ嫂ソメト一緒ニナツテ藤村家ヲ立テル様ニ頻リト勤メルノテ被告人モ家ノ將來ヲ思ヒ終ニ心機一轉シテ嫂夫婦ニナル事ヲ承諾シタ。丁度其ノ頃トメハ五戸町ノ勤メ先ヲ飛出シテ養家ノ三戸郡留崎村梅内字城ノ下料理屋細越要次郎方ニ歸ツテ來テ居タカ被告人カ嫂ソメト一緒ニナルト云フ噂ヲ人傳ニテ聞イテ氣ヲ焦リ再三被告人ニ呼出ノ手

紙ヲ出スノテ被告人ハトメニ手切金ヲ與ヘテ是レ迄ノ行掛リヲ捨テ關係ヲ絶ツ氣ニナリ祖父房吉カラ二百三十圓ノ金ヲ貰ツテ四月二十三日頃要次郎方ニ行キトメニ餘儀ナイ事情ヲ話シ金ヲ遺ルカラ別レテ吳レト情理ヲ説イタカトメハトウシテモ肯入レス被告人モスルノト引摺ラレテ心ナラスモ同家ニ十日間程滞在シタ。其ノ内五月三日ニナツテトメハ急ニ岩手縣繫溫泉ニ行カウト言出シタノテ拒ミモ出來ス同意シテ一緒ニ細越方ヲ出テ繫溫泉ニ行キ同夜ハ宿屋テ一泊シタカ其ノ際始メテトメヨリ一緒ニ死ンテ吳レトノ話カアリ被告人モ當惑ハシタカ今更家ニモ歸レヌト云フ氣持ニナリ一旦トメト情死スルコトヲ承諾シタ。ソレカラ被告人ハトメト共ニ岩手縣繫溫泉ヲ經テ五月五日午後一時頃宮城縣宮城郡松島町ニ行キ同町パークホテルニ投宿シタカ其ノ間ニ熱々家ノ事ヲ祖父、兩親ノ事等ヲ考ヘ其ノ方ニ心ヲ惹カレテ死ヌ杯ト云フ氣ニナレス一旦決シタ意思ヲ顯シトメニモ思止マツテ家ニ歸ラウト極力勸メタカ女ハトウシテモ死ヌト云ツテ肯入レス松島ニ着イタ頃ハ兩名共懊惱ト煩悶テ殆ト疲勞困憊ノ極ニ達シテ居タ。翌五月六日ハ女ノ氣ヲ引立タシムル爲附近ノ見物ヲ思立ツテ午前九時頃一緒ニホテルヲ出タモノ、トメハ營ニ死場所ヲ求メルノミ急テ一度ハ島ノ崖カラ海ニ飛込マウトシタノテ漸ク之ヲ制シテ宥メナカラ附近ヲ歩キ廻ツタ末同日午後一時頃女ハ宮城電鐵松島驛ノ南方十町餘ヲ距テ踏切ヲ横切リズンノ山徑ヲ上リ松島町宇大澤平十六番ノ宮城縣有林内ニ駈込シテテ自分モ其ノ跡ヲ追ヒ杉林ノ道端ニ腰ヲ下シテ女ト一緒ニ休ンタ。其處テモ女ハ執拗ニ「一緒ニ死ンテ吳レ」ト迫ツタカ自分トシテハ最早死ヌ氣ハナカツタノテ「其ノ様ナ事ヲ云ハスニ家ニ歸ラウ」ト勸ムレト肯カハコソ女ハ「歸リタクバ一人テ歸レ」ト云ヒ放チ隠シ持ツテ居タクレゾールノ這入ツタ場ヲ取出シテ飲マウトシタノテ被告人ハ其ノ場ヲ奪ヒ取り前方ニ投捨テタカ其ノ時女ノ顔面ニクレゾールカ滯レカ、ツタトコロ女ハ何事カ一聲叫ビ乍ラ坐ツタ儘テ自分ノ

腰ニ締メテ居タ帶揚ヲ解キ素早ク之ヲ自分ノ頸ニ二重ニ廻シテ一結ヒシ自ラ兩手テ絞メ乍ラ仰向ニ倒レワナノト身體ヲ震ハセテ苦シミ出シタノテ被告人ハ見ルニ堪ヘ兼ネ斯クナル上一層ノ事女ノ望ニ任セ餘リ苦メスニ樂ニ死ナシテ遺レハ本人モ満足テアラウソシテ自分モ其ノ跡ヲ追ツテ死ヌヨリ外ナイト考ヘテ咄嗟ニ意ヲ決シトメノ身體ニ跨ツテ突膝ノ姿勢ニナリ兩手テ帶揚ノ兩端ヲ握ミ女カ絞メテ死切レスニ居ル上カラ更ニ力ヲ貸シテ強ク絞メ付ケタトコロ女ハ被告人ノ爲スカ儘ニ任セテ息ヲ引取り遂ニ此ノ絞首ニ因ル窒息ノ爲即死スルニ至ツタモノテアル。

以上ノ事實ノ中トメノ死因ノ點ハ暫ク措キ此ノ事件ノ筋道ハ總テ被告人カ當公判廷テ自供スルトコロテアリ又死因ノ點ハ鑑定人村上末男カ昭和十五年五月二十八日附テ作成シタ鑑定書中ニ本屍ノ死因ハ絞頸ニヨル窒息ト認ムル旨ノ記載カアルノテ之ヲ綜合スレハ右ノ事實ハ十分ニ認メルコトカ出來ル

而シテ相手ノ本人タル細越トメハ既ニ堅ク死ヲ決シ自ラ其ノ手段ヲ執ツタ程テアルカラ被告人ノ本件行爲ハ被殺者タルトメノ意思ニ反シタモノトハ考ヘラレナイノミナラス寧ロ开ハ本人ノ念望テアリ且満足トスル所テアラウコトハ前段認定ノ經緯及其場ノ狀況カラ推シテモ窺知スルニ難クナイ。刑法第二百二條ニ被殺者ノ承諾ヲ得テ之ヲ殺ス場合ノ規定カアルカ夫レハ單ニ被殺者カラ殺害ニ付テノ明示的ナ承諾カアツタ場合ニ限ラス苟クモ殺害行爲カ被殺者本人ノ意思ニ反シナイノミナラス寧ロ夫レカ本人ノ望ミニ叶ヒ満足テアルヘキ事ヲ認メラル、本件ノ如キ場合ヲモ包含セシムルノカ情理ニ適シタ解釋テアルト考ヘルカラ被告人ノ本件所爲モ正ニ右法條ノ規定ニ該當スルモノト謂フヘキテアル。ソコテ同條所定刑中懲役刑ヲ選擇シ其ノ刑ノ範圍内テ被告人ヲ懲役一年六月ニ處シ尙被告人ニハ刑ノ執行ヲ猶豫スヘキ情狀アルモノト認メ同法第二十五條ニ依リ此ノ裁判確定ノ日カラ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫シ訴訟費用ハ刑事訴

訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノテアル。
ソコテ主文ノ通り判決スル。

昭和十五年九月十六日

仙臺地方裁判所刑事部

五九四

第二十七章 傷害ノ罪

一六五 傷害

判決

本籍 北海道岩内郡岩内町大字鷹臺町四番地
住居 樺太名好郡名好村大字安別字明石無番地

鍛冶職

山 森 惣 太 郎

明治三十八年十月二十七日生

右ノ者ニ對スル殺人未遂被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

未決勾留日數中七拾日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ昭和十一年六月中旬頃岩木スエ(當三十二年)ト内縁ノ夫婦ト爲リ樺太長濱郡知床村所在美田炭坑ニ稼働シ居
リタルカ屢、スエヲ虐待シタル爲スエハ被告人ヲ厭ヒ同十二年七月上旬頃同炭坑夫野呂豊春(當三十二年)ト夫婦約
束ヲ爲シ相携ヘテ樺太榮濱郡白浦炭坑ニ逃走シタルヲ以テ被告人ハ痛ク憤激シ直ニ同所ニ至リ其ノ非ヲ責メタルカス
エヲ再ヒ引戻スコトノ難キヲ覺リ双方協議ノ上離別シ其後被告人ハ轉々トシテ居ヲ變ヘ同十三年四月十五日肩書住居
所在安別炭坑ニ至リ稼働シ居リタルトコロ同年五月八日頃同所ニ於テ偶、スエ等ト邂逅シ茲ニスエニ對スル未練ノ情
再燃シ復縁ヲ迫リタルカ同人ノ拒絕スルトコロトナリ爾來閤々ノ日ヲ送リタル折柄同年五月十三日朝來飲酒酩酊ノ揚
句スエ及野呂ノコトニ想ヒ至リ無念遺ル方ナク遂ニ野呂方ニ乘込ミ同人及スエニ暴行ヲ加ヘ以テ憤憤ヲ晴サシコトヲ
企圖シ翌十四日午前一時頃當時被告人ノ起居セル前記安別炭坑夫合宿ヨリ鉞(證第一號)ヲ携ヘ同炭坑夫社宅十五
號ノ三舍ナル右野呂豊春方ニ至リ同家三疊間ニ熟睡中ノ同居人安彦トミヲ岩木スエト誤信シ右鉞ノ峯ヲ以テ同女ノ頭
部ヲ一回毆打シ次テ其ノ隣室ナル八疊間ニ熟睡中ノ野呂豊春ノ枕許ニ至リ又右鉞ヲ以テ同様同人ノ頭部ヲ一回毆打シ
タルカ其ノ際先ニ毆打セシ婦女ハ目的ノスエニ非スシテ安彦トミナルコトヲ覺知スルヤ更ニスエニ傷害ヲ加ヘント右
鉞ヲ以テ右野呂ノ傍ニ就寝セル同女ヲ毆打セントシタルトコロ過リテ傍ニ熟睡セル野呂ノ左額部ヲ毆打シ因テ安彦ト
ミノ顛顛部及顛頂部ノ中間部ニ治療日數約二十日野呂豊春ノ顛頂部及前額部ニ治療日數約十五日ヲ要スル傷害ヲ負ハ

一六五 傷

害

五九五

シメタルモノニシテ右ハ犯意繼續ニ係ルモノナリ

五九六

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百四條第五十五條ニ該當スルヲ以テ所定刑中懲役刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役貳年ニ處シ同法第二十一條ニ依リ未決勾留日數中七拾日ヲ其ノ本刑ニ算入シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條ニ依リ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス公訴事實中被告人カ昭和十三年五月十四日午前一時頃榊太名好郡名好村大字安別字明石所在安別炭坑坑夫社宅十五號ノ三舍ニ於テ鉞(證第一號)ヲ振ルヒ殺害ノ意思ヲ以テ岩木スエニ斬付ケントシタルモ安彦留之助ノ爲制止セラレ殺害ノ目的ヲ遂ケサリシトノ點ハ犯罪ノ證明ナキモ判示有罪ノ事實ト連續犯ノ關係アリトシテ公訴ヲ提起セラレタルモノナルヲ以テ特ニ主文ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲サス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十三年十一月十二日

榊太地方裁判所刑事部

一六六 傷 害

判 決

本籍並住居

大分縣宇佐郡天津村大字下庄四百四十一番地

日備稼

松 本 末 義

大正四年五月六日生

右ノ者ニ對スル傷害被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

但未決勾留日數中二十日ヲ右本刑ニ算入ス

理 由

被告人ハ昭和十三年十月頃古寺イトキト内縁關係ヲ結ヒ爾來同棲シ來リタルトコロ平素嫉妬心強ク又右イトキニ於テ同宿男子ノ衣類ノ洗濯及同人等トノ戲遊アリタル爲甚ク狼狽シ實家ニ引取ラシメタルコトアルモ思慕尙去リ難ク昭和十四年十月初頃八幡市立町一丁目大坪三郎方ニ於テ再ヒ同棲スルヤイトキヨリ同人カ右實家ニ在リタル頃被告人ノ承諾ナク飯焚等ニ出稼キ鶴崎踊ヲ爲シ樂カリシ旨聞知シ同女ヲ叱責スル等ノコトモアリテ後間モナク些細ノコトヨリ口論シ同女ノ變心ヲ虞ルルノ餘リ同女ノ放縱ハ其ノ美貌ノ故ナリト輕信シ寧ろ其ノ容貌ヲ損シ以テ放縱ヲ矯メ變心ヲ防止スルニ然カスト思惟シ同月七日硫酸五百瓦入一瓶ヲ購入シ其ノ機ヲ伺ヒ居リタルトコロ同月九日同女歸郷ノ申出ニ端ヲ發シ復々口論ト爲リタルヨリ一旦自宅ヲ出テ飯酒歸宅ノ上更ニ口論ヲ續ケ被告人ハ同夜右居宅ニ於テ就床仰臥セル同女ニ馬乗りトナリ歸ヘルナラ形見ヲ遺ルト言ヒ放チ其ノ顔面ニ右硫酸ノ大半ヲ注キ掛ケ以テ其ノ顔面左側左肩胛部右上肢ニ治療約四ヶ月ヲ要スル火傷ヲ負ハシメ因ツテ左耳ノ高度ノ難聴左眼上下眼瞼結膜外翻頭部左屈約四十五度迄右旋約三十度迄及右上肢ノ屈伸約七十度ニ制限セララル機能障害ヲ生セシメタルモノナリ

一六六 傷 害

五九七

(證據省略)

五九八

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百四條ニ該當スルヲ以テ所定刑中懲役刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役二年ニ處シ尙同法第二十一條ニ從ヒ未決勾留日數中二十日ヲ右本刑ニ算入スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年四月一日

中津區裁判所

一六七 傷 害

判 決

本籍並住居

佐賀縣三養基郡中原村大字原古賀千五百三十四番地

無職

堤

文 雄

明治三十五年九月二十日生

右ノ者ニ對スル傷害被告事件ニ付昭和十四年二月十三日佐賀區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人竝ニ檢事ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ罰金四十圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

理 由

被告人ハ元小學校訓導ナルトコロ佐賀縣三養基郡中原村大字原古賀所在中原尋常高等小學校ニ主席訓導トシテ勤務中昭和十三年十二月五日曜日放課後午後四時頃同校高等科二年女生徒擔任訓導永瀨ヨシニ所用アリテ其ノ教室ニ赴キ同訓導ノ受持生徒ニシテ佐賀縣女子師範學校入學受験準備ノ爲居残り勉學中ナリシ宮原フサエ及矢動丸ツルチヨノ兩名ニ對シ「永瀨先生ハ留守カ」ト問ヒタルニ右兩名カ即答セス再三尋ネタル末宮原フサエカ勉強シ乍ラ「知りマセヌ」ト答ヘタルノミナルニヨリ當時偶々同校ニテハ明確ニ返答スル様生徒ニ習慣付ケントテ返事強調週間施行中ナリシヲ以テ其ノ態度ニ對シ不滿ヲ懷キタルカ同日午後五時二、三十分頃ニ至ルモ猶右兩名カ前記教室内ニ殘留セルヲ認メ其ノ入口ヨリ「遅イカラ歸レオ前達ハ先生ノ許シヲ受ケテ勉強シテ居ルノカ」ト尋ネタルニ同人等カ先生ノ許シヲ受ケタリト言フニハ非ス自發的ニ勉強シ居リタルコトトテ返辭ニ窮シ應答ヲ躊躇シタル爲生意氣ニ基ク不遜ノ態度ナリト斷シ憤慨シテ教室内ニ入り手掌ヲ以テフサエノ右頬邊ヲ數回毆打シ因テ同人ノ右耳鼓膜ニ全治約二ヶ月ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百四條ニ該當スルヲ以テ其ノ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ所定額ノ範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金四十圓ニ處スヘク右罰金ヲ完納スルコト能ハサル場合ニ於テハ同法第十八條ニ則リ金貳圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘキモノトス

一六七 傷 害

五九九

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年四月四日

六〇〇

佐賀地方裁判所刑事部

一六八 傷害教唆

判決

本籍 京都市中京區壬生朱雀町百二番地
住居 同市同區聚樂廻南町十九番地

新興キネマ撮影所員

笹井 榮次郎

明治二十九年十二月五日生

本籍 京都市上京區新町通寺ノ内上ル二丁目大心院町四十番地
住居 同市左京區下鴨宮崎町百三十五番地

松竹撮影所臨時人夫係

松本 常吉

明治四十二年十二月三日生

右被告人榮次郎及常吉ニ對スル傷害教唆被告事件ニ付昭和十三年二月四日京部區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人等ヨリ適法ナル控訴ノ申立並被告人榮次郎ニ對シ檢事ヨリ附帶控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事

某關與更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人笹井榮次郎ヲ懲役壹年ニ被告、人松本常吉ヲ懲役貳年ニ各處ス被告人笹井榮次郎ニ對シ原審ニ於ケル未決勾留日數中拾五日ヲ被告人松本常吉ニ對シ同參拾日ヲ夫々右本刑ニ算入ス

理由

被告人笹井榮次郎ハ往年男達ヲ以テ任シタル仲仕親分荒寅ノ子ニシテ之ヲ繼キタル所謂千本組ノ身内ナリシカ近時松竹キネマ株式會社ノ姉妹會社ナル新興キネマ株式會社京都撮影所長永田雅一ノ知遇ヲ受ケ同所員ト爲リタルモノ被告人松本常吉ハ松竹キネマ株式會社下加茂撮影所臨時人夫係ト爲リ其ノ父ノ代ヨリ同會社ノ恩顧ヲ受ケタルモノナル處昭和十二年十月十三日頃松竹キネマ株式會社(以下松竹ト略稱)下加茂撮影所所屬映畫俳優林長二郎事長谷川一夫(以下長二郎ト略稱)カ同會社ヲ脱退シ東寶映畫株式會社(以下東寶ト略稱)京都撮影所ニ入所スルニ確定シタル旨新聞紙上ニ發表セラルルヤ齊シク右長二郎カ松竹ノ恩義ヲ忘レタル不徳漢ナリト憤激シ同人ヲ膺懲シ併セテ松竹ノ歡心ヲ買ヒ自ラノ利益ト榮達ヲ圖ラムコトヲ欲シ被告人榮次郎ハ昭和十二年中旬京都市中京區聚樂廻南町十九番地ナル自宅ニ於テ偶々、錢別名下ニ金錢ノ無心ニ來リタル其ノ輩下タル増田三郎ニ對シ長二郎ノ行動ヲ非難セル新聞記事ヲ指シ「オ前等ハ五圓ヤ十圓ノ事テ何ヲ言ツテ居ル之ヲ見ヨ之テ五百ヤ千ノ金ハ取レルテハナイカ」ト申向ケ其ノ意味ヲ解シ兼ネタル同人ヨリ諸種問質セラルルヤ「皆言ハナクトモ判ツテ居ルテハナイカ皆迄言ツテ教唆ニナル長二郎ヲ遣ツタラ松竹ノ畢丸ヲ握レルテハナイカ」等ト申聞ケ暗ニ長二郎ニ暴行ヲ加フヘキコトヲ仄シ茲ニ於テ増田三郎ハ

其ノ翌日頃前記永田雅一ト面接シ同人モ亦長二郎膺懲ノ意思ヲ有スルモノト推斷シ右兩事實ニ因リ愈々長二郎ニ暴行ヲ加フヘキコトヲ決意シテ被告人榮次郎ハ右三郎ニ對シ長二郎ニ暴行ヲ加フヘキコトヲ決意セシメテ教唆シ被告人常吉ハ昭和十二年十一月一日頃同市東山區四條通大橋東入紅喫茶店ニ於テ同人外數名間ニ長二郎ノ東寶入ヲ難詰セル談話ノアリタル際同席ノ金成漢ニ對シ「長二郎ヲ遣付ケレハ良イ顔ニナレル」「中嶋(金成漢ノ通稱)オ前遣レ」ト申向ケ更ニ同月二日頃同市中京區河原町通四條上ル東側ヒナドリ喫茶店前街路ニ於テ右金成漢ニ出會スルヤ同人ニ對シ長二郎ノ眼鼻ヲ傷付クルニ於テハ松竹ヨリ多額ノ金員ヲ支給セラレ且松竹ニ入所シ得ル旨申向ケ更ニ原審相被告人増田三郎ハ同日頃同區河原町通六角下ル西側撞球店河原町會館前街路ニ於テ其ノ乾兒タル金成漢ヨリ長二郎傷害後ニ於ケル松竹ノ庇護確保ニ付盡力方ヲ要請セラルルヤ之ヲ快諾シ同人ニ對シ長二郎ニ暴行ヲ加フヘキコトヲ申向ケ被告人常吉及三郎ハ右金成漢ヲシテ愈々長二郎傷害ノ決意ヲ固メシメテ各教唆シ因テ原審相被告人金成漢ハ昭和十二年十一月十二日午後五時五十分頃同市右京區太秦上刑部町十番地東寶京都攝影所表門西方約半町ノ道路上ニ於テ其ノ所携ノ安全剃刀ノ刃ヲ仕込ミタルナイフヲ以テ長二郎ノ左頰部ヲ斬付ケ因テ長二郎ノ同部ニ全治約三週間ヲ要スル切創ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據省略)

被告人笹井榮次郎ハ昭和十年十一月十九日大阪控訴院ニ於テ恐喝罪ニ因リ懲役一年(未決勾留日數百五十日算入)ニ處セラレ當時右刑ノ執行ヲ受ケ終リタルモノナルコトハ同被告人ノ當公廷ニ於ケル其ノ旨ノ供述ニ依リ被告人松本常吉ハ同年九月三日大津區裁判所ニ於テ暴力行爲等處罰ニ關スル法律違反ニ因リ懲役四月(未決勾留日數二十日算入)ニ處

セラレ當時右刑ノ執行ヲ受ケ終リタルモノニシテ右ハ同被告人ノ當公廷ニ於ケル其ノ旨ノ供述ニ依リ各之ヲ認ム法律ニ照スニ被告人笹井榮次郎ノ所爲ハ刑法第六十一條第二項第一項第二百四條ニ被告人松本常吉ノ行爲ハ同法第六十一條第一項第二百四條ニ各該當スルヲ以テ所定刑中懲役刑ヲ選擇シ孰レモ前示前科アルヲ以テ同法第五十六條第五十七條ヲ適用シ法定ノ加重ヲ爲シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人笹井榮次郎ヲ懲役一年ニ被告人松本常吉ヲ懲役二年ニ各處スヘク同法第二十一條ニ則リ各被告人ニ對シ原審ニ於ケル未決勾留日數中被告人笹井榮次郎ニ付テハ十五日ヲ被告人松本常吉ニ付テハ三十日ヲ夫々右本刑ニ算入スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

被告人兩名ノ本件控訴並檢事ノ附帶控訴ハ孰レモ其ノ理由ナシ

昭和十三年四月二十三日

京都地方裁判所第〇刑事部

一六九 傷 害

判 決

本 籍 (自稱)朝鮮慶尙南道釜山府綠町二丁目七番地
住 居 兵庫縣明石郡垂水町鹽屋八百四番地 鄭致尙方
土 工

東幸一事 鄭 斗 釜

當三十三年

右ノ者ニ對スル殺人未遂被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

但未決勾留日數中六拾日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ肩書鄭致尙ノ輩下トシテ土工ヲ爲シ居リタルモノナルトコロ昭和十五年九月二十二日午前七時頃居町鹽屋字南谷所在毘沙門山ノ中腹ニ於テ同僚二名ト共ニ其ノ下請負ニ係ル草刈ニ從事中前記飯場ノ同輩金伯連外三名カ右草刈場ニ來タリ金伯連カ右仕事ノ仲間ニ入レテ吳レト強要シタルカ被告人ハ其ノ態度ノ不遜ナルヲ憤リテ之ヲ拒絕シタルヨリ口論トナリタル際偶々其ノ附近ヲ通り合ハセタル右飯場ノ同輩金山一郎事李成大(當時三十三年)カ「仲間ニ入レテ吳レヌナラ錄テヤツテ仕舞ヘ」ト聲援シタルニ對シ「誰ヤ緣起ノ惡イコトヲ言フノハ、上ツテ來イ」ト應酬シ李成大カ右刈場附近ニ登リ來タルヤ先ス被告人ニ於テ機先ヲ制シテ「殺シテ見イ」ト氣勢ヲ示シツツ右足ヲ以テ李成大ノ腹部ヲ蹴リタルカ李成大モ亦所携ノ辨當箱ヲ以テ被告人ノ頭部ヲ毆打シ更ニ被告人ノ胸倉及右手ヲ捉ヘツツ右足ヲ以テ被告人ノ腰部ヲ強蹴シ茲ニ格闘トナルヤ被告人ハ傷害ノ意思ヲ以テ兩手ニ一挺宛所持シ居リタル草刈錄ニ挺(昭和十五年領置第二七九號ノ一)ヲ以テ數回李成大ニ斬付ケ因テ同人ノ左胸背部等ニ治療約一ヶ月ヲ要スル傷害ヲ蒙ラシメタルモノナリ

(證據省略)

辯護人ハ被告人ノ本件所爲ハ正當防衛ニ出テタルモノナリ少クトモ所謂過剩防衛ニ相當スル旨主張スレトモ被告人ハ判示李成大ト闘争スルニ際リ判示ノ如ク機先ヲ制シ先ツ自ラ右足ヲ以テ李成大ノ腹部ヲ蹴リ仍テ同人ノ反撃ヲ誘致シテ格闘トナリタル末本件傷害ヲ惹起スルニ至リタルモノニシテ即チ被告人ノ本件行爲ハ所謂喧嘩闘争ノ爲ニ行ハレタル加害行爲ニ外ナラスシテ相手方ヨリ所謂急迫不正ノ侵害ヲ受ケ之ヲ除去セムカ爲ニ爲シタル防衛行爲ナリト解スヘキニ非ルヲ以テ右辯護人ノ主張ハ之ヲ採用スルニ由ナシ

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百四條ニ該當スルヲ以テ所定刑中有期懲役刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役貳年ニ處スヘク同法第二十一條ニ則リ未決勾留日數中六拾日ヲ右本刑ニ算入スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ依リ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年二月十日

神戸地方裁判所第〇刑事部

一七〇 傷害致死

判 決

一七〇 傷害致死

本籍 佐賀縣佐賀郡春日村大字久池井三千六十四番地
住居 福岡市吳服町六十五番地 山口茂一方
洋服仕立職

堤 兼 吉

當三十年

右者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役壹年ニ處ス

押收ニ係ル裁縫鉢一個(證第一號)ハ之ハ沒收ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ昭和十五年二月頃從妹ナル山口キメ子(當時二十一歲)ト結婚シ爾來内縁ノ夫婦トシテ圓滿ニ同棲シ洋服仕立職ヲ營ミ來リタルモノナルトコロ同年十二月六日午後二時過頃福岡市吳服町六十五番地山口茂一方裏ニ階六疊ノ自宅ニ於テ右キメ子カ被告人ノ意ニ反シ同日出産ノ爲實家ニ歸省セントシタルコトヨリ口論ノ末傍ニ在リタル裁縫鉢(證第一號)ヲ同人ニ投付ケ以テキメ子ノ左胸部ヲ刺傷セシメ因テ左側肺藏ヲ損傷シ同二時半過頃同人ヲシテ同所ニ於テ右刺傷ニ基ク急性失血死ニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルトコロ情狀憫諒スヘキヲ以テ同法第六十六條第七十一條第六十八條第三號ニ則リ酌量減輕ヲ爲シタル其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役一年ニ處シ押收ニ係ル裁縫鉢一個(證第一號)ハ本件犯行ノ用ニ供シタルモノニシテ被告人以外ノ者ニ屬セサルヲ以テ同法第十九條第一項第二號第二項ニ依リ之ヲ沒收シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ヲ適用シ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年二月十七日

福岡地方裁判所刑事部

一七一 傷害致死

判 決

本籍 福島縣河沼郡八幡村大字塔寺字大門千五百二十四番地
住居 同縣若松市祝町番地不詳

鐵 夫

山 口 登

明治四十三年二月十五日生

右ノ者ニ對スル殺人被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

一七一 傷害致死

被告人ヲ懲役參年ニ處ス
 未決勾留日數中百二十日ヲ右本刑ニ算入ス
 押收ニ係ル證第一號(肥後守ナイフ一挺)ハ之ヲ沒收ス
 訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ福島縣河沼郡東松村字輕澤目黒千代美方飯場ニ寄食シ同縣ノ直營ニ係ル同村藤峠道路改良工事ニ從事シ居リタルモノナルトコロ昭和十五年九月二日午後九時頃右飯場ニ於テ土工小畑音松ヨリ被告人トハ親族ニシテ昵懇ノ間柄ニ在ル鑄掛職塔崎末吉カ同村字反場六百九十六番地雜貨商長谷川ヨシ方ニ於テ右飯場頭目黒千代美ト會飲ノ上口論ヲ爲シ同人ヨリ著太皮剝等ト惡罵セラレ剩ヘ毆打セラレ居ルニ依リ仲裁シ吳レタキ旨依頼セラレタル爲直チニ身支度ヲ調ヘ右長谷川ヨシ方ニ赴キタルトコロ折柄右目黒ハ長谷川方土間ニ轉倒シ居リタル塔崎ヲ猶モ毆打シ居リタルカ被告人ヲ認ムルヤ「貴様モ塔崎ト同類ダ打殺シテ吳レルト」ト嘔號シツツ被告人ニ接近シ來リタルモ被告人ハ機ヲ見テ塔崎ヲ救出セント暫時逃ケ隠レ等爲シ居リタル内遂ニ目黒ヨリ其ノ左手ヲ捕ヘラレタルニ依リ茲ニ同人ヲ傷付ケテ其ノ力ヲ削クヘク先ツ左手ニテ目黒ノ脇腹ヲ突キ乍ラ右長谷川方前道路上ニ至リ同人カ踰キテ體勢ヲ崩スヤ素早く右手ヲ以テ作業服内ヨリ日頃導火線切斷用トシテ所持シ居リタル肥後守ナイフ(證第一號)ヲ取出シ之ヲ以テ目黒ノ右脇腹及左肩ヲ突刺シ同人ノ右季肋部ニ腹腔ヲ貫キ肝臟ヲ切損スル刺創並左肩胛部ニ胸腔ヲ貫キ肺臟ヲ切損スル切創ヲ加ヘ因テ同月

四日午後二時四十分頃若松市榮町西分五百三十番地竹田病院ニ於テ遂ニ同人ヲシテ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ其ノ所定期限範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役三年ニ處スヘク刑法第二十一條ニ則リ未決勾留日數中百二十日ヲ右本刑ニ算入シ押收ニ係ル證第一號(肥後守ナイフ一挺)ハ被告人カ本件犯罪行爲ノ用ニ供シタル物ニシテ犯人以外ノ者ニ屬セサルヲ以テ同法第十九條第一項第二號同第二項ニ依リ之ヲ沒收スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第一百二十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年二月二十六日

福島地方裁判所若松支部

一七二 傷害致死

判 決

本籍 福岡縣三井郡草野町大字草野三百九十七番地ノ一ノ二
 住居 同上

無職

草野 康 文

大正十二年六月八日生

一七二 傷害致死

六〇九

右者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ
六一〇

主 文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

但シ本裁判確定ノ日ヨリ四年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

理 由

被告人ハ十八歳ニ滿タサル少年ナル處、昭和十五年八月二十三日午後七時頃ヨリ三井郡草野町大字草野三百九十七番地ノ一ノ一、自宅(壽本寺)茶ノ間ニ於テ同月十七日戰地ヨリ歸還シタル長兄月州ノ歸還ノ祝宴カ催サレ右月州、次兄道一、三兄博ト共ニ飲酒シタル際、月州ノ出征中病死シタル實母チキノコトヲ想起シ三兄博ト共ニ泣キ居リタルニ、豫テヨリ實母ニ對シ不滿ヲ抱キ居リタル月州カ同夜九時過頃右弟三名ヲ奥四疊半ノ間ニ誘致シ、自分ハ京都滯在中母ヨリ怎シナニ苦メラレタカ判ラヌノテ戰地テ母カ死シタトノ電報ヲ受取ツタ時ハ却ツテ喜シタ位デアツタ、夫レテ家ニ歸ツテモ母ノ位碑ニハ參ラヌノタト申シタルヨリ、右弟三名ハ之ニ憤激シ且博ハ月州ト取組ヲ始メタルカ被告人ハ二階ニ在リタル接木用ナイフ(證第七號)ヲ持來リ、座敷ノ南隣六疊ノ間ニ於テ右ナイフヲ以テ月州ノ胸部及腹部ヲ突刺シ因テ同人ヲシテ胸腔内多量出血ノ爲同夜九時三十分頃死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ少年法第一條、第八條第一項、刑法第二百五條第一項ニ該當スルトコロ其ノ情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認ムルヲ以テ少年法第八條第三項、刑法第二十五條ヲ適用シ被告人ヲ懲役二年ニ處シ本

裁判確定ノ日ヨリ四年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十一月三十日

福岡地方裁判所久留米支部

一七三 傷害致死

判 決

本籍 東京市下谷區谷中眞島町一番地

住居 東京市淺草區山谷四丁目十八番地 労働館事建部ヨソ方

風呂番

水野 鶴吉 郎

當五十六年

右ノ者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付昭和十四年十二月二十七日東京刑事地方裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告入ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當院ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役四年ニ處ス

原審ニ於ケル未決勾留日數中貳百日ヲ右本刑ニ算入ス

一七三 傷害致死

六一一

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理由

被告人ハ昭和三年頃ヨリ東京市淺草區山谷四丁目十八番地實費宿泊所勞働館事建部ヨソ方ニ雇ハレ同館ノ風呂番其ノ他ノ雜役ニ從事シ居タルモノナルトコロ昭和十三年十二月七日夜飲酒シテ同館事務室内ニ假睡シ居タルカ事務員鯉淵與衛門ニ促サレ夜半(翌八日午前一時半頃)同館浴場附近ナル自己ノ居室ニ戻リタルニ其ノ頃酩酊シテ歸館セル止宿人笠原一カ入浴シ湯カヌイトテ騒キ立テタルヨリ被告人ハ直チニ右浴場ニ赴キ之ト口論ノ末笠原ヨリ「手前見タイナ老耄ヲノスノハ雜作ナイ、湯カラ上ツテノシテヤル」ト罵ラルルヤ被告人モ「手前等ニノサレテタマルモノカ俺ノ方テノシテヤル」ト稱シ直チニ自己ノ居室床下ヨリ風呂竈用ノ「ドストル」ト稱スル鐵棒(昭和十三年押第一一四二號ノ一)ヲ取出シ來リテ浴槽内ニ居タル笠原ノ正面ヨリ矢庭ニ右「ドストル」ヲ以テ同人ノ頭頂部ヲ強打シ因テ同人ヲシテ右頭頂部打撃ニ基ク腦挫滅ニ因リ即死スルニ至ラシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ右ノ事實ハ

一、被告人ノ當院公廷ニ於ケル自分ハ昭和三年カラ判示ノ勞働館ニ雇ハレ翌年ヨリ風呂番ヲ勤メ傍ラ雜役ニ從事シ日給七十錢ヲ貰ヒ居タルカ獨り者ニテ酒ヲ好ムタメ金カアレハ常ニ酒ヲ飲ミ居タリ判示ノ十二月七日ノ夜ハ夕食後何時モノ如ク風呂番ヲ致シ十時カ十一時頃ニ風呂場ノ簀ノ子ヲ洗ヒタルカ其ノ晩ハ湯ヲ落サスニソレカラ上州屋ニ酒ヲ飲ミニ行キ同所ニテ小堀ト言フ人ニ會ヒ同人カラ日本酒ト電氣ブランヲ馳走ニナリ自分モ金ヲ出シテ電氣ブランヲ二杯飲ミ店ノ者カラ看板タト言ハレテ勞働館ニ歸リ事務室ノ火鉢ノ傍ニテ假睡シ居タルカ事務員ノ鯉淵カラ起サレテ風呂場ノ脇ナル自分ノ部屋ニ戻リタリ翌八日ハ朝ノ

十時半カ十一時頃ニ雇人ノ長瀬要作ニ起サレテ集金ニ出掛ケ其ノ歸途食堂ニ入りテ其ノ時モ知人カラ電氣ブランヲ一杯馳走ニナリ自分モ金ヲ出シテウキスキエーヲ二杯飲ミ午後一時頃勞働館ニ戻リタルニ風呂ノ中ニ人カ死ンテ居タトノ騒ニナリ歸タリ自分ハ七日ノ晩ハ寒カリシ故ワイシャツヲ着タ儘寢ネタル旨ノ供述

一、原審第三回公判調書中被告人ノ供述トシテオシノワイシャツ(昭和十三年押第一一四二號ノ五)ヲ判示ノ十二月七日當時自分カ着用シ居タル旨ノ記載

一、被告人ニ對スル豫審第一回訊問調書中自分カ笠原一ヲ鐵棒ヲ殴リ付ケタ前後ノ模様ハ檢事ニ對シ唯今オ讀聞ケノ如ク申述ヘタル通り相違ナシ(此時豫審判事ハ被告人ニ對スル檢事ノ聽取書中ノ第三項及第四項ヲ讀聞ケタリ)即チ自分カ勞働館内ノ浴場テ笠原一ト口論シタ末右浴場ニ隣接セル自分ノ居室ノ床下ヨリ角ノ鐵棒ヲ取出シソレヲ持ツテ浴場ニ引返シ浴槽ノ中ニ立チ居タル笠原ノ頭ヲ殴リ付ケタルニ笠原カ浴槽ノ縁ニ掴マリ乍ラ馬鹿野郎ト申シタルモ直チニタツタリ倒レ浴槽ノ中ニ沈ンテ仕舞ヒタルモノナリ從來勞働館ニ泊ツテ居ル勞働者達カ能ク喧嘩ヲシ可成リ酷ク殴ラレタ者テモ翌日ハケロリトシテ仕事ニ出テ行クニヨリ笠原ノ傷モ大シタモノテハナイト思ヒシモ笠原カ湯ノ中ニ沈ンテ仕舞ヒタルヨリ普通ノ怪我トハ違ヒ或ハ其ノ儘死ンテ仕舞フノテハナイカト思ヒタリ、其ノ時自分ハ笠原ノ身體ヲ浴槽ノ中ヨリ上ケテヤラス其ノ儘ニシ置キタルハ何タカ恐ロシイ様ナ氣持チカシタノト當時自分モ酒ニ酔ヒ居タル爲メ笠原ノ傷カ大シタモノテナケレハ一人テ上ルタラウト簡單ニ考ヘ其ノ儘浴場ヲ出テ仕舞ヒタルモノナル旨ノ供述記載並ニ右讀聞ケニ係ル被告人ニ對スル檢事ノ聽取書中第四項ニ被告人ノ供述トシテ風呂場ニ行クト一人ノ男カ入ツテ居リ顔ヲ見ルト名前ハ知ラサルモ勞働館ニ止宿セル見覺ヘノアル男ナリ此ノ男カ笠原一ナリシコトハ其ノ後ニ判リタルカ其ノ男ハ自分ニ對シ「ヌルイカラ湯ヲ出シテ呉レ」ト申シタルヨリ自分ハ「モウ湯ヲ抜クノタ今時分入ツテ居ルモノカアルカ湯ハナイカラ出セヌ」ト言フト男ハ「何ヲ言ツテ居ルカオイホレ奴」ト申シタルヨリ自分ハ「オイ

ホレカ何タモウ湯ヲ抜イテ仕舞フツト言ヒ乍ラ流場ニアリタル無精箒ヲ以テ控ヲ抜カントシタルニ男ハ抜カセマイトシタルヨリ自分ハ箒ヲ以テ相手ノ頭タツタカ體タツタカヲ一ツ毆リタリスルト男ハ箒ノ先ヲ脇ノ下ニ抱ヘ込ミタルヨリ自分ハ箒ノ柄ヲ握リタル儘押シテ行キタル處相手カ之ヲ放シタルニヨリ自分ハ流場ニ箒ヲ置キタリスルト男ハ「乞食野郎」ト申シタルヨリ自分ハ「手前等ハ、ハタ屋テハナイカ手前カ乞食野郎タ」ト言ヒ返スト男ハ「此ノオイホレ奴泥棒野郎」ト申シタルニヨリ自分ハ「手前ハ泥棒ヲシタコトカアルカモ知レヌカ俺ハ泥棒ヲシタコトハナイソ」ト言フト男ハ「オ湯カラ上ツテカラ手前ヲ一コロ（一ト殺シニスル意味）ニシテヤル」ト申シタリ其ノ時自分ハ少シ酔ヒ居タルヨリ續ニ障リ「手前等ニ殺サレテタマルモノカ」ト言ヒ乍ラ其處ヲ立去リ女湯ヲ通り自分ノ寢泊リシ居リタル部屋ノ處ニ來テ其ノ縁ノ下ヨリドストル（長サ一尺位ノ角ニナリタル鐵棒）ヲ一本取出シ之ヲ右手ニ持チ相手ヲ毆ツテヤラウト思ヒ風呂場ニ引返シタリ此ノドストルハ風呂ノ焚口ノカマドノ敷金ニシテ昨年（昭和十三年）夏頃不用ト爲リタルモノヲ自分カ右ノ縁ノ下ニ入レ置キタルモノナリ右鐵棒ヲ提ケテ風呂場ニ引返シ見ルト男ハ風呂ノ中ニ立チ縁ニ手ヲ掛ケ乍ラ自分ノ方ヲ見居リタルカ裸ノ儘片足ヲ上ケ今ニモ湯舟ノ中ヨリ外ニ出テ來ヨウトシ居タルヨリ自分ハ男ニ出ラレテハカナワヌト思ヒ直ク男ノ眞正面ヨリ鐵棒ヲ右手ニ持チ頭ヲ一ツ強ク毆リタリスルト相手ノ男ハ湯舟ノ縁ニ纏マリ乍ラ「馬鹿野郎」ト申シ直クタツタリト倒レ湯ノ中ニ沈ミタリ其ノ男モ少シ酒ニ酔ツテ居ル様ニ見受ケタリ右ノ如ク自分カ毆ルト男ハ湯ノ中ニ沈ンテ仕舞ヒタルヨリ之ハ死ンテ仕舞フカ困ツタモノタト思ヒタルモ恐ロシクナリ其ノ儘鐵棒ヲ持ツテ立去リ鐵棒ハ元取出シタ附近ニ投捨テ置キタル旨ノ記載

一、當審第二回公判調書中證人建部ヨソノ供述トシテ自分ハ昭和十三年十二月二十一日日本堤警察署ニ於テ被告人水野ニ面會ヲ許シ貰ヒタルカ其ノ時水野ニ話ヲ聞クトアノ晩アノ男カ大變遅ク風呂ニ入ツテ居テオ湯カヌルイトテカヤノ言ヒ「此ノ老ホレ爺」トカ「泥棒野郎」トカ言ヒタルヲ以テ「何時手前ノ物ヲ盗ンタ事カアルカ」トヤリ返スト相手カ「手前見タイナ老ホレ爺ヲノ

スノハ雜作ハナイ今湯カラ上ツテノシテヤル」ト言ヒタルニヨリ「何、俺ノ方テノシテヤル」ト言ヒテドストルニテ相手ヲ毆リタリト話シ呉レタル故初メテ様子カ判リタル旨ノ記載

一、原審第四回公判調書中證人鯉淵與衛門ノ供述トシテ自分ハ大正十三年頃ヨリ判示ノ労働館ノ帳場保ヲ爲シ居リ被告人水野鶴吉郎ハ昭和四年頃ヨリ労働館ノ風呂番トシテ雇ハレ居タルカ水野ハ酒カ好キニテ毎晩酒ヲ飲ミ居タルモ同人カ晝間酒ヲ飲ムヲ見カケタルコトナシ水野ハ眞面目テ正直ナレト怒リツボイノカ瑕ニシテ酒ニ酔フト普段怒リツボイ處ヘ以ツテ來テニ層怒リツボクナル質ナリ、此ノ事件ノ起ル前風呂ノ湯カヌルイトカ熱イトカ言ヒ水野ニ叱ラレタト言フ者ヲ再三聞キ又今ヨリ三、四年前止宿人ノ小川福藏ト言フ者カ風呂場テ水野ニ毆ラレタト言ヒ裸體ノ儘唯ナラヌ様子テ帳場迄駈ケ込ンテ來タリシコトアリ昭和十三年十二月七日當時笠原一ハ事務室脇通路支關突當リノ梯子段ヲ上ツタ二階ノ廣間ニ寢泊リシ居リタリ同人モ酒カ好キニシテ酒ヲ飲ムト喧嘩早ク口カ悪ク亂暴ニ爲リ勝ナリキ右十二月七日ノ晩ハ自分カ事務室ニ於テ夜番ヲ爲シタリ其ノ晩日本堤警察署ノ警官カ行幸カアルトテ労働館ニ檢策ニ來リ午後十一時頃歸リタリ警官カ歸リテ後午後十一時半頃水野カ事務室ニ入り來リ事務室内ノ椅子ニ腰掛ケ火鉢ニ手ヲアフリ乍ラ居睡リヲ爲シ居リタル故自分ハ水野ニ大分夜カ更ケタカラオ寢ミナサイト言ヒタルカ水野ハ眠リ居リテ聞ヘサル様子ナリシカ更ニ一時間位經過シテヨリ自分ハ又水野ニ對シ遅イカラ早クオ歸リナサイト言ヒ起シタルニ其ノ内ニ水野ハモツクリ起キテ今何時カナアト申シタルヨリ自分カ一時半テスヨト申スヤ水野ハ事務室ヲ出テ同人ノ居室ノ方ニ行キタル様子ナリキ水野カ事務室ヨリ立去リタル時刻ハ午前一時半頃ナリシ事ハ間違ナシ當時事務室ニハ電氣時計ヲ掛ケテ居リ時ノ時計ハ當時正確ナモノナリキ自分ハスツト事務室ニ於テ夜番ヲ爲シ居タルカ水野ノ次ニ労働館ニ入り來リタルハ止宿人ノ黒田金太郎ニシテ同人ハ十二時半カ一時頃ナリキ其ノ次ニ歸リ來リタルハ笠原一ニシテ同人ハ非常ニ酔拂ヒ居リ漸ク戸ヲ開ケテ入り來リタルヨリ自分ハ特ニ注意シテ看タル故其ノ時歸リタル者カ笠原ナリシコトハ絕對ニ間違ナシ筈

原ノ歸リ來リタルハ水野カ事務室ヲ出テ行キテ後三十分位經過シテヨリニシテ午前二時近クナリキ笠原ハ其ノ時ニハ夜更ケノ事テモアリ酔ツテ居リタレハ其ノ儘自分ノ居間ニ上リ寢ミタルモノト思ヒ居リタルカ其ノ後笠原カ湯殿テ死シテ居ルノヲ見テアノ時同人ハ二階ニ上ラス早速風呂場ニ行キタルモノト考フ旨ノ記載

一、原審第五回公判調書中證人藤橋留吉ノ供述トシテ自分ハ三年位前ヨリ判示ノ労働館ニ止宿シ居リ昨年(昭和十三年)十二月七日當時自分泊リ居タル部屋ハ二階ノ大部屋ニシテ自分ハ其ノ部屋ノ階段ノ上リ口附近ノ東側ノ窓寄りノ處ニ頭ヲ階段ノ方即チ北側ニ向ケテ寢ミ居リタルカ夜中ノ二時少シ前頃目ヲ醒シ風呂場テ何カ騒ク音ヲ聞キタリ、ソレハ酔拂ヒカ風呂場ノ中テ何カグチグチ判ラヌ事ヲ言ヒ騒キ居タルヨリ自分ハ此ノ夜更ケニ何ト言フ奴タラウト穢ニ觸リ居タルニ其ノ内ニ階下ノトノ部屋ニ寢テ居タ人カ判ラサリシカ一人出テ行キ風呂場ノ中ニ入り酔拂ヒニ對シウルサイ奴タナ今何時タト申スト酔拂ヒハ手前ハ何タ何言ツテヤカルト言ヒ口論カ始リハテハ殴リ合ヒト爲リボカボカト言フ音カシ野郎ヤツタナト言フ酔拂ヒノ聲カシタト思フト湯殿ノ中へ投ケ込マレタ様ナボチヤント言フ音カシ穢テバタバト言フ足音カシタルヲ以テ自分ハ之ハ酔拂ヒカ怒リテ跡ヲ追駈ケルモノト思ヒタルモ穢テヒツソリ靜マリタレハ自分ハ大シタ事モ無カツタモノト思ヒ其ノ儘寢テ仕舞ヒタル旨ノ記載

一、證人林峰次郎ニ對スル豫審第一、二回訊問調書ヲ通シ自分ハ判示労働館ヨリ半町程離レタル所ニテ酒屋ヲ爲シ居リ被告人水野鶴吉郎ハ殆ント毎日ノ如ク酒ヲ飲ミニ參リ自分ノ娘茂代(昭和十四年當時八歳)ヲ可愛カリ居リタル旨ノ供述記載

一、證人川畑新太郎ニ對スル抗告審ニ於ケル受命判事ノ訊問調書中自分ハ警視廳刑事部捜査第一課ニ勤務セル巡査部長トシテ本件ニ付水野鶴吉郎ヲ取調ヘタルカ其ノ願末ハ昭和十三年十二月八日午後四時頃現場タル淺草區山谷四丁目十八番地労働館ニ臨檢シ同日午後四時半頃水野ヲ日本堤警察署ニ同行シタリ、十二月八日九日兩日ノ取調ヘニ對シ水野ハ犯行ヲ否認シ居タルヨリ十日午前九時頃ヨリ更ニ水野ヲ取調ヘタルニ同日午前十時頃ニ至リ水野ハ實ハオ手數ヲカケマシタカ私カヤツタノテスト初メテ自白シタリ此ノ取調ヘニハ門田刑事、三原保長、多々羅課長、新堀警部外二、三ノ警官カ立會ヒタリ水野ノ言フ處ニ依レ

ハ十二月八日午前一時半頃事務所ノ椅子ニ凭レ火ニ當リ乍ラ居眠リヲシテ居リテ當夜ノ不寢番ナル鯉淵ニ起サレ自分ノ部屋ニ歸リ寢ヤウトスルト浴場テ歌ヲ唱フ聲カスルノテ浴場ニ行ツテ見ルト笠原カ一人入浴シテ居リ自分ニ對シ「オ湯カヌルイヂヤナイカ」ト言フカラ「今頃オ湯ニ入ツテヌルイモ熱イモアルカ」ト答ヘルト笠原カ「此ノ盗人野郎」ト言フノテ自分ハ「俺カ何時何處テ物ヲ盗ツタカ」ト問返スト笠原ハ「何拔カス此ノ老妻野郎、オ前ノ様ナ老妻ヲノス位ハ譯カナイカラ今オ湯カラ上ツテノシテヤル」ト言ツタ其處テ自分ハ「オ前ナンカニノサレテタマルカ、ノスノハ俺ノ方カ先タ」ト言ヒ乍ラ傍ニ在ツタ無精帯テ殿リソレカラ自分ノ部屋ニ行キ床下カラドストルヲ持出シ兩手ヲ後ニ廻シ其ノドストルヲ隠シ乍ラ浴場ニ引返シ湯舟ノ段々ノ處ニ立チ「此ノ野郎此方カ先タサマ見ヤカレ」ト言ヒサマ笠原ノ頭ヲ一ツ殿リ付ケドストルヲ又元ノ床下ニ入レテ置キ自分ノ部屋ニ歸ツタト供述シタリ、右ノ如キ自白ヲ爲シタルヨリ直チニ現場ニ赴キタルニ無精帯ハ浴場ニ在リタルモ床下ニハドストルカ數本アリ何レカ兇行ニ用ヒタルモノナリヤ判明セサリシヨリ其ノ儘ト爲シ無精帯ノミヲ持チ日本堤署ニ引返シソレヨリ門田巡査ト更ニ水野ヲ連レ現場ニ赴キタル處水野ノ謂フ床下即チ羽目板ノ下ノ破レタル處ニドストルカ約九本アリ其ノ内ノ三、四本ハ前方ニ出張ツテ居リタル故水野ニ對シトレテ殿ツタノカト訊ネタルニ水野ハ其ノ出張ツテ居タ三、四本ヲ之カカト一本一本手ニ取り見居タルカ終リニ二本出シテ此ノ内ノ何レカ一本テ殿ツタノタト申シタルヨリ門田巡査カ其ノ二本ヲ新聞紙ニ包ミタリ、自分ハ更ニ水野ヲ浴場ニ連レテ行キ兇行當時ノ模様ヲ説明サセタルニ水野ハ笠原カ浴槽ノ右ノ隅ノ方ニ居タノヲ自分ハ踏段ニ上ツテ殿リ付ケタト言ヒ乍ラ身振ヲ爲シテ説明シタリ尙申シ遅レタルカ九日ノ午後四時頃自分カ水野ヲ取調ヘタル時水野ノ着テ居タ白シャツノ首ノ下邊リニ血痕ノ附着シ居レルヲ見付ケ其ノ理由ヲ追究シタルニ水野ハ南京蟲テモ殺シタ血タラウト申シ居タル旨ノ供述記載

一、當審第二回公判調書中證人門田近太郎ノ供述トシテ自分ハ警察官トシテ被告人水野ノ取調ニ當リタルカ昭和十三年十二月十日ニナリ水野ハアノ晩寢様トシテ居ルト風呂場テ怒鳴ル聲カスル故注意ヲシタラ自分ヲ泥棒扱ニシタノテ癪ニ障リ相手ヲ不精簪テ毆ツタカコソナ事テ參ルカト言ヒ先方カ此ノ野郎ブツ殺シテヤルソト言ツタノテ自分ノ部屋ノ床下カラドストルヲ持ツテ來テソレテ相手ヲ毆ツタラヒツクリ返ツタト犯行ヲ自供シタルニ依リ其事ヲ捜査係長等ニ報告シテ更ニ取調ヘテ貰ヒタリ自分ハドストルトハ如何ナルモノカ判ラサリシモ水野ニ訊ネルト風呂ヲ焚ク時竈ニ使フモノタトノコトニテソレヨリ係長等ト共ニ被告人ヲ同行シテ現場ニ行キ被告人ノ指示ニ依リ水野ノ部屋ノ床下ニ在リシ本件ノドストル(昭和十三年押第一一四二號ノ二)ヲ押收シ來リタルモノナル旨ノ記載

一、原審第五回公判調書中證人本田親任ノ供述トシテ自分ハ警視廳衛生技手トシテ昭和八年六月ヨリ警視廳刑事部鑑識課ニ奉職シ居ルモノニシテ自分カ本件ニ付作成シタル鑑定書ノ内昭和十三年十二月二十三日附鑑定書中ニ鑑定資料トシテ記載セル薄鼠色綿ネルワイシャツ一枚ハオシノワイシャツ(昭和十三年押第一一四二號ノ五)ニシテ右ワイシャツノ前胸部カラ一釦ノ直下ノ釦ノ上方約二釦ノ處ニ血カ附着シ居リ瘡瘡木脂法、ヘモクロモーゲン法、抗人血色素沈降反應法等ノ血液検査法ニヨリ検査シタル結果ソレカ人血ニシテ其ノ血液型ハO型ナル事判明シタリ尙正木信夫、井關尙榮兩氏ノ作成ニ係ル鑑定書ニ依レハ笠原一ノ血液型ハO MN型ナリト鑑定セラレタル由ナルカ自分ノ鑑定ニ於テハ單ニO型ニ屬スルコトヲ明カニシタルノミニシテ更ニ進ンテO型ノ内ノ如何ナル分類ニ屬スルヤニ付詳細ノ検査ヲ爲ササリシモノナリ次ニ昭和十四年一月十三日附鑑定書中ニ鑑定資料トシテ記載セルドストル(角鐵棒)ハ唯今オシノドストル(昭和十三年押第一一四二號ノ二)ニシテ此ノドストルノ血痕ノ附着シ居タル部分ハレットテルノ貼付シアル上方針金ノ卷カレアル先ノ角ノ出張リ居レル部分ナリ血ノ附着セル部分ヲ削リ取り血液検査ヲ爲シタルカ分量過少ナリシ爲メ其ノ血液型ヲ判定スルコト能ハサリシモノナル旨ノ記載

一、原審第五回公判調書中證人正木信夫ノ供述トシテ自分ハ昭和十三年十二月九日豫審判事ノ命ニ依リ笠原一ノ體ニ付鑑定ヲ爲シ本件ノ鑑定書ヲ作成セリ而シテ右鑑定書ニ記載セル如ク笠原一ノ頭蓋骨ノ厚サハ〇・三釦乃至〇・五釦ニシテ通常人並ナルカ其ノ頭蓋骨ニハ前後徑四・三釦、左右徑三・八釦ノ圓形ヲ呈スル陥沒骨折アリテオシノ如キドストル(昭和十三年押第一一四二號ノ二)ヲ以テ其ノ頭部ニ打撃ヲ加フル場合右ノ如キ傷ヲ生セシムルコトハ絕對ニ不可能ニアラスト思料ス即チ鐵棒ノ先ノ角ノ處カ斜ニ入ツタ場合本件被害者ノ頭部ニ存スル如キ傷カ生スル可能性アリ、尙右鑑定書記載ノ如ク笠原一ノ血液型ハO MN型ナリ又自分ハ昭和十四年三月二十九日豫審判事ノ命ニ依リ林茂代ノ血液型ヲ鑑定シテ鑑定書ヲ作成シタルカ右ノ鑑定書ニ記載セル如ク林茂代ノ血液型ハA MNQ S型ナル事相違ナシ、又自分ハ昭和十四年二月七日豫審判事ノ命ニ依リ被告人水野鶴吉郎ノ血液型ヲ鑑定シテ鑑定書ヲ作成シタルカ右鑑定書ニ記載セル如ク水野鶴吉郎ノ血液型ハA MNQ型ナルコト相違ナシ、O MN型ノ血液型トA MNQ S型或ハA MNQ型トハ全然別個ノモノニシテ從テ若シ本件被告人ノ着用シ居タルワイシャツニ附着シ居レル血カO型ノ血液テアツタトスレハソレハ被告人ノ血テモナケレハ又林茂代ノ血テモナイ事ハ斷言シ得ル旨ノ記載

一、鑑定人井關尙榮正木信夫ノ共同作成ニ係ル鑑定書ト題スル書面(記録第二册第三百二丁乃至第三百四丁)中昭和十三年十二月九日東京刑事地方裁判所豫審判事草間英一ノ命ニ依リ被疑者不明殺人被疑事件ニ付氏名不詳年齡三十五、六歳位ノ男子ノ死體ニ對シ其ノ創傷ノ部位程度、兇器ノ推定、死因等ニ就キ鑑定ヲ爲ス爲メ該死體ヲ解剖ノ上鑑定スルニ其ノ右頭頂部ニ創傷アリ該部ノ頭蓋骨ニ前後徑四・三釦、左右徑三・八釦ノ略圓形ヲ呈シタル陥沒骨折アリ硬腦膜ノ斷裂ヲ伴フト共ニ大脳右頭頂葉ニ前後長サ二釦、幅〇・八釦及ビ前後ニ長サ三釦、幅一釦ノ挫滅ヲ生セシメ居リ右頭頂部ノ損傷ハ徑四釦内外ノ打撃部ヲ有スル鈍體ニヨリ生シタルモノト推測セラレ本屍ノ死因ハ右頭頂部打撃ニ基ク腦挫滅ナリト認ムル旨ノ記載

一、押收ニ係ルドストル一本(昭和十三年押第一一四二號ノ二)並ニ薄鼠色綿ネルワイシャツ一枚(同押號ノ五)ノ各存在

ヲ綜合シテ之ヲ認ム

仍テ判示事實ハ其ノ證明アリタルモノトス

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ其ノ所定期限範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役四年ニ處シ同法第二十一條ニ依リ原審ニ於ケル未決勾留日數中貳百日ヲ右本刑ニ算入スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ從ヒ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス
仍テ刑事訴訟法第四百一條第一項ニ則リ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年五月十八日

東京控訴院第〇刑事部

一七四 傷害致死

判決

本籍 山梨縣東八代郡一宮村金田千二百六十一番地
住居 東京市本所區業平橋五丁目八番地ノ一

銚職

風間 勝

當二十七年

右ノ者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

但シ本裁判確定ノ日ヨリ參年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

理由

被告人ハ豫テ肩書自宅ニ姉なを及及其ノ子風間心市(昭和六年三月十二日生)ヲ引取り養育シ來リタルカ右心市カ從來兎角隠シ立テ多ク自宅ノ菓子等ヲ盜食スルノ癖アリ昭和十六年一月二日又モ盜食シタル形跡アリタルタメ其ノ惡癖ヲ矯正スヘク同日午後六時頃自宅ニ階表四疊半ノ間ニ於テ盜食ノ事實ヲ問糺シタルモ心市カ容易ニ自白セサリシヨリ興奮ノ餘心市ノ右前額部等ヲ手拳ニテ毆打シ同前額部ノ外傷ニ基ク腦震盪竝ニ腦壓迫ニ因リ翌三日午前八時二十六分同所ニ於テ之ヲ死ニ致シタルモノナリ

右ノ事實ハ

一、創傷ノ部位及死因ノ點ヲ除キタル其ノ餘ノ事實ニ付被告人ノ當公庭ニ於ケル判示同旨ノ供述

一、鑑定人井關尙榮 藤井克己ノ共同作成ニ係ル鑑定書中風間心市ノ創傷ノ部位及死因ニ付判示同旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認ム

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ其ノ所定期限範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役貳年ニ處スヘク尙情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條刑事訴訟法第三百五十八條第二項ニ則リ本裁判確定ノ日ヨリ參年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘキモノトス

一七四 傷害致死

辯護人等ハ被告人ノ本件所爲ハ被告人ノ風間心市ニ對スル養育者トシテノ懲戒權ノ行使ニ出テタルモノナル旨主張ス
レトモ記録第八十六丁以下ニ添付シアル戸主風間松造ノ戸籍謄本ニ據レハ被告人ハ風間心市ニ對シ民法ニ所謂懲戒權
ヲ有セサリシコト明白ナルニ依リ右主張ハ之ヲ採用セス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年二月十七日

東京刑事地方裁判所第〇部

一七五 傷害致死

判決

本籍並住居

栃木縣下都賀郡小野寺村大字古江五百二十四番地

農業

松永孝三郎

當五十三年

右ノ者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ懲役貳年ニ處ス

但シ參年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理由

被告人ハ昭和十五年四月頃以降精神病者飯島市三郎(當六十八年)ヨリ同人ノ妻飯島タイ(當六十七年)ト醜關係アリト
ノ邪推ヲ受ケ居リタルカ同女カ市三郎ノ虐待ニ堪兼ネ同年六月家出スルヤ市三郎ハ被告人ニ於テタイヲ圍ヒ居ルモノ
ナリト誤解シ爾來市三郎ハ晝夜ノ別ナク執拗ニモ頻繁ニ被告人肩書居宅ニ立廻リ「タイヲ出セ」ト強要シタルモ被告人
ハ其ノ都度之ヲ宥メ歸シ居リタルトコロ同年六月三十日午前四時三十分頃市三郎ハ突如被告人方ニ來リ「婆サン何時
迄寢テケツカル」ト叫ビツツ同家表八疊間ニ就寢中ナル被告人ノ頭部ヲ手拳ニテ毆打シタルヲ以テ被告人ハ飛ヒ起キ
市三郎ヲ追ヒ歸サントシ戶外ニ押出シ自宅南側庭先外ナル野道迄送り出シタル際同人カ更ニ被告人ノ頭部ヲ手拳ニテ
毆打シテ抵抗シタル上附近ナル青柳常三郎方裏側ナル坂道ニ到リ路上ニ躡リ一部埋沒セル石塊ヲ取上ケントシ之ヲ被
告人ニ投ケ付ケントスル氣配ナリシヲ以テ被告人ハ昂奮ノ餘リ同所ニ至リ兩手ニテ市三郎ノ肩ヲ突キ同人ヲシテ同所
ヨリ高サ約四尺ノ崖下ナル右常三郎方軒下ニ墜落セシメ因テ第七頸椎完全骨折ニ基ク呼吸困難、呼吸麻痺症狀ニ因リ
同年七月二日午前九時頃附近ナル市三郎方ニ於テ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ所定期刑範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役二年ニ
處スヘク犯罪ノ情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條ニ依リ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫シ訴訟費用ハ刑
事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

一七五 傷害致死

被告人ノ辯護人ハ被告人ノ所爲ハ正當防衛ナル旨抗辯スルモ判示市三郎ノ被告人ニ對スル侵害ハ未タ急迫トハ認め難ク被告人ノ所爲ハ權利防衛ノ爲已ムコトヲ得サルモノトハ認め難キヲ以テ右抗辯ハ採用セズ次ニ同辯護人ハ被告人ノ所爲ハ盜犯等ノ防止及處分ニ關スル法律第一條第三號ニ該當スル旨抗辯スルヲ以テ按スルニ右規定ハ他人ノ住居、船舶等ニ侵入シタル者又ハ要求ヲ受ケテ此等ノ場所ヨリ退去セサル者ニ對シ右現場ニテ殺傷シタル場合之ヲ罰セサル旨ナルトコロ被告人カ本件殺傷行爲ニ及ヒタルハ被害者市三郎カ要求ヲ受ケテ被告人ノ住居ヨリ退去シ其庭先外野道ヲ距テタル青柳常三郎方裏側坂道ニ於ケルモノナルコト前認定ノ如クナルヲ以テ右法律ノ規定ニ該當セサルニヨリ右抗辯モ亦之ヲ採用セズ
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年八月二十二日

宇都宮地方裁判所栃木支部

一七六 傷害致死

判決

本籍 福島縣石城郡下小川村大字下小川字味喰野十一番地
住居 岩手縣釜石市大字釜石第五地割五十四番地 後藤慎一郎方
電氣熔接工 西山新四郎

大正三年一月十三日生

本籍 福島縣石城郡泉村大字瀧尻字上谷地百二十一番地ノ二
住居 岩手縣釜石市大字釜石第五地割五十四番地 後藤慎一郎方
電氣熔接工 川 瀨 清 光
大正八年四月一日生

右兩名ニ對スル殺人被告事件ニ付昭和十四年十月二十八日盛岡地方裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ各被告人並被告人西山新四郎ノ原審辯護人佐藤邦雄ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルニ依リ當院ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人西山新四郎ヲ懲役八年ニ被告人川瀨清光ヲ懲役七年ニ處ス
但右被告人等ニ對シ原審ニ於ケル未決勾留日數中各五十日ヲ夫々右本刑ニ算入ス
押收ニ係ルヒ首及鞘(證第八號同第九號)ハ執レモ之ヲ沒收ス
訴訟費用ハ全部被告人等ノ連帶負擔トス

理由

被告人川瀨清光同西山新四郎ノ兩名ハ電氣熔接工ニシテ岩手縣釜石市所在日本製鐵株式會社釜石製鐵所工場ノ擴張工專請負人ノ配下ニ屬シ働キ居リタルモノナルトコロ昭和十四年六月十六日午後三時半頃被告人清光ハ仕事半ニシテ職

場ヲ退去シタルヲ所屬落合工場所ノ現場監督ナル森田優ヨリ叱責セラレ甚シク不快ヲ感シ居リタルカ偶同夜同市大渡二丁目通曉食堂事大和よし方ニ赴キ同シク來合セタル被告人西山新四郎及同工場ニ働キ居ル鐵工中島佐部郎(原審相被告人)ト會飲シナカラ盛ニ右憤懣ノ情ヲ兩名ニ訴ヘ閉店時刻ニ到リ漸ク同所ヲ出テ翌十七日午前零時十分頃三名打連レテ被告人清光及新四郎ノ止宿先ナル同市大字釜石第五地割五十四番地後藤慎一郎方ニ立歸リタルモ被告人清光ニ於テ森田優ニ叱責セラレタル憤懣ノ情容易ニ去リ難ク被告人新四郎及中島佐部郎ニ對シ街路ニ出テ他人ニ喧嘩ヲ挑ミ相手ヲ遣付ケ餘憤ヲ霽シ來ルヘシト申向クルヤ右兩名モ即座ニ之ニ贊同シ被告人新四郎ハ今夜ハ久々ニテ血ヲ見テ氣晴ヲ爲シ來ラント放語シ自己ノ「トランク」ヨリ其ノ所有ニ係ル匕首一振(證第八、第九號)ヲ取り出シ俱ニ相携ヘテ右宿所ヲ立出テ同日午前零時三十分頃大渡二丁目通近野元吉方前道路ニ差蒐ルヤ先ツ中島佐部郎ハ偶々來合セタル金子三之助(當四十二年)ニ突當リ喧嘩ヲ挑ミ次テ被告人兩名モ之ニ打チ懸リ三之助ニ於テ之ニ應シ頑強ニ抵抗シ雙方入亂レテ互ニ毆リ合ヒタルカ三之助ノ力優リ却ツテ被告人等ヲ翻弄シ反撃ヲ加フルニ到リシ爲被告人新四郎ハ憤激ノ餘所携ノ前記匕首ヲ以テ三之助ニ斬リ付ケンコトヲ企テ「之レテ遣付ケロ」ト右匕首ヲ中島佐部郎ニ手交シ佐部郎被告人清光兩名モ其ノ意ヲ感得シ茲ニ三名意思連絡ノ下ニ三之助ニ仕蒐リ行キ佐部郎ハ被告人清光、新四郎兩名カ三之助ニ立向ヒ居リタル手許ヲ潛リ匕首ヲ振ヒテ三之助ノ大腿部ヲ突キ刺シ因テ同人ノ左大腿外側回旋動脈ヲ切斷シ失血ノ爲間モナク死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人等ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項第六十條ニ該當スルヲ以テ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人西

山新四郎ヲ懲役八年ニ被告人川瀨清光ヲ懲役七年ニ處シ同法第二十一條ニ則リ原審ニ於ケル未決勾留日數中各五十日ヲ夫々右本刑ニ算入シ押收ニ係ル主文掲記ノ物件ハ本件犯行ニ供シタル物ニシテ犯人以外ノ者ニ屬セサルヲ以テ同法第十九條第一項第二項ニ從ヒ之ヲ沒收スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十八條ヲ適用シ被告人等ヲシテ連帶負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス
本件控訴ハ理由ナシ

昭和十四年十二月二十二日

宮城控訴院刑事部

一七七 傷害致死

判決

本籍 茨城縣久慈郡宮川村大字下野宮三千四百四十四番地
住居 同縣同郡同村大字同千二百七十一番地 大金政治方
貨物自動車運轉助手 大森利喜藏

明治三十二年四月二十二日生

右ノ者ニ對スル殺人被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

一七七 傷害致死

六二七

明治三十九年三月十二日生

右ノ者ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ懲役五年ニ處ス

但シ未決勾留日數中六拾日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ建築、指物等ノ大工職ナルトコロ性來短氣ニシテ嫉妬心深ク二十一歳頃ヨリ數名ノ婦女ト夫婦關係ヲ結ビタルモ孰レモ短期間ニテ不仲トナリ離別シタルモノナルカ昭和十四年十月中旬友人ノ紹介ニヨリ宮崎縣北諸縣郡高崎町(當時高崎村)大字繩瀨千六百四十一番地ノ八ニ於テ幼女タキエ(當六年)ヲ擁シ怙シク駄菓子商等ヲ營メル寡婦重野タエヲ知ルニ及ヒ同女ト關係ヲ生シ同月二十五日頃ヨリ右タエ方ニテ同女ト同棲シ内縁ノ夫婦關係ヲ續ケ居リタルトコロ同年十一月七日頃淋病ニ罹リタルヨリ右ハタエカ他ニ情夫ヲ有スルニ因ルモノナリト思惟シ同女ニ對スル嫉妬ノ情ニ驅ラレテ絶ヘス同女ヲ詰責虐待シ殊ニ幼女タキエニ對シテハタエヲ監視セシムル爲自己カ外出ヨリ歸宅スル迄ハ夜半ニ至ルモ就寢スルコトヲ許サス昭和十五年一月八日夜ノ如キハタエカ居眠ヲ爲シタリトテ痛ク叱責シ同人ヲ裸體ト爲シ寒風強キ裏庭ニ於テ冷水ヲ浴セ剩ヘ同人ノ身體ヲ小脇ニ抱キ逆サニシテ其ノ頭部ヲ小便壺ニ浸ヌ等ノ残忍ナル折檻ヲ加ヘタルコトモアリタルカ同月十日午前零時半頃外出先ヨリ歸宅シタル際ニモタキエカ居眠ヲ爲シタルヨリ

痛ク之ニ憤慨シタキエヲ裸體ト爲ラシメテ裏庭ニ追出シタル後數回同人ニ冷水ヲ浴セ且裏庭野菜畑附近ノ地面ニ打伏セトナリテ泣キ居ルタキエヲ沈黙セシムカ爲手ヲ以テ同人ノ頭部ヲ押ヘテ其ノ顔面部ヲ野菜畑ト塵捨場トノ間ノ濕潤ナル地面ニ壓迫シ更ニ下足ノ儘其ノ身體ヲ踏付ケ果テハタキエノ腕ヲ摑ミテ其ノ身體ヲ振廻ス等ノ暴行ヲ盡シ其ノ儘タキエヲ十數分間裏庭ニ放置シ因テタキエニ對シ其ノ顔面部背部等ニ無數ノ打撲傷、擦過傷ヲ負ハシメ遂ニ同人ヲシテ前記顔面部ノ壓迫ニ因ル泥水及泥土ノ吸引ニヨリ間モナク同所ニ於テ窒息死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百五條第一項ニ該當スルヲ以テ其ノ所定期刑範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役五年ニ處シ同法第二十一條ヲ適用シ未決勾留日數中六拾日ヲ右本刑ニ算入シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ從ヒ被告人ヲシテ全部之ヲ負擔セシムヘキモノトス

昭和十五年五月三十一日

宮崎地方裁判所刑事部

一七九 尊屬傷害致死、傷害致死

判 決

本 籍 青森縣下北郡大畑町大字大畑字釣屋濱四番地三號

一七九 尊屬傷害致死、傷害致死

住居 同縣同郡同町大字大畑字二枚橋

漁業

濱谷 甚三郎

當三十三年

本籍 函館市松陰町十二番地

住居 青森縣下北郡田名部町大字田名部字柳裏十四番地

祈禱師

成田 やな

當三十一年

右被告人等ニ對スル傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人兩名ヲ各懲役二年ニ處ス

但シ本裁判確定ノ日ヨリ四年間夫々右刑ノ執行ヲ猶豫ス

訴訟費用ハ全部被告人兩名ノ連帶負擔トス

理 由

被告人甚三郎ハ其ノ近親ニ精神病者アリ殊ニ實姉イワ(當時四十三年)ハ數年前ヨリ精神ニ異常ヲ呈シ屢、亂暴ノ舉ニ出ツルカ如キコトアリタルヨリ之カ治療ニ腐心シ居タルモノ、被告人やなハ神道大教神明講社ト稱シ昭和十五年四月頃ヨリ肩書住居ニ於テ病人ノ加持祈禱ヲ業ト爲シ居タルモノナルトコロ、被告人甚三郎ハ豫テ右イワノ平癒祈禱方ヲ依

頼シタル被告人やなヨリイワニハ狐カ憑キ居ルモノナレハ之ヲ落ササル限リ崇子孫ニ及フモノナル旨聞知シ狐若クハ落ヲ落スコトハ即チ祈禱ト同時ニ身體ニ暴行ヲ加フルモノナルコトヲ知悉シナカラ右やなノ言ヲ盲信シ右イワノ狐若クハ落ヲ落サンカ爲昭和十五年八月八日午後九時頃ヨリ青森縣下北郡大畑町大字大畑字二枚橋ナル被告人甚三郎方ニ於テやなニ先ツ祈禱ヲ爲サシメタルカやなハ偶、同席祈禱シ居タル家族並親戚ノ土佐市作、戸澤善也、土佐末吉等十數名ノ内甚三郎ノ實母濱谷サト(當時七十三年)ノ態度ヲ怪シト見ルヤ同女モ亦猶憑ナリト宣言シイワ同様此ノ落ヲ落ス要アル旨ヲ慫慂シ甚三郎ハ即座ニ同女ノ落ヲ落スコトヲ承諾シ茲ニ被告人兩名ハサト及イワニ對シ祈禱ト同時ニ暴行ヲ加フヘキコトヲ共謀シ犯意繼續ノ上同日午後九時三十分頃ヨリ同日午後十時三十分頃迄同月九日午後十二時頃ヨリ翌十日拂曉ニ至ル迄ノ間サトニ對シ甚三郎ハ其ノ頤部脚部等ヲ強ク押ヘ付ケやなハ其ノ胸部兩腋下等ヲ強壓シ或ハ顔面ニ水ヲ注キ口中ニ鹽灰等ヲ詰込ミ市作、善也ハやなノ指圖ニ基キ其ノ頤部、兩腋下、胸部等ヲ壓迫シイワニ對シ甚三郎ハ其ノ手ヲ押ヘ付ケやなハ鹽等ヲ口中ニ押込ミ或ハ胸部、腋下等ニ鹽類ヲ塗布シ更ニ同部位ヲ壓シ市作、善也、末吉等ハやなノ指圖ニ依リ其ノ顔面ヲ毆打シ頤部手足胸部兩腋下等ヲ強壓シタル外唐辛、點火セル煙草等ヲ以テ鼻口ヲ燻ス等暴行ノ限リヲ盡シ因リテサトニ對シテハ顔面頸部胸部兩腋下等ニ多數ノ皮下出血、表皮剝脫、左第二乃至第五肋骨右第二乃至第四肋骨々折左側胸部ヨリ背部ニ亘ル筋層剝離及出血イワニ對シテハ顔面頸部胸部兩腋下等ニ多數ノ皮下出血、表皮剝脫等ノ各傷害ヲ加ヘ兩名ヲシテ昭和十五年八月十日午前六時頃前掲甚三郎方ニ於テ右外傷ニ基キ「シヨツク」死ニ至ラシメタルモノナリ

(證據省略)

一七九 尊屬傷害致死、傷害致死

法律ニ照スニ被告人甚三郎ノ判示所爲中サトニ對スル所爲ハ刑法第二百五條第二項第六十條ニイワニ對スル所爲ハ同法第二百五條第一項第六十條ニ各該當スルトコロ犯意繼續ニ係ルヲ以テ同法第五十五條第十條ヲ適用シ重キサトニ對スル傷害致死罪ノ一罪ト爲シ其ノ所定刑中有期懲役刑ヲ選擇シ犯情憫諒スヘキモノアルヲ以テ同法第六十六條第七十一條第六十八條第三號ニ則リ酌量減輕ヲ爲スヘク被告人やなノ判示所爲中サトニ對スル所爲ハ同法第二百五條第二項第六十條ニ該當スルモ同法第六十五條第二項ニ依リ同法第二百五條第一項ヲ適用スヘクイワニ對スル所爲ハ同法第二百五條第一項第六十條ニ該當シ右ハ犯意繼續ニ係ルヲ以テ同法第五十五條第十條ヲ適用シ重キサトニ對スル傷害致死罪ノ一罪ト爲シ各所定期刑範圍内ニ於テ被告人兩名ヲ各懲役二年ニ處スヘク尙被告人兩名ニ對シテハ情狀ニ因リ同法第二十五條刑事訴訟法第三百五十八條第二項ヲ適用シ本裁判確定ノ日ヨリ四年間夫々右刑ノ執行ヲ猶豫スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項第二百三十八條ニ則リ全部被告人兩名ヲシテ之ヲ連帶負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十二月十九日

〇〇地方裁判所刑事部

一八〇 傷害致死、傷害

判決

本籍 北海道空知郡三笠山村大字幌内村炭山礦第十八番三號

住居 北海道夕張郡夕張町字高松四區百八十四番川口組内

土工坑内係員

岡部 常三郎

明治三十六年六月十七日生

本籍 北海道苫前郡天賣村十六番地

住居 北海道夕張郡夕張町字高松四區川口組二號飯場

土工夫

大高 寅助

明治三十五年十月五日生

右ノ者ニ對スル各傷害致死傷害被告事件ニ付昭和十四年五月二日札幌地方裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ各被告人ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當院ハ檢事某關與更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人岡部常三郎ヲ懲役四年

被告人大高寅助ヲ懲役一年四月ニ處ス

但シ被告人岡部常三郎ニ對シ原審ニ於ケル未決勾留日數中九十日被告人大高寅助ニ對シ原審及當審ニ於ケル未決勾留日數中各九十日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用中原審ニ於テ鑑定人及證人廣田東治ニ支給シタル分ハ被告人兩名原審相被告人佐藤重義同大橋順吉同録田金太郎同倉彌助同峯芳太郎及同川上嘉久郎ノ連帶負擔當審ニ於テ證人佐々木橋藏及同橋本行義ニ各支給シタル

被告人岡部常三郎ハ十六、七歳ノ頃ヨリ坑夫若クハ日雇トシテ北海道内各地ヲ轉々シ昭和十三年六月夕張郡夕張町宇高松四區ナル株式会社川口組夕張出張所ノ第二號飯場ニ入り同年七月ヨリ同飯場ノ管理者トナリ百數十名ノ土工ヲ指揮監督シテ同組カ北海道炭礦汽船株式会社ヨリ請負ヒタル夕張炭礦坑道掘鑿等ノ工事ニ使役シ來レルモノ被告人大高寅助ハ生來不遇ニシテ東都ニ高等ノ學問ヲ修メタルモ中途ヨリ退學流浪シ昭和十三年一月母ヲ尋ネテ北海道ニ來リ後前掲川口組ノ飯場ニ入り同年七月ヨリ其ノ第二號飯場ノ土工幹部トナリテ被告人岡部ノ指揮ノ下ニ他ノ幹部等ト共ニ主トシテ土工ノ逃走監視ノ任ニ當レルモノナルカ同飯場ハ其ノ設備及土工ノ處遇不良ノ爲脚氣患者續出スルト共ニ土工夫中逃走者頻發シタルヨリ被告人岡部ハ之ヲ憂慮シ疾病患者ニ對シテハ容易ニ休業ヲ許可セス休業者ニ對シテモ速ニ就業ヲ迫リ相當重症患者ヲモ稼働セシメ一面逃走ヲ企テタル者ニ對シテ所謂「燒ヲ入レル」ト稱シ自ラ暴行ヲ加フル外被告人大高及同飯場ノ幹部タル原審相被告人佐藤重義同飯場ノ週番タル同大橋順吉及同録田金太郎同飯場ノ模範土工タル同倉彌助同峯芳太郎及同川上嘉久郎等ニ對シテモ暗ニ之ヲ要求シ被告人大高等モ被告人岡部ノ意ヲ體シテ同様ノ暴行ヲ慣行セルモノナルトコロ

第一、被告人兩名ハ原審相被告人佐藤重義同録田金太郎等ト共謀ノ上昭和十三年八月五日頃、前掲飯場ノ土工夫阿部幸作(當二十一年)カ逃走セントスルヲ取押ヘ同飯場内ニ於テ同人ニ對シ交モ角材、皮バンド、下駄等ヲ以テ頭部等身體ヲ亂打スル等ノ暴行ヲ加ヘ因テ同人ヲシテ後頭部右脇關節部及腰部ニ於テ全治二週間ヲ要スル挫創ヲ負ハシメ

第二、被告人岡部常三郎ハ原審相被告人佐藤重義等ト共謀ノ上同年九月九日同飯場土工夫梅田正男(當二十六年)カ逃走セントスルヲ取押ヘ同飯場内ニ於テ同人ニ對シ交モ下駄、木刀、皮バンド、手拳ヲ以テ頭部等身體ヲ毆打シ因テ同人ヲシテ兩大腿左脇關節打撲傷及背部擦過創ニシテ全治二週間ヲ要スル傷害ヲ負ハシメ

第三、被告人岡部常三郎ハ原審相被告人佐藤重義等ト共謀ノ上同年同月十日頃同飯場土工夫落合長吉(當三十一年)カ逃走セントスルヲ取押ヘ同飯場内ニ於テ同人ニ對シ交モ皮バンド、及手拳ヲ以テ頭部等身體ヲ毆打シ因テ同人ヲシテ右背部ニ於テ全治二週間ヲ要スル膿疱性潰瘍ヲ負ハシメ

第四、被告人岡部常三郎ハ原審相被告人大橋順吉等ト共謀ノ上同年同月十日頃同飯場ノ土工夫新川宣徳(當二十五年)カ逃走セントスルヲ取押ヘ同飯場内ニ於テ同人ニ對シ交モ下駄及手拳ヲ以テ顔部等ヲ毆打シ頭部等ヲ足蹴ニスル等ノ暴行ヲ加ヘ因テ同人ヲシテ後頭部及眼部ニ於テ全治二週間ヲ要スル傷害ヲ負ハシメ

第五、被告人岡部常三郎ハ同年八月十七日朝同飯場ニ於テ當時疾病休業中ノ土工夫ニ對シ速ニ就業ヲ迫リ折柄脚氣重症ナリシ土工夫高田義夫(當二十四年)ニ對シ同飯場ノ土間ニ引倒シ足蹴ニスル等ノ暴行ヲ加ヘ因テ同人ヲシテ其ノ病狀ヲ惡化セシメ同月二十一日夕張町夕張炭礦病院ニ於テ脚氣衝心ニヨリ死ニ致ラシメ

第六、被告人大高寅助ハ原審相被告人峯芳太郎及同川上嘉久郎ト共謀ノ上同年同月二十四日夕刻同飯場ニ於テ重症脚氣患者ナル土工夫三宅與一(當二十九年)カ食事ノコトニ付不遜ノ言動アリトシテ之ヲ難詰シ交モ同人ニ對シ手拳、皮バンド及込棒(長サ約三尺)ニシテ坑内爆破等ニ火藥類ヲ裝填スルニ使用スルステツキ様ノ棒等ヲ以テ身體ヲ數回毆打スル等ノ暴行ヲ加ヘ因テ同人ヲシテ其ノ病狀ヲ惡化セシメ翌二十五日前掲病院ニ於テ脚氣衝心ニヨリ死ニ致ラ

第七、被告人岡部常三郎ハ原審相被告人大橋順吉同佐藤重義同鎌田金太郎及同倉彌助ト共謀ノ上同年九月七日早朝重症脚氣患者タル土工夫眞坂眞吉(當二十年)カ監督者ニ無斷ニテ休業セントシタルヨリ之ヲ詰リ同飯場内ニ於テ交モ右同人ニ對シ平手及手拳ヲ以テ毆打シ土間ニ引倒シ足蹴ニスル等ノ暴行ヲ加ヘ因テ同人ヲシテ其ノ病狀ヲ惡化セシメ同日午後七時頃脚氣衝心ニヨリ死ニ致ラシメタルモノニシテ被告人兩名ノ所爲ハ孰レモ犯意繼續ニ係ルモノトス

(證據省略)

法律ニ照スニ被告人岡部常三郎ノ判示第一乃至第四ノ各所爲及被告人大高寅助ノ判示第一ノ所爲ハ各刑法第二百四條第六十條被告人岡部常三郎ノ判示第五ノ所爲ハ同法第二百五條第一項同判示第七ノ所爲及被告人大高寅助ノ判示第六ノ所爲ハ各同法第二百五條第一項第六十條ニ該當スルトコロ被告人兩名ノ各所爲ハ孰レモ連續犯ナルヲ以テ同法第十五條ニ依リ重キ傷害致死罪ノ刑ニ從ヒ處斷スヘキトコロ被告人大高寅助ニ對シテハ犯罪ノ情狀憫諒ス可キモノアルヲ以テ同法第六十六條第六十八條第三號ニ依リ減輕シ各其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人岡部常三郎ヲ懲役四年被告人大高寅助ヲ懲役一年四月ニ處スヘク但シ同法第二十一條ヲ適用シテ主文第二項掲記ノ如ク各未決勾留日數中ノ一部ヲ右各本刑ニ算入シ訴訟費用ニ付テハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項第二百三十八條ニ則リ主文第三項掲記ノ如ク連帶負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年十一月二十一日

札幌控訴院刑事部

一八一 傷害致死

判決

本籍 石川縣石川郡鶴來町マ二十三番地
住居 樺太大泊郡大泊町大字大泊字本町東二條北三丁目番外地 佐々木勝造方
飯場管理者 北 由 治
明治三十五年三月七日生

本籍 山形縣東田川郡八栗島村大字八色木字荒落九十二番地
住居 樺太敷香郡敷香町大字上敷香字上敷香俗稱ハラス場S地施設工事場佐々木組第一號飯場
土工幹部 小 鷹 馬 藏
明治三十二年四月二十五日生

本籍 鹿兒島縣大島郡古仁屋町手安百三十二番地
住居 右佐々木組第一號飯場
土工幹部 岡 萬 藏

一八一 傷害致死

六三九

明治三十一年五月十日生

本籍 福井縣坂井郡竹田村山竹田第七號三番地
住居 前記佐々木組第一號飯場

土工幹部

片岡源之丞

明治四十年十一月二十日生

本籍 大阪市東成區猪飼野東六丁目六番地
住居 前記佐々木組第一號飯場

土工準幹部

寺西竹次郎

明治四十二年四月十九日生

右ノ者等ニ對スル各傷害致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人小鷹馬藏ヲ懲役四年ニ被告人片岡源之丞、寺西竹次郎ヲ各懲役參年ニ被告人岡萬藏、北由治ヲ各懲役貳年ニ處ス

被告人北由治ヲ除ク爾餘ノ各被告人ニ對シ未決勾留日數中百八拾日宛ヲ右各本刑ニ算入ス被告人北由治ニ對シ參年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

訴訟費用ハ全部被告人等ノ連帶負擔トス

理 由

被告人等ハ孰レモ樺太敷香郡敷香町大字上敷香俗稱バラス場S地施設工事請負人佐々木組佐々木勝造ニ雇ハレ同工事場所所在佐々木組第一號飯場ニ於テ被告人北由治ハ右飯場管理者被告人岡萬藏、小鷹馬藏、片岡源之丞ハ土工幹部被告人寺西竹次郎ハ土工準幹部トシテ收容土工夫ヲ指揮監督シ施設工事ニ從事シ居リタルモノナルトコロ

第一、被告人萬藏ハ昭和十三年十月十七日午前十一時頃偶々外出先ヨリノ歸途曩ニ右飯場ヨリ脱走シタル土工夫市川銀次郎(當時二十八年)ヲ取押ヘ右飯場ヨリ約二軒隔リタル大工作業場ニ引立テタル上同日正午頃折柄同所ニ居合ハセタル被告人源之丞、馬藏、竹次郎等ノ幹部ニ對シ同人ヲ取押ヘ來リタルモノナル旨告ケ突如平手ヲ以テ同人ノ頬ヲ數回毆打スルヤ之ヲ目撃セル右被告人三名モ相次イテ同人ノ身邊ニ參集シ夫々犯意ヲ共通シ平手ヲ以テ交々同人ノ頬ヲ數回毆打シ尙ホ被告人馬藏ハ同人ヲ數回足蹴ニシ

第二、次テ被告人馬藏ハ右大工作業場ヨリ約二十七、八間離レタル砂利置場ニ右銀次郎ヲ連行シ作業ヲ命シタルニ當時同人カ脚氣ヲ患ヒ居リタル爲休養ヲ嘆願スルヤ之ヲ狡猾ナルニヨルモノナリト做シ同所附近ノ水深約四、五寸面積約一坪ノ水溜中ニ同人ヲ俯向ニ押倒シタル上後襟ヲ掴ミテ數回顔面ヲ右水溜中ニ押込ミ救助ヲ哀願スルモ肯容レサルノミカ尙モ數回右水溜中ニ押倒シ同所ニ居合ハセタル被告人竹次郎ハ同馬藏ト犯意ヲ共通シ同人ヲ前記水溜中ニ押倒シ半纏ト猿又ヲ着シ居ルニ過キサル同人ヲ約一、二時間右砂利置場附近ノ大工飯場軒下ニ居ラシメ

第三、同日午後五時過頃被告人源之丞ハ右大工飯場風呂場流シ床下ニ逃避シ居リタル右銀次郎ヲ引出シタル上強ヒテ「リヤカー」ニ乗セ尙逃走ノ虞アリト做シ藁繩ヲ以テ同人ノ足ヲ右「リヤカー」ニ縛シ被告人源之丞、馬藏ハ相共ニ

之ヲ前記第一號飯場ニ運ヒ同飯場土間ニ於テ被告人源之照、馬藏、竹次郎、萬藏ノ四名ハ夫々犯意ヲ共通シ平手ヲ以テ交々同人ノ頬ヲ毆打シ尙被告人源之照、馬藏ハ足蹴ヲ加ヘ同人カ身體ヲ洗ハントシ被告人竹次郎ニ伴ハレ同飯場風呂場ニ到リタルニ氣力ヲ失ヒタル爲流シ場ニ轉倒シ起キ上ラサリシヲ看タル被告人由治ハ之ヲ狡猾ニヨルモノナリト立腹シ右被告人等ト意思相通シ「俺カ目ヲ醒マサセヤル」トテ全裸體ト爲リ居タル同人ノ上體部ニ傍ニ在リタル四斗樽ノ冷水ヲ柄杓(證第一號)ヲ以テ數回浴セ掛ケタルモノニシテ被告人等ノ前記暴行ノ爲右銀次郎ハ中毒性シヨツク等ヲ惹起シ因テ翌十八日午前零時三十分頃同飯場ニ於テ遂ニ死亡スルニ至リタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人等ノ判示所爲ハ各刑法第二百五條第一項第六十條ニ該當スルヲ以テ夫々其ノ所定期刑範圍内ニ於テ各被告人ヲ主文掲記ノ刑ニ處シ被告人由治ヲ除ク爾餘ノ各被告人ニ對シ同法第二十一條ニ則リ未決勾留日數中百八拾日宛ヲ右各本刑ニ算入シ被告人由治ニ對シ情狀刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條ニ則リ參年間右刑ノ執行ヲ猶豫シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項第二百三十八條ニ則リ被告人等ヲシテ全部連帶シテ負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年七月二十八日

樺太地方裁判所刑事部

一八二 傷 害

判 決

本籍並住居

兵庫縣赤穂郡相生町相生千四百五十番地ノ一

土 工

安 原 和 男

當二十年

主 文

被告人ニ對スル刑ヲ免除ス

理 由

右者ニ對スル傷害被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

被告人ハ昭和十一年三月二十二日午後一時頃大壁五助ニ雇ハレ北川新治ト共ニ兵庫縣赤穂郡相生町松ノ浦道路ノ南西相生港岸壁ニ於テ砂利ヲ積載シ來レル發動機船ヨリ砂利ノ陸揚ケ運搬作業ニ從事中北川新治カ其ノ附近ニ居合セタル鮮人女崔谷連(當五十八年)ニ對シ鮮語ニテ擲擲ヒシ爲同女カ憤リ之ト爭論シ右岸壁ヲ去ル約三間ノ陸上ニ於テ籠付天秤棒ヲ以テ同女ノ顔面及頭部ヲ毆打シ右發動機船ニ逃クルヤ同女カ其ノ後ヲ追駈ケタルヲ認メタルヨリ之ヲ仲裁セントシタル處同女カ被告人ヲ北川新治ノ同類ト速斷シタルモノカ被告人ノ胸倉ヲ掴ミ懸リ來タルヨリ正面ヨリ同女ヲ突飛ハシ相生港岸壁ヨリ海中ニ墜落セシメ因テ同女ニ對シ治療約四日間ヲ要スル氣管支炎症ヲ負ハシメタルモノナリ

法律ニ照スニ判示認定ノ如ク北川新治カ崔谷連ト爭論シ同女ヲ毆打シテ發動機船ニ逃クルヤ同女カ其ノ後ヲ追駈ケタルヲ被告人カ認メ之ヲ仲裁セントシタル處同女カ被告人ヲ北川新治ノ同類ト速斷シタルモノカ被告人ノ胸倉ヲ擱ミ懸リ來リタルハ被告人ニ對シ急迫不正ノ侵害アリシモノト云フヘク此ノ侵害ヲ避クルカ爲被告人カ同女ヲ突飛ハシタルハ自己ノ權利ヲ防衛スル爲ニ出テタル行爲ナルコトハ之ヲ看取シ得ヘキトコロナルモ崔谷連ハ前示ノ如ク齡五十八歳ノ老女ナルニ被告人ハ肉體勞働ニ從事セル身長五尺五寸以上アル強壯ナル者(右ハ證人安原辰之助ノ當公廷ニ於ケル其ノ旨ノ供述ニヨリ之ヲ認ム)ナレハ右崔谷連ノ侵害行爲ニ對シ之ヲ避クル爲ニハ同女ノ海中ニ墜落スル虞アルヲ認識シナカラ同女ヲ突飛ハスカ如キ所爲ニ出テストモ同女ニ傷害ヲ生セシメサル如キ他ノ適當ナル手段アリシコトヲ認メラルルヲ以テ被告人ノ所爲ハ正當防衛ノ行使ニ非スシテ防衛ノ程度ヲ踰越シタルモノト云ハサルヘカラス、依テ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百四條ニ該當スルモノナルトコロ證人安原辰之助ノ當公廷ニ於ケル被告人ノ性行智能健康狀態等ニ關スル供述並證人大壁五助ノ當公廷ニ於ケル被告人ノ作業能力性格等ニ關スル供述ト被告人ノ當公廷ニ於ケル供述態度等ヲ彼此考覈スレハ被告人ハ幼時不慮ノ災禍ニヨリ頭部ヲ損傷シテヨリ其ノ智能ノ發達常人ニ比シ甚タ乏シク感情ノ興奮スルヤ之ヲ抑制スル氣力缺クモノナルコトヲ窺フニ足リ前示認定ノ如キ狀況ノ下ニ於ケル防衛ノ程度ヲ超エタル行爲ハ情狀憫量スヘキ點アルヲ以テ同法第三十六條第二項ニ則リ被告人ニ對シ特ニ刑ヲ免除スルヲ相當ト認ムヘキモノト辯護人ハ被告人ニ於テ犯時心神喪失ノ狀況ニアリタルモノト主張スルモ右事實ハ之ヲ認メラレサルヲ以テ右主張ハ之ヲ排斥ス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十一年六月八日

龍野區裁判所

一八三 傷害

判決

本籍 長崎縣北松浦郡南田平村大字小手田二百六十六番戶第二

住居 同縣同郡同村大字小手田山内免三百六十七番地

無職

中 倉 武 一

明治三十二年三月二十日生

本籍 長崎縣北松浦郡南田平村大字小手田大久保免五百二十七番地

住居 同縣同郡同村大字小手田免八百八十二番地

藝妓置屋業

稻 澤 朝 則

明治三十四年五月七日生

右兩名ニ對スル傷害被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

一八三 傷 害

六四五

被告人武一ヲ懲役四月ニ被告人朝則ヲ懲役六月ニ處ス

但シ未決勾留日數中各三十日ヲ右各本刑ニ算入ス

押收物件中證第一號下駄一足證第二號釣絲卷一個ハ之ヲ沒收ス

訴訟費用ハ全部被告兩名ノ連帶負擔トス

理由

被告人武一、同朝則ハ昭和十年十月二十四日午後六時頃ヨリ長崎縣北松浦郡南田平村大字小手田山内免五百二十五番地ノ三藝妓置屋小松屋事松田新藏方ニテ同人竝ニ木原龜一等ト飲酒中午後八時頃原廉平ナル者泥酔シテ右小松屋ニ入り來リ酒ヲツケテ吳レト求メタルトコロ松田ノ妻ヨリ酒ハナイト斷ハラレタル事ニ端ヲ發シ原、松田ノ兩名ハ口論ヲ爲シ格闘ヲ始ムルヤ被告人朝則ハ松田ニ加擔シテ原ト爭鬪シ被告人武一ハ一旦雙方ヲ引分ケタルモ原ハ右制止ニ肯セス松田方器物ヲ投散ラシ之ヲ破壊スルニ至リシヨリ被告人武一ハ折柄騒キヲ聞キテ駈付ケ來リタル瀬崎洋、木村團作等ニ對シ原ヲソビキ出シテ水ヲ掛ケルカ潮ニ浸ケヨト命シ瀬崎、木村カ原ノ兩手ヲ取り地上ヲ引摺リ行クヤ被告人朝則ハ抵抗不能ノ原ノ頭部ヲ下駄ヲ以テ數回毆打シ更ニ再ヒ原カ被告人朝則ニ器物等ヲ投ケ付ケタルヨリ瀬崎カ原ノ醉ヲ醒マシテ遺ル爲メ水ヲ掛ケント外ニ引キ出サントスル際被告人朝則ハ有合セタル釣用ノ絲卷ヲ以テ原ノ頭部ヲ數回毆打シ更ニ川島武美等カ原ヲ看護シテ連レ歸ラントシテ小松屋ヨリ數町隔リタル牧山食堂前ニ差蒐ルヤ被告人朝則ハ之ヲ追ヒ駈ケ來リ原ノ後方ヨリ下駄ヲ以テ其ノ頭部ヲ數回毆打シタル爲メ原カ立腹シテ再ヒ小松屋ニ引返シ來リタルヨリ被告人武一ハ一應ハ原ヲ宥メントシタルモ原カ其ノ慰撫ニ應セス小松屋門前ニテ被告人朝則ト爭鬪ヲ始メタルニ業

ヲ煮シ立腹ノ餘原ヲ投倒シ地上ニ急顛倒セシメ其ノ頭部ヲ強打セシメ因ツテ右兩被告人ノ所爲ニヨリ原ヲシテ疾病休業百日餘全治百二十日餘ヲ要スル前頭骨ノ左側ニ於ケル龜裂骨折ヲ伴フ蜘蛛膜出血竝ニ頭部顔面四肢軀幹等ニ限局セル皮下溢血ヲ伴フ大小無數ノ打撲傷及該部ノ下或ハ他部ニ於ケル擦過傷竝ニ左眼ニ失明ニアラサルモ明暗ヲ識別スル程度ノ視力障害ヲ被ラシメ而モ兩被告人ノ加ヘタル傷害ノ輕重ヲ判知シ能ハサルモノナリ

(證據省略)

法律ニ照スニ判示被告兩名ノ所爲ハ刑法第二百七條第六十條第二百四條ニ該當スルヲ以テ懲役刑ヲ選擇シ各主文記載ノ刑ヲ量定處斷スヘク同法第二十一條ヲ適用シ未決勾留日數中各三十日ヲ右本刑ニ算入スヘク押收物件中證第一號下駄一足證第二號釣絲卷一個ハ本件犯罪ノ用ニ供シタル物件ニシテ犯人以外ノ者ニ屬セサルヲ以テ同法第十九條第一項第二號第二項ニ依リ之ヲ沒收スヘク訴訟費用ニ付テハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項第二百三十八條ヲ適用シ被告兩名ヲシテ主文掲記ノ如ク負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十年十二月二十八日

平戸區裁判所

一八四 暴 行

判 決

本籍並住居

秋田縣河邊郡和田町諸井字大部四十六番地ノ一

六四八

牛馬商

角 田 桂 橋

當三十九年

右ノ者ニ對スル暴行被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ科料金十五圓ニ處ス

右科料ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金一圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス
訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ昭和十五年五月二十日午前七時頃秋田縣河邊郡和田町諸井字野田俗稱谷地ノ堤附近ノ草刈道ニ於テ當時犬猿ノ間柄ナリシ田近猛悉(當四十六年)ト用水ノコトヨリ口論ノ際偶、同所ニ倒レタル同人ヲ手ニテ押シ水田中ニ轉落セシメ以テ暴行ヲ爲シタルモノナリ

證據ヲ按スルニ判示事實ハ

一、被告人ノ當公廷ニ於ケル判示同旨ノ供述

一、田近猛悉作成ニ係ル告訴狀ト題スル書面中自分ハ判示日時自宅ヨリ五町位離レタル水田ニ引水ニ行キ歸宅セントシタル際判示草刈道ニ於テ自轉車ニテ來リタル被告人ト用水ノコトニ付口論シ其處ヲ通り抜ケントシタルカ同人ハ自分ニ對シ「何ヲシタル」

此野郎ト申シ自分ノ持チ居タル鐵ヲ奪ヒ取り五、六間投飛ハシタリ自分ハ其ノ頃同人ト非常ニ仲カ悪カリシ故抵抗セハ殺サレルカモ知レント考ヘ其ノ儘行カント急キ足ニテ五、六間進ミタルトコロ後ヨリ追駈ケ來リ自分ヲ擱倒シ水田ノ中ニ押込ミタル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認メ得ルヲ以テ判示事實ハ其ノ證明十分ナリ

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百八條ニ該當スルヲ以テ其ノ所定刑中科料刑ヲ選擇シ其ノ金額範圍内ニ於テ被告人ヲ科料金十五圓ニ處シ右科料ヲ完納スルコト能ハサルトキハ刑法第十八條ニ則リ金一圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十一月七日

秋田區裁判所

第二十八章 過失傷害ノ罪

一八五 過失致死

判 決

一八五 過失致死

六四九

本籍 鳥取縣岩美郡本庄村大字恩志七百九十一番地
住居 鳥取市湯所町二百六十八番地
農業

植田邦義

當四十六年

主文

右ノ者ニ對スル過失致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

被告人ヲ罰金拾圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ壹圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

理由

被告人ハ昭和十二年三月六日午後三時半頃鳥取市湯所町宇山所在山林ニ於テ根元ノ周圍約三尺五寸長サ約五間鬱蒼トシテ枝葉ノ繁茂セル縦ノ根切ヲ爲サントシタルカ同所ハ急傾斜ニシテ其下方數間ノ地點ニ大西ユキ(當六十一年)カ居タルニ付斯カル場合ニハ根切りセラレタル縦ノ樹木ハ其ノ枝葉ト共ニ轉々シユキニ衝突スル危害發生ノ虞アルニ付同人ヲ安全ナル方向ニ立去ラシメタル後根切スル等之カ危害發生ヲ防止スヘキ注意義務アルニモ拘ラス被告人ハ之ヲ怠リ漫然右縦カ轉落スルコト無カルヘシト思推シ同人等ヲ立去ラシメスシテ根切りシタル爲メ右樹木ハ根切ト共ニ急ニ下方ニ轉々シ大西ユキニ衝突シ同人ノ頭部ニ挫傷ヲ蒙ラシメ因テ翌七日午前七時頃鳥取市所在同市立病院ニテ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照ラスニ被告人ノ判示行爲ハ刑法第二百十條ニ該當スルトコロ犯罪ノ情狀憫諒ス可キモノアルヲ以テ刑法第六十六條第六十八條第七十一條ニ則リ該所定罰金額ヲ減輕シ被告人ニ對シ主文ノ刑ヲ量定處斷スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和〇〇年〇月〇日

〇〇區裁判所

一八六 業務上過失傷害

判決

本籍 愛知縣碧海郡知立町大字知立字東新地三番地
住居 同縣同郡同町平田町七十三番地
操車係(元電車運轉手)

清水一雄

明治四十二年九月二日生

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害被告事件ニ付昭和十五年十月二十五日名古屋區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ檢事ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

一八六 業務上過失傷害

被告人ヲ罰金五百圓ニ處ス

六五二

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓五十錢ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

理由

被告人ハ名古屋鐵道株式會社ニ雇ハレ同會社築港線ノ電車運轉ノ業務ニ從事シ居リタルモノナルトコロ昭和十五年三月十六日午後四時五十二分同會社築港線東名古屋港東口驛出發ノ乗客滿載ノ神宮前驛行三輛連結列車ヲ運轉シ同線大江驛ニ向ヒ時速約四十軒ニテ進行シ東名古屋港東口驛ト大江驛トノ中間ニ設置シアル自動閉塞信號機ノ直前約八十米ノ個所ニ差蒐リタルカスル場合電車運轉ノ業務ニ從事スル者ハ該信號機ノ現示信號ヲ注視シ之ヲ明認シタル上之ニ應シテ同會社所定ノ運轉取扱心得ノ規定ニ基キ適宜ノ措置ヲ執ルト共ニ當時中井駿次ノ運轉セル列車カ被告人ノ運轉スル列車ヨリ僅カ二分前ニ東名古屋港東口驛ヲ發車シ居リタルモノナルヲ以テ該先行列車ノ進行ニ絶ヘス留意シ減速其ノ他臨機ノ處置ニヨリ之ト追突スルカ如キ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意業務アルニ拘ラス被告人ハ之ヲ懈怠シ漫然右個所ニ於テ該信號ヲ一瞥シタルニ過キサリシ爲當時停車信號タル赤色燈カ不點ニシテ結局信號燈ハ全然點セラレ居ラサリシヲ識別シ得ス其ノレンズカ西陽ノ反射ヲ受ケ居リタルニヨリ輒ク之ヲ橙黃色ノ注意信號ナリト誤認シ其ノ儘該信號機ニ近接スルモ再度之ヲ確認スルノ舉ニ出テサリシノミナラス右信號機通過直後前方線路大江驛手前曲折部ノ中央附近ニ乗客ヲ滿載セル前記前行列車カ待避停車中ナルヲ認メタルモ之ヲ反對線路上ニ在ル廻送列車ト誤想シテ依然前記速力ニテ前進シ右停止列車ノ後方約五十米ノ個所ニ接近スルニ及ヒ初メテ同一線路上ノ前行列車ナルコトヲ覺知シ驚愕シテ直ニ急停車ノ措置ヲ執リタルモ時既ニ遅ク被告人ノ運轉スル列車ヲ右停止中ノ前行列車ノ

後部ニ激突セシメテ兩列車ノ乗客ヲ顛倒セシメ因テ乗客長村勇治ニ對シ治療約六週間ヲ要スル右膝關節挫傷等ノ傷害ヲ與ヘタル外庄村仁一等二十九名ニ對シ夫々二日乃至六週間ヲ要スル重輕傷ヲ與ヘタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情最モ重キ長村勇治ニ傷害ヲ與ヘタル罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ所定金額範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金五百圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニヨリ金二圓五十錢ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年一月二十一日

名古屋地方裁判所

一八七 業務上過失傷害

判決

本籍並住居

吳市阿賀町千八百四十七番地

無職

永

尾

一

郎

大正九年一月二十日生

一八七 業務上過失傷害

六五三

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

六五四

主 文

被告人ヲ禁錮三月ニ處ス

理 由

被告人ハ昭和十五年三月三十日ヨリ同年七月中旬頃迄藝南電氣軌道株式會社ノ電車運轉手トシテ電車運轉ノ業務ニ從事シ居タル者ナルトコロ同年六月二十三日午後四時頃第二十二號長濱行電車ヲ運轉シ吳市本通三丁目四ツ道路停留所ヲ發シ同日午後四時十八分頃吳越停留所ヨリ中畑停留所ニ至ル第二カーブ(吳市阿賀町新畑三十一番戶龜迫榮一方前)ニ差蒐リタルカ同所ハ二十五分ノ一ノ下リ勾配ナレハ時速十五軒以上ノ速力ヲ以テ進行セハ脱線轉覆スヘキ危險アルヘキヲ以テ斯カル場合運轉手タル者ハ當然速力ヲ右以下ニ遞減シテ通過シ以テ脱線等ノ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ハラズ偶々乗客中ノ一航空兵ヨリ午後四時三十分迄ニ廣航空隊前ニ到着シ度意嚮アルヲ耳ニスルヤ之ニ間合ハセンカ爲(同停留場到着ノ豫定時刻ハ午後四時三十二分ナリ)輕卒ニモ時速約二十三、四軒ノ高速度ニテ前示カーヴヲ疾走シタル爲車體ノ動搖ニ因リ該カーヴニ於テ電車ヲシテ脱線轉覆セシメ因テ乗客ノ内原田喜一(當四十二年)ノ右上膊骨頭部骨折等治療三十五日間ヲ要スル傷害ヲ加ヘタル外乗客二十七名ニ對シ治療二日乃至十五日間ヲ要スル擦過傷又ハ挫創若クハ腓腸筋血腫ノ傷害ヲ加ヘタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合

ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情最モ重シト認ムル原田喜一ニ對スル罪ニ付定メタル刑ニ從ヒ禁錮刑ヲ選擇シタル上其ノ所定期限範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮三月ニ處スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年九月二十一日

吳 區 裁 判 所

一八八 業務上過失傷害

判 決

本籍並ニ住居 茨城縣東茨城郡小松村大字増井千三百十五番地

農 松崎政事 松 崎 正

大正四年十一月十日生

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害被告事件ニ付昭和十五年二月三日〇〇區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ禁錮貳月ニ處ス

一八八 業務上過失傷害

六五五

被告人ハ茨城鐵道株式會社ニ豫備助役トシテ雇ハレ同會社飯富驛ニ於ケル列車發着ノ指揮其ノ他驛長ノ業務ニ屬スル一切ノ驛務ヲ代理取扱ヒ居リタルモノナルトコロ同會社ノ經營ニ係ル鐵道線路ハ單線ニシテ同會社ヨリ配布セラレタル列車運行圖表(通稱ダイヤ)(昭和十五年地押第一四號ノ一)竝ニ列車發著時刻表(同押ノ二)ニ依レハ昭和十四年十一月十五日午前八時五十分同驛ニ到着シタル上リ第五十四號ガソリンカーハ同驛ニ於テ下リ第三號貨物列車ト交換スルコト、ナリ居リタルヲ以テ右貨物列車ノ到着ヲ待チ同列車ノ機關手ヨリ上水戸飯富驛間ノタブレットヲ受取り之ヲ右ガソリンカーノ運轉手ニ交付シ以テ一應進路ノ完全ヲ確認シタル上該ガソリンカーヲ發車セシムヘキ業務上ノ注意義務アルモノナルニ拘ラス輕卒ニモ右列車運轉圖表等ヲ見誤リ前記ガソリンカート貨物列車トハ上水戸驛ニ於テ交換スルモノト速斷シ且右ガソリンカーノ飯富驛ヨリ上水戸驛ニ至ルタブレットモナキニ拘ラス既ニ之ヲ運轉手厚綿一郎ニ交付シタルモノト誤信シ前記貨物列車ノ到着前漫然發車信號ヲ爲シ以テ同日午前八時五十三分頃該ガソリンカーヲ飯富驛ヨリ發車進行セシメタル爲忽チ同日午前八時五十五分頃東茨城郡渡里村大字田野地内ノ見透不十分ナル單線カーブニ於テ恰モ上水戸驛ヲ發シ飯富驛ニ向ヒ驀進シ來レル前記下リ第三號貨物列車ト正面衝突スルニ到ラシメ因テ右ガソリンカー乗客宗時小波ニ對シ全治四週間ヲ要スル右肋骨々折ヲ負ハシメタル外二十餘名ノ乗客ニ對シ重キハ全治四週間輕キモ全治四日間ヲ要スル肋骨々折其ノ他ノ傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ル、場合ナル

ヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情重キ宗時小波ニ對スル業務上過失傷害罪ノ刑ニ從ヒ處斷スヘク所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ被告人ヲ禁錮二月ニ處スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年三月七日

〇〇地方裁判所刑事部

一八九 業務上過失致死、同傷害

判決

本籍並住居

名古屋市中村區米野町西田面三十七番地

名古屋鐵道局技手機關士

山

下

良

三

明治二十九年一月二十五日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死同傷害被告事件ニ付名古屋區裁判所カ昭和十四年十月九日言渡シタル有罪判決ニ對シ原審檢事及被告人ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與更ニ審理判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ罰金千圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金五圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

一八九 業務上過失致死、同傷害

六五七

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理由

六五八

被告人ハ稻澤機關區勤務ノ名古屋鐵道局技手機關士トシテ稻澤線其ノ他ノ貨物列車ノ運轉ニ從事シ居リタルモノナルトコロ昭和十三年四月二十九日午前十時四十九分白鳥驛發稻澤行貨物第五六三列車ヲ機關助士板本與三吉ト同乘運轉シ午前十一時二分頃名古屋驛構内ヲ通過後先行ノ午前十一時零分同驛發東海道線下り臨時軍用第八〇〇九列車ヲ右ニシテ間ニ稻澤線上リ線路ヲ挟ミ最左側同線下り線路ヲ該列車ヨリ少シク後レテ並進シ名古屋市西區東枇杷島地内ナル枇杷島鐵道方面ニ向フ途中榮生架道橋中村架道橋及惣兵衛川橋梁等ニ於テ稻澤線下り線路左傍ニ前記軍用列車搭乘ノ軍人見送ノ人群數名宛ヲ認メタルヨリ行手ノ枇杷島鐵橋ノ名古屋驛寄橋端(以下鐵橋南端ト稱呼シ之ヨリ線路ニ沿ヒ名古屋驛寄ヲ南方トシテ記載ス)附近ニモ同軍用列車ノ見送人アルヘキコトヲ豫測セシカ同所線路ハ直高三十尺ノ築堤上該鐵橋南方百十四尺五寸邊ヨリ更ニ南方千六十七尺四寸ノ地點ニ互リ半徑八百米ノ右彎曲線ヲ爲セルト第五六三列車ノ機關車ノ機關士席ハ室内左側ニ在ル爲室内右側ナル機關助士席ヨリスレハ約五百尺手前ニ於テ鐵橋南端ヨリ南方九十三尺五寸ノ線路左傍ニ存スル勾配標ニ至ル線路及其ノ近傍ノ模様ヲ仔細ニ展望シ得ルニ反シ被告人ノ自席ヨリスルトキハ二百六十尺程ニ接近スルニ非サレハ之ヲ見透スコト能ハス而モ同列車ハ空車二十七輛杉板積載車一輛(換算十七、四車輛)ヲ牽引シ時速ハ當時三十五軒ニシテ漫然該見透地點ニ臨ミ非常制動措置ヲ執ルモ隋力ニ因リ四百尺位前進シ鐵橋上ニ到達セサルヲ得サル狀況ニ在リ他面現場見送人ハ軍用列車ノ歡送ニ熱狂ノ餘貨物列車ノ進行ニ氣付カス其ノ進路内ニ立入ルコトナキヲ保シ難キカ故ニ斯ル場合機關士タル者ハ單ニ警笛ヲ鳴ラスヲ以テ足レリトセス列車ノ

速力ヲ相當ニ減殺調節シテ運轉シ適宜機關助士ニ命シテ前方見送人ノ所在動靜ヲ注視セシメ危險アラハ之ヲ報告セシメ緩急ニ應ジ急停車ノ措置ヲ講シ其ノ手前ニ於テ停車シ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラズ被告人ハ唯警笛ヲ吹鳴シタルノミニテ時速三十五軒ノ速力ノ儘機關助士ニ命シ前方見送人ノ所在動靜ヲ注視セシメ之ヲ報告セシムル手段ヲ執ラス午前十一時五分頃カーブニ差蒐リタル爲笹野久光(當時二十三年)外多數ノ者カ軍用列車ニテ征途ニ上レル近親郷黨出身軍人等ノ見送ニ熱狂シ前記勾配標附近ヨリ鐵橋南端邊ニ掛ケ稻澤線下り線路内ニ進出セルヲ近距離ニ差迫リテ目撃シ急遽非常制動ノ措置ヲ執リタルモ列車ハ隋力ニ因リ停止スルニ至ラス鐵橋上迄進行シテ停車シ遂ニ右見送人等ヲ車體ニ接觸セシメ又ハ餘勢ニヨリ若ハ難ヲ避ケントシテ動亂セシメ因テ竹田定義(當時二十一年)外三名ヲ即死ニ致シ伊藤幸左衛門(當時四十四年)外五名ヲ重傷後死亡セシメ岩間勝正(當時十九年)外四十二名ニ對シ全治數日乃至約三ヶ月ヲ要スル各傷害ヲ被ラシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ

右事實中注意義務ノ點ヲ除ク其ノ餘ハ

- 一、原審第一回公判調書及被告人ノ檢事第一乃至第四回聽取書ヲ通シ築堤高度線路カーブノ區間勾配標ノ位置見透距離及制動距離ノ各尺數並牽引貨車換算車輛數ト死傷者ノ氏名人數傷害ノ程度トノ點ヲ措キ被告人ノ同旨ノ供述記載
- 一、檢事第一回檢證調書ニ於ケル判示築堤高度線路カーブ區間及勾配標ノ位置ノ各尺數ニ符合スル記載
- 一、原審第二回檢證調書中機關助士席ヨリノ展望距離ニ付判示ニ照應スル記載
- 一、原審第三回檢證調書ニ於ケル判示機關士席ヨリノ見透距離ニ符合スル記載

一八九 業務上過失致死、同傷害

六五九

一、名古屋運輸事務所提出ノ貨物第五六三列車組成順序表ニ於ケル同列車ノ牽引貨車ハ換算十七、四輛ナリトノ記載
 一、鑑定人山崎精一ノ鑑定調書中第五六三列車ト同一ノ組成速度ニ依レハ列車ハ枇杷島鐵橋兩端ヨリ南方二百二十九尺五寸ノ地
 點ニ於テ非常氣笛ヲ吹鳴セス直ニ非常制動措置ヲ執リタル時ハ三百九十八尺八寸四分ヲ進行シ同シク鐵橋兩端ヨリ南方四百七
 十五尺九寸ノ地點ニ於テスル時ハ三百九十三尺六寸五分ヲ進行シテ後停止スヘク計算セラレ實際ニ於テハ右停止距離ハ稍増大
 スヘキモノト認メラルル旨ノ記載

一、笹野久光ニ對スル檢事聽取書中同人ノ供述トシテ私ハ四月二十九日出征兵ヲ見送りニ西枇杷島鐵橋ノ東ヘ午前十時五十分頃
 行キタルカ現場テハ最前列枕木ノ間ノバラスノ上ニ出テ居リ其ノ場所ハ橋ノ東詰カラ三十尺位ノ處ナリ私ハ貨物列車カ來ル
 コトニハ全然氣付カス軍用列車ヲ熱狂シテ萬歳ヲ唱ヘ乍ラ默送シテ居ルト同列車カモウ行過キカケタ頃右ノ方カラ人カドツト
 押シテ來タ瞬間貨物列車ノ機關車カゴツト入ツテ來テ私ハ其ノ横側テ右肩ヲ打付ケラレ其ノ場ニ倒レタリトノ記載

一、杉浦由子ニ對スル檢事聽取書中同人ノ供述トシテ私ハ部落ノ人カ出征スルノヲ見送ル爲枇杷島鐵橋ノ處ヘ行キタリ私ハ線路
 ノ中ニハハイツテ居ラス一番後ニ居ツタカラ汽車テ跳ネラレタノテモナク又裸カレタノテモナク人カラ押倒サレタモノト思フ
 私ノ傷ハ頭ノ處カ一ツト肩ノ處ノ骨ヲ打ツテ居リ尙右ノ腕ニモ打身ノ傷ヲ一箇所受ケテ居ル旨ノ記載

一、戸田光太郎ニ對スル檢事聽取書中同人ノ供述トシテ私ハ出征ノ友人見送ノ爲枇杷島鐵橋附近ニ行キ東詰ノ地點ヨリ三十尺南
 附近ニ立チ軍用列車ヲ待チ居タリ私カ行キタル時ニハ既ニ大勢ノ人カ私ノ南方ニモ鐵橋ノ方ニモ其ノ線路附近ニ澤山上リ見送
 ヲ待チタリ私ハ最初枕木ノ在ル處ヨリ一段下レル所ニ立チ約五分許待チ居タルニ軍用列車カ來リ皆萬歳萬歳ト云ヒ送り居タリ
 私ハ帽子ヲ脱キ之ヲ振り友人ヲ捜シタルトコロ二輛目ノ客車ニ居ルヲ發見シ之ニ萬歳ヲ云ヒ其ノ客車ヲ見乍ラ方向ヲ六十度位
 變ヘタ様ニ思フ之ヨリ先軍用列車カ前ヲ通り始ムルヤ後カラドン／＼押シ上ケ來リ私ハ枕木ノ上迄押シ上ケラレ仕舞ヒタルカ

線路ノ内ニ這入ラス夫レテコタヘテ萬歳ヲ云ヒ居タル様ニ思フ六十度位北方ニ向ヲ變ヘタ頃突然ドカント何か當ツタ様ナ氣カ
 シタルカ其ノ健氣ヲ失ヒテ仕舞ヒフト氣カ付イタ時ハ汽車ノ下敷ニ爲リ線路ノ中ニ居タルカ又其ノ健氣ヲ失ヒタリ能ク考ヘテ
 見ルニドカント突キ當ツタ様ナ氣カシタ時ニハ南方カラ人カ押シテ來タ如キ氣持モス尙私カ居タ方ノ線路カラ汽車ノ來ル事
 ハ知ラス又汽車ノ汽笛モ聞キ居ラス軍用列車ヲ見タルハ私ノ居タ處ヨリ線路カ曲リ居ル處ヲ汽車カ出テ來タリタル時ヨリ之ニ
 目ヲ付ケ居タル故外ノ列車ニハ氣付カサリキ私ノ傷ハ頭三ヶ所顔一ヶ所兩足切斷ノ傷ヲ受ケ居ル旨ノ記載

一、昭和十三年四月二十九日附醫師岩田勝次郎作成ノ竹田定義、杉浦さだ子、伊藤圓一、加藤幸光ニ對スル各死體檢案書中同人
 等カ同日午前十一時五分頃顛頂部打撲ニ因ル腦震盪又ハ前額部挫滅骨折等ノ爲死亡セル旨ノ記載

一、伊藤幸左衛門ニ對スル昭和十三年四月三十日附醫師佐久間英一作成死亡診斷書山中すみゑ(すみ江トアルハ誤記ト認ム)ニ對
 スル同月二十九日附醫師岩田勝次郎作成死亡診斷書中同人等カ同月二十九日第四腰挫骨骨折骨盤骨折又ハ左上膊切斷下顎裂創心
 臟部打撲ノ重傷ヲ受ケタル後死亡セル旨ノ記載

一、寺尾敏夫ニ對スル昭和十三年四月二十九日附醫師作成死亡診斷書中同人カ同日右上膊右下腿切斷傷ヲ受ケタル後死亡
 セル旨ノ記載

一、山田泉、熊澤治三郎ニ對スル昭和十三年十一月二十九日附醫師黒川榮作成各診斷書中同人等ニ頭蓋骨々折前額部創等又ハ
 第四頸椎脫臼其ノ他ノ創傷アリ豫後不良ナル旨ノ記載

第四頸椎脫臼其ノ他ノ創傷アリ豫後不良ナル旨ノ記載

一、石川さち子ニ對スル同年五月十日附醫師市川方三作成死亡診斷書中同人カ同日外傷後破傷風ニ因リ死亡セル旨ノ記載
 一、澤田幸一、青木次郎(治郎トアルハ誤記ト認ム)伊藤忠三、山田義光、澤田仙市、竹田廣治、一柳品十郎、豊田豊光、赤林清
 治郎、恒川常明、伊藤清一、竹田富三郎、古橋かぎ、竹田初代、杉浦ちゑ、三輪伊織、竹田登、戸田光太郎、橋本健次郎、山
 一八九 業務上過失致死、同傷害

田政春ニ對スル同月二十九日附黒川醫師作成各診斷書、

六六一

トアルハ誤記ト認ム)都築富三、大橋彌十郎、水谷米治ニ對スル同年四月二十九日附岩間醫師作成各診斷書、近藤しづゑ(しつゑトアルハ誤記ト認ム)ニ對スル同月三十日附同醫師作成診斷書早瀬正勝、日比野正次ニ對スル同月二十九日附醫師富田忠太郎作成各診斷書山田義光、澤田幸一、竹田富三郎、竹田宮一(宮市トアルハ誤記ト認ム)ニ對スル同日附醫師川口まさを作成各診斷書岩間一義ニ對スル同月三十日附同醫師作成診斷書、桑原耕一、岩間正勝ニ對スル同日附醫師小菅眞一作成各診斷書山田藤俊ニ對スル同年五月二日附醫師近藤政光作成診斷書宮崎弘、前田茂一ニ對スル同年四月二十九日附醫師市川方三作成各診斷書、山本源太郎、大橋彌十郎ニ對スル同年五月十二日附同醫師作成各診斷書、岩間梅次郎ニ對スル同月二日附醫師堀田安重作成診斷書、澤田丈太郎ニ對スル同月十一日附同醫師作成診斷書、竹田孝三ニ對スル同月十三日附醫師伊東秀之作成診斷書濱島安次郎ニ對スル同年四月二十九日附醫師淺井泰作成診斷書、宮田ゑい子、同いそ子天野しな(まなトアルハ誤記ト認ム)ニ對スル同年五月十二日附醫師山田治郎左衛門作成各診斷書、宮田好子ニ對スル同月一日附醫師渡邊正次作成診斷書、笹野久光ニ對スル同月十二日附齒科醫伊藤越十郎作成診斷書、竹田豐三(武田トアルハ誤記ト認ム)ニ對スル同月三日附齒科醫建部孝一作成診斷書ニ於ケル各本人カ重キ者ハ全治約三ヶ月ヲ要スル大腿骨折等ヨリ輕キ者ハ全治數日ヲ要スル頭部擦過傷等ヲ負ヘル旨ノ記載

一、竹田定次郎作成上申書中竹田定義カ判示事故ニ遭ヒ即死セル顛末記載、松浦時政ニ對スル司法警察官訊問調書中同人ノ供述トシテ松浦さだ子カ判示事故ニ因リ即死セル顛末記載

一、伊藤濱治郎(伊藤圓一)加藤かず子(加藤幸光)作成各上申書中夫々括弧内表示ノ者カ判示事故ニ因リ即死セル顛末記載

一、伊藤幸太郎(伊藤幸左エ門)熊澤道(熊澤治三郎)山田重吉(山田泉)山中米秋(山中すみゑ)寺尾幸七(寺尾敏夫)作成各上申書中

夫々括弧内表示ノ者カ判示事故ニ因リ受傷後死亡セル顛末記載

一、西川さち子ニ對スル檢察廳取書中同人ノ供述トシテ判示事故ニ因リ傷害ヲ蒙レル顛末記載

一、岩間梅次郎、早瀬正勝、青木治郎、山田義光、山田重三郎、赤林清治郎、杉浦ちゑ、古橋かぎ、伊藤清一、竹田初代、三輪伊藏、恒川常明、都築富三、戸田五一、宮田好子、宮崎弘、前田茂一、山田藤俊、桑原耕一、岩間正勝ニ對スル各檢察廳取書

中同人等ノ供述トシテ夫々判示事故ニ遭ヒ受傷セル顛末記載、濱島安次郎、大橋彌十郎、伊藤孫七、山本源太郎、澤田丈太郎、

澤田幸一、竹田孝二、伊藤忠三、澤田仙市、山田藤一、一柳品十郎、岩間一義、豊田豊光、橋本健次郎、竹田富三郎、近藤ま

づゑ、日比野正次、竹田宮一作成各上申書中同人等カ夫々判示事故ニ因リ受傷シタル顛末記載、山田政春、水谷米吉、竹田豐

三ニ對スル各司法警察官訊問調書中同人等ノ供述トシテ夫々判示事故ニ因リ受傷セル顛末記載、竹田初代(竹田登)天野しな、

(宮田ゑい子同いそ子)作成各上申書中同人等カ夫々括弧内表示ノ者ト共ニ判示事故ニ遭ヒ受傷セル顛末記載

ニ依リ之ヲ認ム

而シテ列車機關士ハ災害豫防ニ付周到萬全ノ注意ヲ拂ハサルヘカラサルヲ以テ判示ノ場合單ニ警笛ヲ吹鳴スルニ止マラス列車ノ速力ヲ相當ニ減殺調節シテ運轉シ適宜機關助士ニ命シ前方見送人ノ所在動靜ヲ注視セシメ危險アラハ之ヲ報告セシメ緩急ニ應シ急停車ノ措置ヲ講シ其ノ手前ニ於テ停車シ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキハ業務ノ性質上當然ノ義務ナリト謂フヘク其ノ途ニ出テスシテ判示事故ヲ惹起セシメタル被告人ハ過失ノ責ヲ免レサルモノト斷セサルヘカラス

法律ニ照スニ被告人ノ所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以

テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ最モ重シト認ムル竹田定義ニ對スル罪ノ刑ニ從セ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ其ノ金額ノ範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金千圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ依リ金五圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ヲ適用シ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十一月二十一日

名古屋地方裁判所

一九〇 業務上過失致死傷、業務上過失列車顛覆破壞

判決

本籍並住居

三重縣一志郡川口村大字杉ヶ瀬二千七百九十七番地

農業

江川 伊三郎

當三十年

右ノ者ニ對スル業務上過失致死傷並業務上過失列車顛覆破壞被告事件ニ付昭和十四年十二月二十三日安濃津區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決ヲ爲スコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ禁錮四月ニ處ス

但シ原審ニ於ケル未決勾留日數中參拾日ヲ右本刑ニ算入ス

理 由

被告人ハ昭和十四年八月末中勢鐵道株式會社ノ乗務機關手トナリ爾來同會社經營ノ中勢鐵道岩田橋驛久居驛間及久居驛伊勢川口驛間ニ於ケル汽車運轉ノ業務ニ從事シ其業務區間ニ於ケル線路ノ狀態並ニ汽車運轉ニ關スル諸規定殊ニ線路ノ曲線ニ因ル制限速度ヲ熟知シ從テ常ニ線路ノ實狀ニ適應スル運轉ヲ爲シ以テ汽車運轉上ノ事故發生ヲ未然ニ防止シ安全ニ目的地ニ達セシムヘキ職責ヲ有スルモノナルトコト同年十一月一日久居驛ニ於テ上リ岩田橋驛行第十列車定員五十人乘大型半鋼製ボギー式ガソリンカーニ機關手トシテ乗務シ乘客九十餘名ヲ滿載シ午前七時二十八分頃久居驛ヲ發車シタルカ同驛發車定時刻カ午前七時二十二分ニシテ約六分ノ遲發ナリシヨリ遲延時間ノ回復ニ努メ速力ヲ増大シテ時速三十四、五軒ノ高速度ニテ疾走ヲ續ケ相川驛ヲ通過シ二重池驛ニ向フ途中津市大字垂水地内通稱Sカーブニ差蒐ルヤ右カーブノ曲線度急ニシテ常ニ制限速度時速十五軒以内ニテ運行スヘキモノナルコトヲ知悉セルニ拘ラス遲延時間ノ回復ニノミ心ヲ奪ハレ僅カニ速度ヲ緩メタル時速二十七、八軒ノ高速度ニテ漫然驀進ヲ續ケタル爲メ午前七時三十五分頃右Sカーブニ於テ該曲線ニ適セサル過速度運轉ニ因リ該ガソリンカーヲ顛覆セシメ冷却機其他ヲ破壞シタル上乘客ナル三重縣立津高等女學校生徒前川しづ(當時十五年)及棚橋美代子(當時十四年)ヲ各死ニ致シ同校生徒奧田たけ子(當時十六年)ニ左腕關節及肘關節捻挫ニ因ル治療二週間ヲ要スル負傷セシメタル外同校生徒並ニ津市立高等

一九〇 業務上過失致死傷、業務上過失列車顛覆破壞

女學校生徒一般乗客等八十數名ニ夫々重輕傷ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ所爲中業務上過失致死傷ノ點ハ刑法第二百一十一條ニ該當シ過失ニ因ル汽車顛覆破壞ノ點ハ同法第二百二十九條第二項ニ該當スルトコロ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ル、場合ナルニヨリ同法第五十四條第一項前段第十條ニヨリ犯情重キ業務上過失致死傷罪ノ刑ニ從ヒ禁錮刑ヲ選擇シ其ノ所定期限範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮四月ニ處シ原審ニ於ケル未決勾留日數中參拾日ハ刑法第二十一條ニヨリ右本刑ニ算入スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年五月十一日

安濃津地方裁判所刑事部

一九一 業務上過失汽車顛覆破壞、致死傷

判決

本籍 佐賀縣藤津郡鹽田町大字馬場下甲四千二百五十二番地

住居 神戸市林田區菅原通三丁目四番地

安治川口驛信號掛

生方朝次

明治二十八年一月一日生

本籍 鹿兒島縣日置郡串木野町荒川二千三百三十八番地

住居 尼崎市潮江西ノ口一番地

安治川口驛信號掛

養手森吉

明治三十八年十二月二十一日生

右ノ者等ニ對スル各業務上過失汽車顛覆破壞致死傷被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人兩名ヲ各禁錮二年ニ處ス

未決勾留日數中夫々百八十日ヲ右各本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ全部被告人兩名ノ負擔トス

理由

被告人兩名ハ孰レモ鐵道省西成線安治川口驛信號掛ニシテ同驛構内東部信號扱所ニ勤務シ被告人生方朝次ハ閉塞扱信號掛トシテ閉塞器及下り場内上り出發信號機ノ取扱等ノ業務ヲ擔任シ被告人養手森吉ハ見張信號掛トシテ轉轍器ノ轉換等ノ取扱ヲ挺子扱信號掛ニ指示シ挺子扱信號掛支障アルトキハ自ラ轉轍器ノ取扱ヲ爲ス等ノ業務ヲ擔任シ居ル者ナルトコロ同驛下り本線所屬ノ場内信號機ト下り本線ニ設ケラレタル九號十號十一號ノ各轉轍器トハ聯動裝置ヲ施サレアリテ該信號機カ反位(進行信號現示)ニアルトキハ列車ヲ下り本線ニ進入セシムヘク定位ニ開キアル右轉轍器ハ悉ク

一九一 業務上過失汽車顛覆破壞、致死傷

鎖錠セラレ之ヲ反位ニ轉換セシムルコトヲ得ス之ニ反シ該信號機ヲ定位(停止信號現示)ニ復スルトキハ右轉轆器ハ悉ク其ノ鎖錠ヲ解鎖セラレ下リ本線ヨリ側線ニ進入セシムヘク反位ニ轉換シ得ヘキヲ以テ閉塞扱信號掛タル者ハ同驛下リ本線ニ到着スヘキ列車ニ對シテハ該列車カ右各轉轆器ヲ完全ニ通過シ終リタル後ニ非サレハ前示場内信號機ヲ定位ニ復スヘキモノニ非ス若シ此ノ處置ヲ誤ルトキハ往々ニシテ見張信號掛ヲシテ既ニ該列車カ各轉轆器ヲ通過セルモノト速斷シ未タ轉轆器上ニ跨リ居ルニ拘ラス該轉轆器ヲ反位ニ轉換セシムル過誤ヲ誘引シ其ノ結果該列車ノ一部ハ目的線ニ他ノ一部ハ側線ニ進入シ相互ニ引張合状態ト爲リテ脱線顛覆等ノ事故ヲ惹起スルノ危險アルヲ以テ同列車カ關係轉轆器ノ最終ナル十一號(イ)轉轆器ヲ通過シ終リタルコトヲ確認シタル後前記場内信號機ヲ定位ニ復シ以テ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アリ又見張信號掛タル者ハ下リ本線ニ到着スヘキ列車ノ續行列車アリテ之ヲ下リ本線ノ側線タル一番線ニ進入セシメントスルニ當リテハ縱令前示下リ場内信號機カ定位ニ復シアル場合ト雖モ須ク下リ本線ニ到着スヘキ列車カ關係轉轆器ヲ完全ニ通過シ終リタル後十一號(イ)轉轆器ヲ反位ニ轉換スルニ非サレハ前記ノ如キ事故ヲ惹起スルノ危險アルヲ以テ同列車カ完全ニ十一號(イ)轉轆器ヲ通過シ關係線路ニ支障ナキコトヲ確認シタル上該轉轆器ヲ自ラ又ハ挺子扱信號掛ヲシテ反位ニ轉換セシメ以テ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人生方朝次ハ昭和十五年一月二十九日午前六時五十二分三十秒安治川口驛下リ本線ニ到着スヘキ四輪ホギー三等ガソリン動車三輛連結ヲ以テ編成セル第一六一一旅客列車カ乗客ヲ滿載シテ隣驛タル西九條驛ヲ三分三十秒延發シ同六時五十五分頃安治川口驛下リ本線所屬ノ場内信號機ヲ通過シ十一號(イ)轉轆器ノ手前ニ在ル十號(イ)轉轆器ニ差蒐リタル際前示閉塞扱信號掛トシテノ業務上ノ注意義務ヲ怠リ西九條驛信號掛ニ對シ續行第六〇〇

一臨時旅客列車ニ對スル閉塞線路開通ノ電鈴信號ヲ爲スコトヲ焦リ列車カ該轉轆器ヲ通過シ終ルヲ俟タスシテ直ニ右場内信號機ヲ定位ニ復歸シ而モ被告人妻手森吉モ亦前示見張信號掛トシテノ業務上ノ注意義務ヲ懈怠シ被告人生方朝次ニ於テ右ノ如ク下リ本線場内信號機ヲ定位ニ復歸スルヲ見ルヤ前記續行臨時旅客列車ノ入驛準備ヲ焦慮スルノ餘第一六一一旅客列車カ各轉轆器ヲ通過シ終リ關係線路ニ支障ナキコトヲ確認セス該列車カ右十一號(イ)轉轆器ヲ跨リ進行中ナルニ拘ラス既ニ該轉轆器ヲ通過シ終リタルモノト即斷シ直ニ同轉轆器ヲ反位ニ轉換シタル爲同列車後部第四二〇五六號車輛ノ前輪二軸ハ下リ本線ニ向ヒ後輪二軸ハ右一番線ニ向ヒ進入シ相互ニ引張合ヒト爲リテ脱線顛覆セシムルト共ニ切損セル推進軸四ツ手受トノ衝突ニ依リ同車輛ノガソリンタンクヲ破裂セシメ以テ蓄電池回線ノ切斷短絡ニ基キ發生シタル電氣火花ニヨリ引火シタルガソリンニ因リ忽チニシテ同車輛ヲ全燒破壊セシメ因テ乗客木村一男外百七十三名ヲシテ火傷等ニ因リ即死セシメ同小田中政人外十六名ヲシテ受火傷後大阪市此花區春日出町下二丁目一番地外科末岡病院等ニ於テ該火傷ニ基因シテ死亡スルニ至ラシメ同酒井榮作外五十六名ニ治療日數二日乃至約十ヶ月ヲ要スル火傷等ノ重傷ヲ負ハシメタルモノナリ

證據ヲ披スルニ判示事實中被告人兩名カ判示安治川口驛信號掛ニシテ同驛構内東部信號扱所ニ勤務シ被告人生方朝次ハ閉塞扱信號掛トシテ判示業務ヲ擔任シ居レルコト安治川口驛下リ本線所屬場内信號機ト下リ本線ニ設ケラレタル判示各轉轆器トカ判示ノ如キ聯動裝置ヲ施サレアルコトハ被告人兩名ノ當公廷ニ於ケル夫々其ノ旨ノ供述ニ依リ之ヲ認メ被告人妻手森吉カ判示東部信號扱所ノ見張信號掛トシテ判示業務ヲ擔任セルコトハ

一、被告人妻手森吉ノ當公廷ニ於ケル私ハ安治川口驛東部信號扱所ノ見張信號掛ニシテ同驛運轉内規ニハ見張信號掛ハ操車掛又

ハ轉轍手相互間ニ作業打合ヲ爲シ轉轍器ノ轉換及上リ貨物出發並入換信號機ノ取扱ヲ挺子扱信號機ニ指示スルモノト定メラレ
之ニ基キ仕事ヲ爲シ居タルカ挺子扱ニ支障アル場合カ見張カ挺子扱ニ代リ自ラ挺子ヲ取扱フコトモアリタル旨ノ供述

一、被告人養手森吉ニ對スル豫審第三回訊問調書中東部信號扱所テノ見張信號機ハ挺子ヲ取扱ハヌコト、ナリ居リ松本運轉掛主
任カラモ常ニ左様ナ指示ヲ受ケ居タルカ挺子扱信號機ニ支障アリ其ノ現場ニ居ラヌ時閉塞扱信號機ハ勿論見張信號機モ偶ニハ
挺子扱信號機ニ代リ挺子ノ取扱ヲ爲シ居タリ左様ナ事ハ極ク稀ナルカ一日二、二回ハアル旨ノ供述記載

ヲ綜合シテ之ヲ認メ閉塞扱信號機ニ於テ判示下リ本線ニ到着スヘキ列車カ判示各轉轍器ヲ完全ニ通過シ終リタル後判示場内信號
機ヲ定位ニ復スルニ非サレハ往々ニシテ判示ノ如キ見張信號機ノ過誤ヲ誘引シ其ノ結果判示事故ヲ惹起スルノ危険アルコトハ

一、被告人生方朝次ニ對スル豫審第三回訊問調書中安治川口驛下リ本線ニ到着スル列車ニ對シテハ其ノ列車カ下リ一番ノ場内信
號機ヲ通過セシノミナラス判示各轉轍器ヲ通過シ終リタル後ニ非サレハ下リ場内信號機ヲ定位ニ復スルコトヲ得ス運轉取扱心
得ニモ其ノ旨明カニ規定セラレアリ從テ若シ下リ本線ニ到着スル列車カ關係轉轍器ヲ通過シ終ラヌ前ニ右場内信號機ヲ定位ニ
復歸スレハ九番十番十一番ノ各挺子ヲ自由ニ引キ反位ニ爲スコトカ出來ル故未タ列車カ關係轉轍器ヲ通過スル以前若ハ通過ノ
途中其ノ關係轉轍器カ反位ニ轉換セラレ事故ヲ惹起スル譯ナル旨ノ供述記載

一、被告人生方朝次ノ當公廷ニ於ケル列車カ判示十一號(イ)轉轍器ヲ通過シ終レハ判示場内信號機ヲ定位ニ復歸スルモ危険ハナ
キモ私ハ列車カ右轉轍器通過前ニ於テ右信號機ヲ定位ニ復シタル爲養手カ十一號(イ)轉轍器ヲ通過シタルモノト過マリ考ヘタ
ル結果該轉轍器ヲ反位ニセシトコロ其ノ時同轉轍器ヲ完全ニ通過シ居ラサリシ後部車輛カ下リ本線ト一番線トノ渡リ線ニ跨リ
テ引張合トナリ脱線顛覆シタル旨ノ供述

ヲ綜合シテ之ヲ認メ見張信號機ニ於テ判示下リ本線ニ到着スヘキ列車ノ續行列車アリテ之ヲ判示一番線ニ進入セシメントスルニ

當リテハ縱令判示信號機カ定位ニ復シアル場合ト雖モ下リ本線ニ到着スヘキ列車カ關係轉轍器ヲ完全ニ通過シ終リタル後判示十

一號(イ)轉轍器ヲ反位ニ轉換スルニ非サレハ判示ノ如キ事故ヲ惹起スルノ危険アルコトハ被告人養手森吉ノ當公廷ニ於ケル其ノ
旨ノ供述ニ依リ之ヲ認メ被告人生方朝次カ判示日時安治川口驛下リ本線ニ到着スヘキ判示第一六一旅客列車カ判示西九條驛ヲ

三分三十秒延發シ判示時刻頃安治川口驛下リ本線所屬場内信號機ヲ通過シ十一號(イ)轉轍器ニ差蒐リタル際判示業務上ノ注意義
務ヲ怠リ西九條驛信號機ニ對シ判示電鈴信號ヲ爲スコトヲ焦リ列車カ判示轉轍器ヲ通過スルヲ俟タスシテ直ニ判示場内信號機ヲ
定位ニ復歸シ而モ被告人養手森吉モ亦判示業務上ノ注意義務ヲ怠リ被告人生方朝次カ右ノ如ク場内信號機ヲ定位ニ復歸スルヲ見
ルヤ判示續行列車ノ入驛準備ヲ焦慮スルノ餘判示列車カ判示轉轍器ヲ通過シ終リ關係線路ニ支障ナキコトヲ確認セス該列車カ判
示轉轍器ヲ跨リ連行中ナルニ拘ラス既ニ之ヲ通過シ終リタルモノト速斷シ同轉轍器ヲ反位ニ轉換シタル爲判示列車ノ後部車輛ノ
前輪二軸ハ下リ本線ニ向ヒ後輪二軸ハ判示一番線ニ向ヒテ進入シ相互ニ引張合トナリテ脱線顛覆シ其ノ爲右車輛カ忽チ全燒破壞
シ乘客木村一男外判示多數ノ死傷者ヲ出シタルコトハ

一、被告人兩名ノ當公廷ニ於ケル夫々其ノ旨ノ供述

一、被告人生方朝次ニ對スル豫審第二、三回訊問調書ヲ通シ車輛ノ全燒破壞並死傷者ヲ出シタル點ヲ除ク其ノ旨ノ供述記載

一、被告人養手森吉ニ對スル豫審第三回訊問調書中前同様ノ點ヲ除ク其ノ旨ノ供述記載

一、鑑定人本山邦久同關田友吉作成ニ係ル各鑑定書中夫々判示ガソリン動車ノ脱線顛覆事故ノ原因ニ付右ニ照應スル記載

一、豫審判事ノ檢證調書中判示ガソリン動車ノ内部カ全燒破壞セルヲ認メタル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認メ判示ガソリンタンクカ判示原因ニテ破裂シタル點ハ

一、豫審判事ノ檢證調書中判示ガソリンタンクノ一角ハ恰モ相當硬質ノ物體ヲ以テ打撃シ或ハ夫ニ激突セシメタルカ如キ状態ニ

テ破損セルヲ認メタル旨ノ記載

六七二

一、鑑定人本山邦久作成ニ係ル鑑定書中判示ガソリントンタンクノ破損原因ニ付判示十一號(イ)轉軸器ノ途中轉換ニ依リ前位臺車ハ下リ本線ニ後位臺車ハ異線タル一番線ニ跨リノ状態ニテ進行セル爲線路間隔ノ擴大ニ伴ヒ車體ハ斜角ヲナシ遂ニ推進軸四ツ手接手逆轉軸寄ノモノカ決レ切損スルニ至リ車體カ下リ本線ト約十四度ノ角度トナリタル處ニテ逆轉軸制自在接手四ツ手受カガソリントンタンクノ角ヲ衝擊摩擦シツツ破損セシメタルモノト認ムル旨ノ記載

一、鑑定人關田友吉作成ニ係ル鑑定書中判示ガソリントンタンクノ破損原因ニ付該車輛ノ構造上カラ總テ推進軸逆轉軸制自在接手カ破損シ其ノ逆轉軸四ツ手受カガソリントンタンクヲ衝擊シ之ヲ破損シタルモノト推定スルヲ妥當ト認ムル旨ノ記載

ニ依リ之ヲ認メ判示原因ニヨリ引火シタルガソリンニヨリ判示車輛カ全燒シタル點ハ

一、鑑定人本山邦久作成ニ係ル鑑定書中判示ガソリン自動車ハ自己ノガソリントンタンクノ破損ニヨリ流出セルガソリンニ引火燃焼セシモノト認ムヘクガソリン引火原因ニ付テハガソリン自動車顛覆ノ際蓄電池前蓋カ下方トナリ異狀ナル衝擊ノ爲外箱ヨリ外レ蓄電池落下セントシテ接續線切斷シ其ノ電氣火花ニ依リガソリンノ瓦斯體ニ引火シタルヲ稍蓋然性大ナル原因ト思考スル旨ノ記載

一、鑑定人關田友吉作成ニ係ル鑑定書中判示ガソリン自動車ノ構造ハ外部ハ鋼製ニシテ床面及内部ハ木材其ノ他可燃性物質ニヨリ構成セラレ居ル故床面下部ニ取付ケラレ居タルガソリントンタンク(容量四百立當時推定油量約二百八十五立)カ破損シテガソリン流出シ之ニ引火セルモノトセハ先ツガソリントンタンク附近ヲ燃焼セシメ更ニ續イテ車體内部ニ延燒シ車輛ヲ燒損セシモノト認メラル又引火ノ原因ニ就テハガソリントンタンク破損ニヨリ流出セルガソリンカ車輛各部及地面上ニ飛散シ一部ハ直ニ氣化シ引火燃焼シ易キガソリン及空氣ノ混合瓦斯ヲ成生シ之カ運轉中又ハ脫線顛覆ノ際ニ於ケル車輛各部間又ハ其ノ他ノ事物トノ摩擦

衝擊ニヨル火花ニ因リ引火シタルカ又ハ車輛ノ電氣回路カ切斷或ハ短絡シテ發生セル火花ニ因リ引火シタルモノト認ムルモ單ニ引火ノ機會ノ最モ大ナルモノハ電氣火花ナル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認メ得ヘク判示木村一男外百七十三名カ火傷等ニ因リ即死シタル點ハ記錄第一二九四丁乃至第一四六六丁及第一七九八丁ノ各死體檢案書中判示ニ照應スル記載ニ依リ判示小田中政人外十六名カ受火傷後判示場所等ニ於テ該火傷ニ基因シテ死亡シタル點ハ記錄第一二八九、一二九三、一四六八及一四六九丁第一四七七丁乃至第一四八〇丁第二二四九及二三八二丁ノ各死體檢案書第一四七〇丁乃至第一四七三丁第一四七六、一四八一及一四六八丁ノ各死亡診斷書中判示ニ照應スル記載ニ依リ判示酒井榮作外五十六名カ判示程度ノ火傷等ノ傷害ヲ受ケタル點ハ記錄第一四八七、一四九一、一四九四、一五〇二、一五〇七、一五一二、一五一六、一五二一、一五二六、一五二七及一五三二丁第一五三九丁乃至第一五四三丁第一五四七、一五五一、一五五六、一五六一、一五六五、一六〇四、一六二二及一七二二丁ノ各診斷書第二四六四丁以下ノ三輪甚吉提出ノ始末書第一五七四、一五七九丁ノ各診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二三九〇丁ノ醫師ノ回答書第一五八四、一五九二、一五九六、一六〇八、一六二二、一六二六、一六四六、一六五一、一六六〇及一七〇九丁ノ各診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二三九八、二三九九丁ノ醫師ノ回答書第一五八八丁ノ診斷書及第二三九一丁ノ醫師ノ回答書(但シ林春一ノ分)第一六一七、一六三三丁ノ各診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二四〇一丁ノ醫師ノ證明書第一六三七、一六四二及一六五六丁ノ各診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二三九四、二三九五丁ノ醫師ノ回答書(但シ中野信夫、大林正治郎及川野美津利ノ分)第一六六四、一六七二、一六七五、一六八二、一六八五、一六八八、一六九一、一七〇一、一七〇四及一七一八丁ノ各診斷書及第二三九二、二三九三丁ノ醫師ノ回答書(但シ毛利正則及今西新一ニ關スル記載部分ヲ除ク)第一七一二丁ノ診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二三三七五丁ノ診斷書第一七二四及一七二七丁ノ各診斷書(治療日數ニ關スル記載部分ヲ除ク)及第二三

八八、二三八九丁ノ醫師ノ回答書(但シ前野克己ニ關スル記載部分ヲ除ク)ヲ通シ其ノ旨ノ記載アルニ依リ孰レモ之ヲ認ム依テ、
判示犯罪事實ハ其ノ證明十分ナリ

六七四

法律ニ照スニ被告人兩名ノ判示所爲中夫々業務上過失汽車顛覆破壊ノ點ハ刑法第二百二十九條第二項ニ業務上過失致死傷ノ點ハ各同法第二百一十一條ニ該當スルトコロ以上ハ夫々一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ最モ重シト認ムル判示木村一男ニ對スル業務上過失致死罪ノ刑ヲ以テ處斷スヘク所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人兩名ヲ各禁錮二年ニ處シ同法第二十一條ニ依リ末決勾留日數中夫々百八十日ヲ右各本刑ニ算入シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ依リ其ノ全部ヲ被告人兩名ヲシテ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十月九日

大阪地方裁判所

一九二 業務上過失傷害、同致死

判決

本籍 長崎市岩川町三十番地五十八
住居 長崎市岩川町三十番地ノ十

自動車運轉者

森 輝 松

明治三十七年十二月二十五日生

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害並同致死被告事件ニ付長崎區裁判所カ昭和十二年十月二十八日宣告シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ罰金百圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

訴訟費用ハ被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ自動車運轉者ニシテ長崎合同自動車株式會社ニ雇ハレ自動車運轉ノ業務ニ從事中

第一、昭和十二年九月五日午後三時二十分頃乗用自動車長崎縣第一七八〇號ヲ運轉シ時速約二十軒ニテ長崎市東中町ヨリ長崎驛方面ニ向ケ同市西中町喜久屋食堂前十字路ニ差蒐ラントシタルカ該十字路ハ同市上筑後町ヨリ西中町方面ニ至ル坂道トノ交叉點ニ該リ同點ニ至ル迄ノ被告人ノ進路ハ巾十九尺位ニシテ其ノ兩側ニ人家併立シ居リテ同交叉點ニ到ルニ非サレハ之下交叉スル前緩坂道ヲスラ望見スルコト能ハサル地勢ニ在リ(坂道ノ方ハ巾十一尺其ノ兩側ニ人家併立シテ交叉點ニ出テサレハ交叉道ヲ望見シ得ス)而モ該坂道ハ急勾配ナルモ人車ノ通行頻繁ニシテ此事ハ常ニ同所ヲ通行スル被告人ノ夙ニ知悉シ居レル所ナレハ同交叉點ヲ乗切ラントスル被告人自動車運轉者トシテハ

一九二 業務上過失傷害、同致死

六七五

同交叉點ニ差掛ルニ先チ自己ノ操縦スル自動車ノ進行ヲ前級坂道ニ依リ交叉點ニ入ラントスル者ニ豫報シ以テ其ノ者ヲシテ衝突ヲ避ケシムル爲警笛ヲ吹鳴スルハ勿論更ニ何時ニテモ急停車ヲ爲シ得ヘキ様速力ヲ緩減シテ進行スル等事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ右ノ如キ注意義務ヲ怠リ毫モ警笛ヲ鳴ラスコトナク漫然前同一速度ヲ持續シテ該十字路ニ差蒐リタル利那突如前方右斜上約三間ノ個所ニ前級坂道ヲ交叉點ニ向ケ自轉車ニテ急降下シ來ル柵屋進ヲ認メ急遽停車セントシテ其ノ措置ヲ執リ(同所ニ於テ被告人操縦自動車ノ奏效距離三間ナルコトハ被告人夙ニ之ヲ知悉ス)タルモ時既ニ遅ク惰力ノ爲當初發見地點ヨリ一間半進行シタル地點ニ於テ被告人操縦自動車ノ右側前照燈附近ヲ柵屋ニ激突顛倒セシメ因テ同人ノ左大腿下部其ノ他ニ治療約二週間ヲ要スル傷害ヲ負ハシメ

第二、同月十五日午後九時頃乘用自動車長崎縣第二一六八號ニ乘客二名ヲ乘セテ運轉シ長崎市ヨリ長崎縣郡彼杵郡西浦上村字三組川内郷ニ向ヒ時速約十五軒ヲ以テ同村字家野郷橋口圓一郎方水車小屋裏手道路ニ差蒐リタルカ同所附近ノ道路ハS字型カーブヲ爲シ見透シ十分ナラサル個所ニシテ被告人ノ夙ニ知悉セル所ナルヲ以テ斯ル場合自轉車運轉者タルモノハ時々警笛ヲ鳴ラシ先方道路上ノ者等ヲシテ自動車ノ進行ヲ豫知避讓セシメ危害ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ夜間且田舎道路ノコトナレハ何等危険ナカルヘシト輕信シ如上ノ義務ニ背キ毫モ警笛ヲ鳴ラサス剩ヘ右水車小屋裏手ハ長崎方面ヨリスレハ道路カ浦上川岸ヲ離レ二十分ノ一位ノ上勾配ヲ以テ十三間三尺餘ヲ昇リタル地點ヨリ約三十度位ノ角度ヲ以テ右折シテ六、七間ヲ進ミタル地點ニ該當シ同所ニ在ル地上物件ハ其ノ八間二尺六寸ノ手前ニ於テ前記自動車備付ノヘッドライトニ依リ優ニ其ノ形體ヲ望見識別

シ得ヘキ狀勢ニ在ルカ故ニ夜間同所ヲ長崎方面ヨリ自動車ヲ操縦運轉スル被告人ニ於テ危險防止ノ爲當然執ルヘキ前方注視ノ義務ヲ果シタランニハ前示水車小屋裏ニ差蒐ル際進路前方ノ道路上ニ末永豐丸カ被告人ノ自動車ノ進行シ來ルニ氣付カス酩酊ノ餘仰臥シ居タルヲ以テ優ニ其ノ手前八間二尺ノ個所ニ於テ之ヲ發見スルコトヲ得ルト同時ニ急停車ノ措置ヲ執リ(同個所進行速力ニ於テハ制動機ハ即座ニ奏效シ奏效距離ヲ要セス)以テ衝突ノ危險ヲ防止シ得タルニモ拘ラス前方注視ノ義務ヲモ怠リ漫然前記速力ノ儘進行シタル爲遂ニ是レヲ躓過シ因テ心臟破裂ニヨリ同所ニ於テ間モ無ク死ニ致ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示第一、第二ノ各所爲ハ夫々刑法第二百一十一條ニ該當スル處以上ハ同法第四十五條前段ノ併合罪ナルヲ以テ所定刑中孰レモ罰金刑ヲ選擇シ同法第四十八條第二項ニ則リ各罰金ノ合算額以下ニ於テ被告人ヲ罰金百圓ニ處スヘク該罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ依リ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ從ヒ被告人ヲシテ全部負擔セシムヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十三年一月二十一日

長崎地方裁判所刑事部

一九三 業務上過失致死

判決

六七八

本籍 山梨縣東八代郡右左口村字下向山三番地
住居 甲府市西一條通り二番地

自動車運轉者

渡邊正義

當三十六年

右ノ者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某立會ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ禁錮二月ニ處ス

理由

被告人ハ自動車運轉者ナルトコロ昭和十六年二月二十三日午後零時四十分頃山梨第四八二號貨物自動車ヲ操縱運轉シテ北巨摩郡中田村字中條地内中田村郵便局前幅員約三間半ノ縣道ヲ進行中前方十二間先左側ニ井上武穂(當六歲)井上幸穂(當十二歲)カ戯レ居レルヲ目撃シタルカスカル場合ニ於テハ被告人ハ智能低キ兒童ノコトトテ何時前方ヲ横斷スルヤモ計リ難キヲ以テ極メテ緩速度トシ事故ヲ防止スヘキハ勿論且警笛ヲ絶ヘス鳴ラシテ右兒童ニ注意ヲ喚起スヘキ業務上ノ注意義務アルニ不拘不注意ニモ僅カニ警笛ヲ一回吹鳴シ速度ヲ時速二十軒ニ減シテ進路ヲ該縣道中央ヨリ稍右ニ轉シタルノミニテ漫然進行ヲ繼續シタル爲メ前方約二間ノ距離ニ於テ右井上幸穂カ左側ヨリ右側ニ横斷セントスルヲ目撃スルヤ急遽把手ヲ右ニ切り急停車ノ手配ヲ施シタルモ時既ニ遅ク遂ニ同人ニ該自動車ヲ衝突セシメテ頸推

骨及腦底骨骨折ニ因リ死ニ致ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮二月ニ處スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年三月二十八日

甲府區裁判所

一九四 業務上過失致死

判決

本籍 横須賀市邊見町三十九番地
住居 同所

普通自動車運轉者

村松益次郎

當四十三年

右者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

一九四 業務上過失致死

六七九

被告人ヲ罰金百圓ニ處ス

六八〇

右罰金ヲ完納スル能ハサルトキハ金貳圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

理由

被告人ハ普通自動車運轉者ナルトコロ昭和十四年四月四日神第一七五七號五百疋積貨物自動車ヲ運轉シテ橫濱市鶴見方面ヨリ橫濱驛方面ニ向ケ進行中同日午後五時三十分頃同市神奈川區青木町五十七番地先三又路ニ差シ掛リタル際道路信號器ノ標示ニヨリ先行ノ貨物自動車ノ後方ニ一時停車シ更ニ前進信號掲出セラルルモ前車カ尙進行セントセサルニヨリ之ヲ追越サントシタルカスル場合自動車運轉者タル者ハ須ラク前後左右ヲ注視シ其ノ進路安全ナルヲ確認シテ事故發生ヲ未然ニ防止スルニ必要ナル措置ニ出ツヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ之ヲ怠リ恰モ當時降雨中ニテバックミラー反映良好ナラサルニ僅ニ「バックミラー」ヲ見タルノミニテ後方ヨリ疾走シ來レル電車アルコトヲ確認セス把手ヲ右ニ取リタル爲電車軌道内ニ乗入レテ進行シタル爲メ恰モ其ノ後方ヨリ進行シ來リ居タル橫濱市電氣局第三六五號電車ノ左前方ヲ自己ノ操縦セル自動車右後部フエンター附近ニ衝突スルニ至ラシメ其ノ激動ニ因リ前記停車中ノ貨物自動車ノ後方路上ニ居タル魯道善(當時四十八年)ニ車體後部ヲ激突セシメ因テ同人ヲ其ノ場ニ顛倒セシメテ鎖骨々折左頬部裂創等ノ傷害ヲ蒙ラシメ間モナク死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ所定金額範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金百圓ニ處スヘク尙同法第十八條ニヨリ右罰金不完納ノ場合ハ金貳圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場

ニ留置スヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年三月十六日

橫濱區裁判所

一九五 業務上過失致死傷

判決

本籍 島根縣飯石郡三刀屋町大字三刀屋二百二十二番地

住居 松江市北堀町二百四十六番地

休職島根縣巡查

三島保之助

明治三十六年十月二十日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死傷被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ罰金貳百圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金貳圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

一九五 業務上過失致死傷

六八一

被告人ハ島根縣巡查ニシテ自動車ノ運轉免許ヲ受ケ消防特務トシテ松江警察署ニ勤務シ消防自動車運轉ノ業務ニ從事シ居タルモノナルトコロ昭和十四年六月十四日午前八時半頃松江市雜賣町地行場附近ニ火災ノ起リシ際之カ消火ニ赴クタメ直ニ島消第一號千九百二十六年式ハドソン號消防自動車(後輪ノミ制動スル裝置)ニ搭乘シ同署勤務消防主任島根縣警部補龍河重一、同警察署勤務巡查部長廣兼光春、同巡查今岡宣夫、安田行雄、北島一良、内田森吉、小田壽一、岡田昇治、藤田義滿、松江市警防團城東分團消防部長岡田市藏ノ十名ヲ同乗セシメ自ラ操縦シテ同市殿町同警察署庫ヲ出發シ京橋川筋ヲ東ニ向ヒ銀治橋ヲ渡リ新大橋ニ出テ通稱十二間道路上ヲ約四十哩ノ時速ヲ以テ南進シ和多見新地入口邊ニ到リタルカ同所以南ハ幅員十二間ノ直線道路ナルニ加ヘ前方ニ當リ火災ノ黑煙立昇ルヲ望見シタルヲ以テ更ニ時速四十三、四哩トナシ疾走シ朝日町鐵道踏切ニ差蒐リタルカ該踏切ハ其ノ中央ニ信號燈及警報器ヲ取付ケタル標柱設置シアリテ東西ニ二分サレ且踏切南側道路ハ下リ勾配ニシテ其ノ路面ハ蒲鉾型(中央盛上リタル形)ヲ呈シ加之該路上踏切ヨリ南方約五、六間東寄ノ箇所ニハ偶荷馬車一臺北向ニ停止シ居リタルノミナラス該消防自動車ハ多人數搭乘スルトキハ勢ヒ車輛ノ後半ニ偏シテ搭乘スルニ至ル結果後部ノ重量増加シ前車輪ハ所謂浮氣味トナリ方向轉換完全ニ奏效シ難キノミナラス其ノ後車輪ノ「スプリング」長キタメ鐵道踏切其ノ他凸出セル箇所ヲ高速力ニテ通過スル時ハ反動劇シク因テ「ハンドル」ノ操縦ヲ誤ル虞アリシヲ以テ斯ル自動車ヲ操縦シテ斯ル箇所ヲ通過スルニ當リテハ自動車運轉者トシテ常ニ前方ヲ注視シ荷馬車ヲ避クルタメ方向ヲ轉シテ進行スル際ニハ操縦ヲ誤リ又ハ傾斜セル路面等ノ關係上顛覆スル等ノ虞アルヲ以テ斯ル場合ニ備フル爲相當程度ニ速力ヲ調節シ必要ノ場合ニハ即時急停車ヲ爲シテ之

ヲ避ケ得ル様其ノ他細心ノ注意ヲ爲シテ操縦進行スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス當時被告人ハ火事場ニ急行スルコトノミニ氣ヲ奪ハレ該箇所ヲ容易ニ通過シ得ルモノト輕信シ不注意ニモ前記踏切北方十五間ノ箇所ヨリ僅ニ時速三十哩ニ低下シタルノミニテ其ノ儘東側踏切ヲ通過シ該踏切通過後荷馬車ヲ避クル爲直ニ「ハンドル」ヲ斜右(斜西)ニ切り依然三十哩ノ時速ヲ以テ進行シ次テ「ハンドル」ヲ左ニ切りテ道路中央ヲ進行セント試ミタルモ前述ノ如キ高速度ニ因ル惰力ト踏切通過直後ノ車體ノ動搖並現場路面ノ傾斜等ノ爲效ナク自動車ハ斜右ニ驀進シ西側東寶劇場ニ激突セントシタルヨリ狼狽シ急遽「ハンドル」ヲ一杯ニ左ニ切ルト同時ニ「フットブレーキ」ヲ一杯踏ミタル爲前車輪ハ左方ニ轉シ後車輪ノミ「フットブレーキ」ノ爲急停止シタル爲時速三十哩ノ高速力ニテ斜右ニ驀進セシ折柄トテ車體ノ惰力ト路面ノ傾斜トニ因リ車體ノ重心ハ著シク右側ニ傾斜シ自動車ハ遂ニ非常ナル勢ヲ以テ右横ニ顛覆シ其ノ餘勢ハ更ニ車體ヲ一回轉セシメテ正位ニ復セシムルニ至リ其ノ間搭乗者ヲ車外ニ振落シ因テ今岡宣夫ヲシテ頭部複雜骨折ニ因リ即死セシメ龍河重一外八名ニ對シ夫々頭部胸部等ニ治療日數約一週間乃至二ヶ月ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ各該當スルトコロ右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情最モ重シト認ムル今岡宣夫ニ對スル業務上過失致死罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ其ノ所定金額範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金貳百圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ則リ罰金貳圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百二十七條第一項ニ依リ被告人ヲシテ全部負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年十二月十三日

六八四

松江地方裁判所刑事部

一九六 業務上過失傷害致死

判決

本籍 北海道上川郡比布村字比布市街地
住居 大阪市北區都島本通六丁目四十四番地
職工

大竹 瑛 二

明治四十四年九月二十二日生

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害致死被告事件ニ付昭和十四年五月二十七日古川區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ
被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ禁錮六月ニ處ス

但シ本裁判確定ノ日ヨリ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

理由

被告人ハ宮城縣本吉郡氣仙沼町三陸自動車株式會社ニ自動車運轉者トシテ雇ハレ其ノ業務ニ從事中ノ者ナルトコロ昭和十二年十月二十一日宮城第一、四七四號大型乗用自動車(車體長サ六米半)ニ小松光三郎(當時四十六歲外十四名ヲ乗車セシメテ之ヲ操縦シ定義如來ニ赴キタル歸途同日夕刻時速約三十五軒ノ速力ヲ以テ同縣松島町ヨリ同縣涌谷町方面ニ至ル縣道ヲ北進シ午後五時二十分頃同縣志田郡鹿島臺村平渡字小澤東北本線東京基點三百八十七、八六〇軒ノ無看手踏切ニ差蒐リタルカスル際街モ自動車運轉者タルモノハ地形及狀況ノ如何ヲ論セス踏切直前ニ於テ一旦停車シ且左右線路上ニ十分ノ注意ヲ拂ヒ列車ノ通過等危險ナキヲ確認シタル後ニ非レハ通行スヘカラサル業務上ノ注意義務ヲ負フモノニシテ殊ニ同所ハS字型ニ屈曲セル道路カ踏切ニ向ヒテ上リ勾配ヲ爲シ自動車ノ進行線路ノ見透共ニ困難ナル地形タルノミナラス被告人未經驗ノ箇所ニシテ且時刻夕昏ナリシヲ以テ之カ通過ニ當テハ一層ノ注意ヲ加ヘ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキモノナルニ拘ラス被告人ハ前記踏切ノ前方約百米ノ地點ニ於テ同踏切附近ニ「警手ナシ」トノ標識アルヲ認ムルヤ漸次速力ヲ減シ更ニ踏切ノ前方約十米ノ地點ヨリハ著シク除行シ乍ラ偶々一、二乗客カ「大丈夫ダ」「來ナイ」等ト叫フヲ聞クヤ單ニ側面ヲ顧視セルノミニテ列車ノ進行シ來ルモノナシト速斷シ何等停車等ノ處置ヲ講セス漫然進行ヲ續ケタル爲折柄定刻ヨリ三分遅レテ鹿島臺驛ヲ通過シ北進中ノ青森行第一〇三號急行旅客列車ヲ看過シ其ノ儘右踏切内ニ自動車ヲ乗入レ自動車ノ前車輪カ踏切西側(手前)軌條ニ達シタル際漸ク警笛及前照燈ニ依リテ列車ノ驀進シ來ルヲ察知シ急遽速力ヲ速メテ右踏切ヲ橫斷セムトシタルモ時既ニ遅ク同列車ノ機關部ニ自動車ノ後部二、三寸ノ箇所ヲ激突セシメテ自動車ヲ顛覆大破セシメ因テ乗客小松光三郎ヲ左右肋骨複雜骨折ニ因ル内出血ノ爲熊谷省三(當時三十七歲)ヲ頸椎骨複雜骨折ニ因ル脊髓斷裂ノ爲各即死セシメ畠山ふく(當時五十九歲)ヲ左額面骨複雜骨

一九六 業務上過失傷害致死

六八五

折竝右鎖骨及右肋骨複雜骨折ノ爲傷害後間モナク死亡セシメ村上由五郎ニ全治一ヶ月ヲ要スル左鎖骨複雜骨折等ノ傷害ヲ小松輝雄ニ全治一ヶ月ヲ要スル前額部裂創等ヲ篠崎きんニ全治二週間ヲ要スル前額血腫ヲ熊谷鐵右衛門ニ全治一週間ヲ要スル顔面擦過傷ヲ熊谷たかニ全治一週間ヲ要スル左頬擦過傷ヲ小野寺市作ニ全治二週間ヲ要スル腰部打撲傷ヲ熊谷軍平ニ全治一週間ヲ要スル肩部打撲傷ヲ熊谷彦治ニ全治一週間ヲ要スル頬部打撲傷ヲ小野寺仁兵衛ニ全治一週間ヲ要スル顔面擦過傷ヲ小野寺倉吉ニ全治十日ヲ要スル左腰部打撲傷ヲ小野寺平内ニ全治十日ヲ要スル顔面打撲傷ヲ案内係齋藤文作ニ全治一週間ヲ要スル顔面擦過傷ヲ各蒙ラシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ

判示事實ハ被告人ニ判示ノ如キ注意義務アリ且判示地勢狀況ノ下ニ於テハ更ニ一層ノ注意ヲ拂フヘキモノナリトノ點ヲ除キ

一、被告人ノ當公廷ニ於ケル自分ハ昭和六年六月自動車運轉手試験ニ合格シテ乙種運轉免許證ヲ受ケ昭和十年九月頃ヨリ三陸自動車株式會社ニ雇ハレ昭和十二年六月頃ヨリハ宮城縣本吉郡氣仙沼町本社詰トナリ乗合自動車、貸切自動車等ノ運轉ニ從事シ來リタルモノナルカ自分ハ同年十月二十一日宮城第一、四七四號大型乗用自動車ニ小松光三郎(當時四十六歳)外十三名ノ乘客及案内係ノ齋藤文作ヲ乗セテ之ヲ操縦シ出征軍人ノ武運長久祈願ノ爲大澤村ノ定義如來ニ參拜シタルコトアリ其ノ日自分等ハ午前五時頃氣仙沼町ヲ出發シ午後一時頃定義ヘノ參拜ヲ終リタルモ歸路松島ニ立寄り松島ヨリ浦谷町佐沼町ヲ經テ氣仙沼ニ歸ル豫定ニテ午後四時頃松島ヲ出發シ浦谷ニ向ヒタリ自分等ハ日暮方志田郡鹿島臺ノ街ニ入り通行人ニ浦谷ヘノ道順ヲ確メタル上更ニ北ニ進ミタリ自分ハ時速三十五軒ノ速力ニテ自動車ヲ運轉シ鹿島臺驛ヨリ程遠カラヌ判示踏切ニ差蒐リタリ此ノ踏切ハ自分ノ初メテ通過スル踏切ナリシカ其ノ少シ手前迄行キタル時自動車ノ前燈ニテ道路左側ニ「警手ナシ」トノ標札ノ立テアルヲ

認メタリ尙踏切附近ハS字型ノ上リ勾配ヲナシ除行シナケレハナラヌ故漸次除行シ標札ノ附近ヨリハ直ニ停車シ得ル様最徐行シツツ線路ノ左右ヲ眺メタルカ列車モ見エス警笛モ聞エサリシノミナラス其ノ際乘客中ノ誰カカ「大丈夫ダ」「來ナイ」等ト叫ビタルニヨリ自分モ安全ト思ヒ其ノ儘速力ヲ増シテ自動車ヲ踏切ニ乗入レ其ノ前輪カ鐵道線路手前ノ軌條ヲ越シタリト思ハル頃鹿島臺驛ノ方向ヨリ進行シ來レル青森行急行旅客列車ノ前燈カ見エ同時ニ警笛カ聞エタル故自分ハ速力ヲ加ヘテ踏切ヲ横斷セント致シタルモ自動車ハ流線型ニテ踏切ヲ越ス際其ノ後部カ高ク爲リ居リタル爲後部二、三寸ノ箇所カ機關車ニ觸レテ屋根ヲ刺キ取ラレ車ハ踏切ヨリ約十八米モ北ノ方ニアリ乘客ハ全部車外ニ飛ハサレタリ自分ハ一時人事不省ト爲リ氣附キタル時ハ運轉臺ハ横ニ倒レ右手テ「ハンドル」ヲ握リ足ハ「フットブレーキ」ニ掛ツテ居リ頭部ニ少シ負傷シ居リタリ此ノ事故ニテ乘客二人ハ即死一人ハ手當後間モナク死亡シ他ノ人々モ皆怪我致シタリソレ故會社ヨリ死者ノ遺族ヤ負傷者等ニ對シ弔慰金或ハ治療費等ノ名義ニテ合計約五千圓支出シ其ノ半額ノ二千五百圓ヲ自分カ負擔スルコトトシタルモ自分ハ無財產ナル爲今後十年間ニ働イテ支拂フ約束ヲ致シタリ尙其ノ後自分ハ知人ヲ頼ツテ大阪ニ參リ昨年(昭和十三年)八月ヨリ尼崎市ニ在ル尼崎精工株式會社ノ職工ト爲リ日給一圓三十五錢ヲ支給セラレテ働キ居ル旨ノ供述

一、當審ニ於ケル檢證調書中判示踏切附近ノ狀況トシテ省線鹿島臺驛前街路ヲ西ニ進メハ一町餘ニシテ市街地ヲ南北ニ貫ク縣道ニ達シ之ヲ北ニ進ムコト約十町ニシテ鹿島臺村平渡小澤地内東北本線ノ鐵道踏切(之本件事故ノ發生シタル踏切ナリ)アリ踏切ニ至ル間ノ縣道ハ副員約六米ニシテ西側ハ丘陵ヲ爲シテ人家點在シ南側ハ水田ヲ隔テ鐵道線路即東北本線ナリ縣道ト右鐵道線路トノ距離ハ鹿島臺ノ市街地ヲ離レタル附近ニ於テ約二百米餘ト認メラレ北ニ進ムニ從テ線路ハ次第ニ西方縣道側ニ彎曲シテ接近シ踏切ヨリ約百二十七米南方作場道附近ニ於テハ十二米トナリ尙次第ニ接近シテ前掲踏切ニ達スルモノナリ鐵道線路ハ水田ヨリ約三米ノ堤上ニアリ其ノ東側一帶モ又水田ナリ而シテ立會人タル被告人ノ言ニ依レハ被告人ハ右踏切ノ南方約百米ノ

地點ニ於テ「警手ナシ」トノ標識ヲ認メ之ヨリ漸次徐行シ踏切ノ南方約十米ノ標識附近ヨリハ更ニ徐行シタルモノナル旨ノ記載
 一、證人石田林治ニ對スル訊問調書中同人ノ供述トシテ自分ハ昭和六年機關士ヲ拜命シ其ノ後仙臺機關區ニ勤務シ居ル者ナルカ
 昭和十二年十月二十一日ノ日ハ午後四時四十分仙臺驛發ノ青森行第一大キク三號急行旅客列車ニ機關助手八代辰次郎同今野幸
 吉十三人ニテ乗込ミ之ヲ運轉スル中鹿島臺驛附近ノ踏切(判示踏切)ニ於テ被告人ノ操縦スル自動車ト衝突ノ事故ヲ惹起シタリ
 當日列車ハ定刻ヨリ三分遅レテ午後五時二十一分半鹿島臺驛ヲ通過シ時速約七十軒ノ速力ヲ以テ北進スル中判示踏切ヨリ約
 七、八十米前方ニ於テ突如一臺ノ自動車カ踏切線路ニ入り來リタルヲ發見シ非常警笛ヲ吹鳴シナカラ非常制動機ヲカケタルカ
 遂ニ及ハス判示ノ如ク同自動車ト衝突シ判示ノ如キ結果ヲ來シタル旨ノ記載
 一、證人一迫直人ニ對スル訊問調書中同人ノ供述トシテ自分ハ豫テ鹿島臺村ニ於テ開業シ居ル醫師ナルカ判示日時判示事故ニ依
 ル即死者ノ死體ヲ檢案シ負傷者ノ手當ヲ爲シタルコトアリ而シテ當時ノ診療簿ニ依レハ判示各被害者ノ死因或ハ傷害ノ部位程
 度カ夫々判示ノ如クナル旨ノ記載
 ヲ綜合シテ之ヲ認メ

被告人ニ判示ノ如キ注意義務アルコトハ昭和八年內務省令第二十三號自動車取締令第五十七條ノ規定ニ徴シテ明カニシテ更ニ被
 告人カ判示ノ如キ地勢狀況ノ下ニ於テ尙一層ノ注意ヲ加ヘ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキモノナルコトハ自動車運轉者トシテ條
 理上當然ナリト謂ハサルヘカラス
 仍テ判示事實ハ總テ其ノ證明アリタルモノトス
 法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合
 ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ依リ最モ犯情重キ小松光三郎ニ對スル罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中禁錮刑ヲ

選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮六月ニ處スヘク但シ被告人ハ是迄無事故ノ模範運轉手トシテ眞面目ニ其ノ
 業務ニ從事シ來リタルノミナラス事故發生後ハ各被害者並其ノ遺族ニ對シ三陸自動車株式會社ト共同負擔ニテ弔慰金
 治療費或ハ見舞金名義ヲ以テ相當多額ナル金圓ヲ支辨シ夫々圓滿ナル示談ノ成立ヲ見ルニ至リタルヲ以テ情狀刑ノ執
 行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條刑事訴訟法第三百五十八條第二項ニ則リ本裁判確定ノ日ヨリ三年間右刑ノ
 執行ヲ猶豫スヘキモノトス
 仍テ主文ノ如ク判決ス
 昭和十四年九月十三日
 仙臺地方裁判所刑事部

一九七 業務上過失致死

判決

本籍並住居 靜岡縣小笠郡橫須賀町桶須賀百十九番地
 自動車運轉者 上野 松 藏
 當三十七年

右ノ者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付昭和十年六月二十六日濱松區裁判所カ宣告シタル有罪ノ判決ニ對シ被告
 人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ
 一九七 業務上過失致死
 六八九

被告人ヲ罰金百圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス
訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ甲種自動車運轉者ニシテ乗用自動車ノ運轉ヲ業トシ居ル者ナル處昭和十年一月二十五日午前零時四十分頃乗
用自動車デユラント靜第一九六號ニ乗客鈴木みな清水佐吉ノ兩名ヲ乗車セシメ靜岡縣小笠原郡須賀町ヨリ濱松市ニ赴
ク爲之ヲ運轉シテ磐田郡中泉町所在東海道線ニ之宮踏切ニ差蒐リタルカ該線路ハ深夜ト雖列車ノ往來頻繁ナルノミナ
ラス同踏切ニハ遮斷機ノ設備アルモ右時刻頃ハ踏切看手執務シ居ラス其他自動信號機等ノ設備モナク而モ道路東側ニ
ハ踏切ニ接シテ踏切番小屋アリ之ニ續イテ人家立チ竝ヒ居リ夫カ爲遮斷機ノ降下スル線ニ極メテ接近スルニ非サレハ
東方線路ヲ見透スコト能ハサル狀態ナルヲ以テ自動車運轉者タル者ハ該踏切ヲ橫斷セントスルニ際シテハ線路ヲ見透
シ得ル地點ニ到リテ列車ノ來ラサルコトヲ確認シタル上線路ヲ橫斷スル等危險ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注
意義務アルニ拘ラス被告人ハ該踏切手前ノ東方線路ノ見透付カサル地點ニ於テ自動車ヲ停メ單ニ列車ノ進行シ來ル音
響ノ有無ニ注意ヲ拂ヒタルノミニテ偶其音響ノ聽エサリシ一事ヲ以テ列車ノ來ルコトナシト即斷シ前示ノ如キ危險防
止ノ處置ヲ講スルコトナク自動車ヲ進行セシメタル爲東方ヨリ進行シ來レル下リ急行列車ノ機關車ニ自動車ノ後部ヲ
衝突セシメ因テ乗客鈴木みなヲ右胸部打撲肋骨々折ニ因ル内出血及シヨツクニ依リ即死セシメ清水佐吉ニ全治約十日

ヲ要スル左後頭部打撲傷竝ニ割創等ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ業務上過失致死及同傷害ノ所爲ハ各刑法第二百一十一條ニ該當スル處右ハ一個ノ行爲ニシテ二個
ノ罪名ニ觸ルルモノナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ依リ重キ鈴木みなニ對スル業務上過失致死罪ノ刑
ニ從ヒ罰金刑ヲ選擇シテ被告人ヲ罰金百圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ依リ金二圓ヲ
一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ依リ全部被告人ヲ
シテ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十年十月十五日

靜岡地方裁判所刑事部

一九八 業務上過失致死、同傷害

判 決

本 籍 茨城縣久慈郡世矢村大字大森貳拾五番地

住 居 同縣多賀郡多賀町大字河原千貳千貳拾四番地ノ壹

大妻驛豫備驛手

高 橋

弘

一九八 業務上過失致死、同傷害

六九一

右ノ者ニ對スル業務上過失致死同傷害被告事件ニ付昭和十五年五月十七日〇〇區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ原審檢事及被告人ヨリ各適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

六九二
當三十六年

主 文

被告人ヲ禁錮參月ニ處ス

訴訟費用中當審ニ於テ生シタル分及原審證人三上くり同武藤西之介同關守之助及同關民次ニ各支給シタル分ハ被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ昭和十二年九月一日鐵道省常磐線大麁驛豫備驛手ヲ命セラレ同驛ノ出札、改札、手小荷物受渡、列車入替、信號並轉轍手、驛手及踏切警手ノ職務ニ屬スル事務其ノ他同驛全般ノ業務ニ付本務ノ者ノ休暇缺勤ノ際又ハ人手不足ノ際ニ上司ノ命ニ依リ其ノ職務ヲ代行スヘキ職責ヲ有シ爾來毎月數回ニ亙リ茨城縣多賀郡坂上村大字水木字大麁常磐線大麁驛構内太田街道第二種踏切(此ノ踏切ノ中心ヨリ大麁驛本屋中心標マテノ距離ハ約百七拾九米)ノ警手トシテ列車通過ニ際シ右踏切ニ設置シ在ル遮斷機ノ開閉ヲ掌リ同踏切看守ノ任ニ當リ居リタルモノニシテ該踏切ニ於テハ常磐線常陸多賀驛ニ至ル線路面ヲ同踏切ヨリ北方僅約參百拾米ノ地點迄見透シ得ルニ過キササルニヨリ該踏切ニ通過上リ旅客列車(該踏切ヨリ大麁驛ヲ經テ東京上野驛ニ至ル)カ右見透シ得ル視野ノ範圍内ニ入り來リタル以後該踏切ニ設置セラレアル遮斷機ヲ閉鎖スルモ右踏切ニ差蒐リタル人馬車ニ對シ列車ノ該踏切通過ニ因ル危害ヲ防止シ得サル狀況ニ在ルヲ以テ該上リ旅客列車カ定時ニ遲延シテ該踏切ヲ通過セントスルトキハ該踏切警手タル者ハ同踏切北方約貳百貳拾米ノ右線路面上ニ設置シ在リテ上リ列車踏切通過時ノ約三分乃至五分前ニ降下スヘキ上リ場内信號機ノ昇降ニ特ニ注意シテ同線上リ旅客列車ノ該踏切通過時ヲ豫知シタル上適切ナル時機ニ同踏切遮斷機ヲ閉鎖シ以テ同踏切ニ於ケル交通ノ安全ヲ期シ居リタルモノナルトコロ被告人ハ昭和十四年九月三日該踏切線路東側ニ設置シ在ル同踏切番小屋ニ於テ該踏切警手トシテ勤務中第二二四號下リ旅客普通列車カ同日午前十時二十四分大麁驛ニ到着スヘク定メラレアリタルカ之ニ先チ同日午前十時二十六分同驛ニ停車スヘキ第二九四號上リ貨物列車カ約七分遲着シタルヲ以テ斯クノ如キ場合ニハ該踏切警手タルモノハ須ク該旅客列車ノ該踏切通過時ヲ豫知シタル上該踏切ヲ橫斷セントスル人馬車ノ舉措ヲ看守シ適切ナル時機ニ該踏切遮斷機ヲ閉鎖シテ同踏切ニ於ケル人馬車ノ通行ヲ阻止シ以テ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ不注意ニモ之ヲ怠リ漫然該旅客列車モ亦約七分遲延スルモノト速斷シ該旅客列車ノ該踏切通過定時(大麁驛停車時ニ先ツコト約三十五秒乃至四十秒)ヲ過キ午前十時三十四分以後ニ及フモ猶右番小屋内ニ止リ後記列車及自動車衝突約一分前マテ附近ノ婦女ト談話ヲ交ヘ居リテ右上リ場内信號機ヲ注視セス該旅客列車カ約五分三十秒遲延シテ驀進シ來リ該踏切ニ接近セルモ之ニ氣付カスシテ同踏切遮斷機ヲ閉鎖セス且原審相被告人山口健男ノ運轉セシ常北電氣鐵道株式會社經營乗合旅客自動車カ該踏切ヲ東ヨリ西ニ橫斷スヘク同踏切内ニ進入シ來レルヲ認メナカラ之ヲ阻止スルコトナク該列車カ該踏切ノ北方約八十米ノ地點ニ接近シ來ルニ及ヒ初メテ之ニ氣付キタルモ時既ニ遲カリシ爲メ何等ノ方途ヲモ講スルニ由ナク此時既ニ該踏切内ニ乗入レ居リタル右常北乗合自

動車ニ該列車ヲ衝突セシメテ右自動車ヲ顛覆セシメテ右乗合自動車乗客松本チヨウ(當時六十五年)ヲシテ腦震盪症ヲ惹起シテ即死スルニ致ラシメ同乗客川崎たま(當時四十四年)ニ前頭部左下腿部裂創左肋骨々折胸椎壓迫骨折ヲ生セシメ事故後壹年餘ヲ經ルモ未タ全治セサル傷害ヲ負ハシメタル外同自動車運轉者右山口健男同自動車々掌野崎ミツエ同乗客赤津きみ外貳拾數名ニ夫々重輕傷ヲ負ハシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ判示事實中

- 一、被告人カ昭和十二年九月一日鐵道省常磐線大變驛豫備驛手ヲ命セラレ同驛踏切警手ノ職務ヲ始メ其ノ他判示事示ノ各業務ニ付判示ノ如キ場合ニ上司ノ命ニ依リ之ヲ代行スヘキ職責ヲ有シ爾來毎月數回ニ亘リ判示踏切ノ警手トシテ列車通過ニ際シ判示踏切ニ設置シ在ル遮斷機ノ開閉ヲ掌リ同踏切看守ノ任ニ當リ居リタル事實(判示冒頭ヨリ判示踏切看守ノ任ニ當リ居リタルマテノ事實)(但シ判示第二種踏切ノ中心ヨリ大變驛本屋ノ中心標アテノ距離カ約百七拾九米ナルコトハ當審檢證調書中ニ之ト同旨ノ記載アルニ依リ之ヲ認ム)竝ニ該踏切通過上リ旅客列車カ判示踏切ヨリ其ノ北方ニ於テ見透シ得ル視野ノ範圍内ニ入り來リタル以後該踏切ニ設置セラレアル遮斷機ヲ閉鎖スルモ右踏切ニ差蒐リタル人馬車ニ對シ列車ノ該踏切通過ニ因ル危害ヲ防止シ得サル事實ハ被告人ノ當公廷ニ於ケル判示同趣旨ノ供述ニ依リ之ヲ認ム
- 二、該踏切ニ於テハ同踏切ヨリ常磐線常陸多賀驛ニ至ル線路面カ北方僅約三百十米ノ地點迄見透シ得ルニ過キサル狀況ニ在ル事實ハ當審檢證調書中ニ之ト同趣旨ノ記載アルニ依リ之ヲ認ム
- 三、上リ旅客列車カ定時ニ遲延シテ該踏切ヲ通過セントスル場合ニ於テハ該踏切警手タル者カ同踏切北方約二百二十米ノ前記錄路面上ニ設置シ在リテ上リ旅客列車踏切通過時ノ約三分乃至五分钟前ニ降下スヘキ上リ場内信號機ノ昇降ニ特ニ注意シテ同線上リ旅客列車ノ該踏切通過時ヲ豫知シタル上適切ナル時機ニ同踏切遮斷機ヲ閉鎖シ以テ同踏切ニ於ケル交通ノ安全ヲ期シ居リタル

ル事實ハ

- (一) 當審檢證調書中立會人大變驛助役小堤昇ノ指示説明トシテ常陸多賀驛ヨリ大變驛ヘ列車ヲ送ル場合ニ於テハ常陸多賀驛ヨリ發車約三分前ニ大變驛ヘ閉塞機ヲ通シテ列車ヲ送ルニ付テノ承認ヲ求メ大變驛ニ於テ之ニ承認ヲ與ヘタルトキニハ常陸多賀驛ニ於テハ列車時刻表ニ依リ上リ列車ヲ大變驛ニ向ケ發車セシメ直チニ閉塞機ノ電話ヲ以テ定時ニ出發セル旨或ハ又場内分邊發シタル旨ヲ大變驛ニ通知シ右發車ノ通知ヲ受ケタル大變驛ニ於テハ列車カ場内ニ這入りテ差支ヘナキ旨或ハ又場内ニ這入り停止セス通過シテ差支ヘナキ旨ノ信號ヲ直チニ掲タルモノナリ驛北方ノ上リ列車用信號機ハ上リ場内信號機及豫備信號機ニシテ常陸多賀驛ヲ出發シタル列車カ大變驛ニ到着スル迄ノ所要時間ハ普通客車六分急行列車三分四十五秒貨物列車九分ニシテ大變驛第二種踏切ヨリ大變驛迄ノ所要時間ハ三十五秒乃至四十秒ナル旨ノ記載及同調書中ニ於ケル右場内信號機ハ踏切ノ中心ヨリ北方二百二十三米五ノ距離ニ在ル旨ノ記載
- (二) 當審證人武藤西之介ニ對スル訊問調書中私ハ大變驛ノ踏切警手ヲ爲シ居リ此ノ踏切警手ノ役目ハ以前踏切番ト謂ヒタル當時ノ仕事ト同様踏切番カ專門ニシテ汽車カ通過スル時危險ノナキ様汽車カ踏切ヲ通過スル相當時分前ニ遮斷機ヲ下スコトナリ私カ大變驛ニ來リテヨリ十年以上ニ爲ルカ時ニ汽車カ遅レルコトアリ其ノ場合ニハ信號カ下ルト遮斷機ヲ下ス用意ヲ爲シ居ルコトハ相違ナシ汽車ノ音ハ季節ニ依リ聞エサルコトアル故不正確ニシテ標準ト爲シ得ス私ハ以前ヨリ信號機ヲ見テ下シ居リタリ汽車カ見エル様ニ爲リテヨリ下シタルニテハトモ間ニ合ハサル旨ノ同證人ノ供述記載
- (三) 原審證人武藤西之介ニ對スル訊問調書中汽車カ踏切ヲ通過スル時ニハ汽車通過ノ約三分位前ニ遮斷機ヲ下シテ一般ノ交通ヲ止メテ居リ汽車カ遅レタル場合ニハ電話ヲ掛ケテ問合セル外特ニ信號機ニ注意シテ信號カ下リタル時ニ遮斷機ヲ下ス様ニ爲シ居リタリ驛ヨリ延着ノ通知カアルコトモアルカ通知ノナキコトカ多カリキ風向キニ依リ列車ノ音カ良ク聽ユルコトア

ルモ列車カ規定ノ時刻ニ來ラス電話モ通セサルトキハ信號機ニ特ニ注意シ居リ尙列車ノ音響ニモ注意シ居ルモ之ハ風ノ具合ニテハ聞エサルコトアルヲ以テ信號機ヲ注意スル外ニ途ナク何時ニテモ信號機(遮斷機ノ誤記ト認ム)ヲ降シ得ル様ニ用意シ信號機ヲ見居レリ尤モ番小屋ノ電話カ不通ニナリタルコトハ五、六年以來只一回アリタルニ過キス上リ列車カ踏切ヲ通過スル場合(常陸多賀驛)ヲ汽車カ出ルト信號機カ直ク降下シ信號機カ降りテヨリ普通列車ハ約五分位後ニ急行列車ハ約三分位ニテ來ルヲ以テ通過時間ヲ調ヘ時計ヲ見テ三分前ニ遮斷機ヲ下クル様ニ爲シ居リタル旨ノ同證人ノ供述記載ヲ綜合シテ之ヲ認メ

- 四、被告人カ昭和十四年九月三日判示踏切番小屋ニ於テ該踏切警手トシテ勤務シ居リタルコト、第二二四號上リ旅客普通列車カ同日午前十時三十四分大廻驛ニ到着スヘク定メラレアリタルコト、之ニ先チ同日午前十時二十六分同驛ニ停車スヘキ第二九四號上リ貨物列車カ約七分遅着シタルコト、被告人カ該旅客列車モ亦約七分遅延スルモノト推斷シ該列車ノ該踏切通過定時(該定時ハ大廻驛停車時ニ先ツコト約三十五秒乃至四十秒ニシテ此事實ハ當審檢證調書中ニ檢證立會人大廻驛助役小堤昇ノ指示説明トシテ之ト同旨ノ記載アルニ依リ認ム)ヲ過キ午前十時三十四分以後ニ及フモ猶右番小屋内ニ止リ附近ノ婦女ト(本件事故發生約一分前マテ)談話ヲ交ヘ居リテ右上リ場内信號機ヲ注視セス該旅客列車カ約五分三十秒遅延シテ進行シ來リ該列車カ判示踏切ノ北方約八十米ノ地點ニ接近シ來ルニ及ヒ初メテ之ニ氣付キタルコト、其ノ際判示踏切ノ遮斷機ヲ閉鎖セサリシ爲メ判示乗合自動車カ判示ノ如ク同踏切内ニ進入シ來レルコト、且該自動車カ右踏切内ニ進入シ來レルヲ認メタルモ之ヲ阻止セサリシコト及判示遮斷機ヲ閉鎖セス且ツ事故發生ヲ未然ニ防止スヘキ何等ノ方途ヲモ講スルニ暇無カリシ爲メ判示踏切内ニ進入シタル右自動車ニ右旅客列車カ衝突シ該自動車カ顛覆シタルコトハ孰レモ被告人ノ當公廷ニ於ケル其ノ旨ノ供述ニ依リ之ヲ認メ
- 五、右衝突顛覆ニ因リ判示死傷者ヲ生シタルコトハ

- (一) 故松本チヨウニ對スル醫師川上達雄作成ノ昭和十四年九月三日付死體檢案書中松本チヨウ(當六十五年)ハ震盪症ニ因リ昭和十四年九月三日午前十時三十分茨城縣多賀郡坂上村大字水木常磐線大廻踏切上リ線地先キニ於テ死亡シタル旨ノ記載
- (二) 當審證人川上達雄ニ對スル訊問調書中私カ松本チヨウヲ診察セルハ大廻驛踏切ノ自動車カ顛覆セル附近ニシテ午前十一時前後ナリシカ其ノ時ハ既ニ息カ切レ居リ死後三十分位經過シタル頃ナリシヲ以テ死體檢案書(前記ノモノ)記載ノ死亡ノ時間ハ之ヨリ推定シタルモノナリ同人ノ死亡ノ原因ハ自動車カラ抛リ出サレテ身體ノ何處カヲ打チ腦震盪ヲ起シタルコトニ在ルト思ヒタリ腦震盪ハ衝擊ヲ受ケ又ハ身體ヲ打チタル時生スルモノニシテ之カ爲メ腦神經ノ麻痺ヲ來シ次テ心臟ニ故障ヲ來シ死亡スルコトアリ尙私ハ同所ニ於テ重症者ヨリ診察ヲ始メ約貳拾人程ノ負傷者ヲ診察セルカ其ノ内ニハ頸動脈ヲ損シ甚シク出血セル娘モアリタル旨ノ同證人ノ供述記載
- (三) 日立病院外科醫師水野育雄作成ニ係ル昭和十四年九月五日附診斷書中 (イ)川崎たま(當時四十四年)ノ前頭部左下腿骨ニ裂創。左肋骨ニ骨折。胸椎ニ壓迫骨折アリ經過後九拾日間ヲ要ス (ロ)宮崎剛(當時四十四年)ノ右鎖骨ニ骨折。右腰椎橫突起ニ骨折。全身ニ擦過傷アリ經過後四十五日間ヲ要ス (ハ)赤津きみ子(當時二十四年)ノ骨盤ニ骨折アル外三個所ニ擦過傷アリ經過後九十日間ヲ要ス (ニ)野崎ミツエ(當時十七年)ノ左下腿骨ニ骨折。右眼瞼部ニ打撲症アリ經過後六十日間ヲ要ス (ホ)根本あい子(當時二十一年)ノ右頸部及右膝蓋部ニ切創アル外擦過傷一個所アリ經過後十日間ヲ要スル旨ノ記載
- (四) 川崎たまニ對スル司法警察官ノ聽取書(昭和十五年十一月十一日附)中私ハ昨年九月三日午前九時半頃太田町常北電鐵會社ノ乗合自動車ニ乘リ實家ニ行ク途中多賀郡坂上村大字大廻地内常磐線踏切ノ處ニテ汽車ト乗合自動車トカ衝突シタル爲メ前頭部左足大腿部ニ傷ヲ負ヒ又左肋骨カ折レタル爲メ夢中ニ爲リ日立市日立製作所病院ニ入院シテヨリ滿三日ノ間ハ意識カ

ナカリキ同病院ヨリハ百五十八日目に退院シタルモ其ノ時ハ未タ歩クコトモ出来サリキ本年七月二日頃東京市下谷區御徒町田代病院ニ行キ診察ヲ受ケタルトコロ脊髓ノコルセツトハ未タ六ヶ月位ハ取ルコトカ出来ス元ノ様ナル身體ニハ成ラヌ故無理ナ仕事ハ出来サルニヨリ静養ニ努メタル方カ良カラント謂ハレタリ夫レテ本年九月初頃福島縣白米温泉ニ行キ湯治ヲ爲シタルモ全治セス未タニコルセツトハ取ルコト出来ス歩行等モ靜カニ爲サネハナラヌ旨ノ同人ノ供述記載

(五) 宮澤剛ニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十五年十一月十一日附)中私ハ昨年九月三日常北電鐵會社ノ乗合自動車ニ乗車シ日立警察署ニ出張ノ途中午前十時五十分頃多賀郡坂上村大字大塚地内常磐線踏切ニ於テ列車ト衝突シ右鎖骨々折、右肩胛突起骨折及腰椎横突起骨折腦強打等ノ傷害ヲ蒙リ日立市日立病院ニ入院治療ヲ受ケ九月二十八日退院シ其ノ後接骨院ニテ治療ヲ受ケ更ニ東京市下谷區田代病院ニ入院治療シ退院後モ本年六月末頃マテ治療ヲ加ヘタルモ未タ全治セス目下尙自宅ニテ肩部ト腰部ニ治療ヲ加ヘツ、アル旨ノ同人ノ供述記載

(六) 赤津キムニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十四年九月十一日附)中私ハ本月三日久慈郡坂本村大字大橋ヨリ常北乗合自動車ニ子供ヲ連レテ乘リ乘客ハ二十四五人アリタルカ大塚ノ鐵道踏切ニ差蒐リタルハ午前十時四十分頃ニシテ踏切ニ入りタル個所ニテ上リ客車カ私ノ乘リ居レル自動車ニ衝突セリ其ノ以後ハ夢中ニテ何モ判ラス後ニ自動車ノ中ヨリ引出サレテ救護ヲ受ケ初メテ氣付キタルカ其ノ爲メ私ハ腹部ヲ強打シ未タニ痛ミテ立ツコト能ハサル旨ノ同人ノ供述記載

(七) 野崎ミツエニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十五年十一月十二日附)中私ハ昭和十三年三月常北電氣鐵道株式會社ノ車掌トシテ雇ハレ昨年九月三日大塚踏切ニ於テ負傷セル爲メ業務ニ從事スルコト能ハス本年六月中旬頃退職セリ私ハ昨年九月三日午前九時半頃日立行乗合自動車ニ乗車スヘキ當番トナリ運轉者山口カ運轉シ私カ車掌トシテ乗車シ出發セリ其ノ時乘客ハ二十八人アリタルカ午前十時五十分頃多賀郡坂上村大塚地内常磐線踏切ニ於テ上リ列車ト乗合自動車トカ衝突シ私ハ左

足下腿骨カ折レ左眼部ヲ強打サレタル爲メ夢中ニナリ其ノ時ノ狀況等ハ全然判ラス夫レヨリ日立病院ニ入院シ百二日間治療ヲ受ケ昨年十二月十三日頃退院シタルモ歩行出来ス更ニ接骨院ニテ治療ヲ受ケ本年六月末頃漸ク歩行シ得ルニ至リタル旨ノ同人ノ供述記載

(八) 根本愛子ニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十四年九月十一日附)中私ハ本月三日太田發日立行ノ乗合自動車ニ乘リ來リ途中大塚ノ踏切ニテ汽車ニ衝突シテ負傷シ目下日立病院ニ入院治療中ナリ其ノ爲メ右頸部ト右手及右足ニ裂創ヲ負ヒタル旨ノ同人ノ供述記載

(九) 山口健男ニ對スル醫師荷見源六作成ノ昭和十四年九月四日附診斷書中同人ノ右下腿、左下腿、顔面、上肢ニ裂創等治療日數三週間ヲ要スル約十個所ノ創傷存スル旨ノ記載

(十) 山口健男ニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十四年十月三日附)中私ハ本年七月ヨリ太田町常北電鐵株式會社自動車課ニ就職シ乗合自動車ノ運轉ニ從事シ居レルカ本年九月三日乗合自動車ヲ運轉中大塚附近ノ踏切ニテ列車ト衝突シ負傷セリ之カ爲メ太田町ノ西山病院ニ入院シ九月二十三日退院セルモ未タ治療ヲ受ケツ、アリ衝突當時乘客ハ二十四、五名居リタル様ニテ乘客カ多勢負傷セルコトモ病院ニテ聞キタリ即死セル人モ一人アルコトヲ聞キタル旨ノ同人ノ供述記載

(十一) 被告人ノ當公廷ニ於ケル判示列車ト自動車トノ衝突ニ因リ乗合自動車ノ乘客松本チヨウカ死亡シ運轉者、車掌ヲ加ヘ二十七名ノ負傷者カ生シタル旨ノ供述

ヲ綜合シテ之ヲ認ム

六、如上ノ場合ニ在リテ該踏切警手ノ任務ニ在ルモノカ列車ノ該踏切ヲ通過スヘキ時刻ヲ豫知シタル上踏切ヲ横斷セントスル人馬車ノ舉措ヲ看守シ適切ナル時機ニ踏切遮斷機ヲ閉鎖シ以テ列車ノ踏切通過ニ因リ生スル危害ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務

上ノ注意義務アルコトハ法律上當然ノ事理ナリ仍テ判示事故發生ニ付被告人ニ右義務ノ懈怠アリシヤ否ヤヲ按スルニ、
(一) 右認定ノ諸事實

(二) 被告人ノ當公廷ニ於ケル豫備驛手ハ驛ノ仕事ノ全般ニ互リ深ク通シ居ル者カ任命セラルモノナリ上リ普通列車カ判示踏切ヨリ見透シ得ル視野ノ範圍内ニ入り來リテヨリ判示踏切ニ差蒐ルマテノ經過時間ハ本件事故發生前マテハ一分間位要スルモノト思ヒ居タルカ事故發生後該時間ヲ測定セルニ該時間ハ約十八秒ナルコト判明セリ判示踏切ニ於ケル遮斷機ヲ降下スヘキ時機ニ就テハ列車カ踏切ヲ通過スル相當時分前ニ爲スヘシト服務規定ニ定メラレアリ確然ト標準ヲ定メサリシモ普通ノ場合ニ在リテハ列車ノ近付キ來ル音響ニ依リ居レルカ北風ノ場合ハ約三分前ヨリ南風ノ時ハ約一分前ヨリ無風ノ時ハ約二分前ヨリ音響カ聽ユルニヨリ之ニ基キ遮斷機ヲ降下シ居レリ又音響カ聽エサルトキハ大變驛ニ停車スヘキ定時ヨリ約二分前ニ降下シ居レリ從テ列車進行ノ音響ニ依リ遮斷機ヲ降下スルコトハ不正確ナリ最モ安全ナル方法ハ見透シカ利カサル故信號機ノ昇降ヲ標準トナス方法ナルモ之ハ本件事故發生後研究シタル結果初メテ判明セルトコロナリ本件事故發生當時ニ在リテハ列車延着ノ傾向ナカリシモ當日午前十時二十六分大變驛中線ニ停車スヘキ第二九四號上リ貨物列車ハ約七分間延着セルヲ以テ同一線路ヲ進行シ來ル次ノ列車即チ午前十時三十四分大變驛着第二二四號上リ旅客列車モ亦七分位ハ延着スルモノト思ヒ右貨物列車カ踏切ヲ通過スル際降下セル遮斷機ヲ上昇セル後番小屋ニ入りタルニ近所ノオ内儀サン三上照代カ立寄りタルヲ以テ別段急用ハ無カリシモ右番小屋内ニテ同女ト世間話ヲ爲シ同女ハ事故約一分前歸リ行キタルカ私ハ其ノ後番小屋内ニテ上リ列車ノ進行シ來ル方向ヲ背後ニシテ道路ニ向ヒ腰掛ケ居リタリ其ノ時時刻ハ午前十時三十七分頃ニシテ其處ヘ乗合自動車カ來リタルカ汽車カ通過スルマテニハ末タ二、三分間程餘裕カアルニヨリ自動車ヲ通過セシメテ後遮斷機ヲ降下セント思ヒ居タリ然ルニ自動車ハ速力ヲ減シ踏切ニ入りテ停車セルニヨリ驚キ番小屋ヲ飛出シ北方ヲ眺メタルトコロ午前十時二十四

分ニ到着スヘキ列車カ既ニ踏切ノ北方八十米ノ地點邊マテ進行シ來レルヲ認メタルモ列車カ八十米モ接近シテハ赤旗ヲ示シテ列車ニ注意ヲ與フルモ間ニ合ハス七分程延着スルコト思ヒタル列車ハ五分三十秒遅レタルノミナリシ爲メ自動車ト列車トハ衝突シタルナリ七分程第二二四號列車カ延着スルコト思ヒタルコトニ就テハ別ニ其ノ根據ナク私ノ想像違ヒナリ職務ニ關係ナキ者ヲ番小屋ニ入レ難談ヲスルカ如キコトハ悪シキコトナリ信號機ノ降下セル時ハ之ヲ見サリシモ照代カ番小屋ヲ出テ行クト同時ニ信號機ヲ見タルニ其ノ時ハ信號機ハ降下シ居タリ女ト談話ヲ爲サス信號機ヲ見テ居レハ列車カ下孫驛(常陸多賀驛ノ舊稱)ヲ發車スルト同時ニ信號機カ降下シ列車カ踏切ヲ通過スヘキ時刻カ判ル故適當ノ時機ニ遮斷機ヲ降下シ得ヘキモ其ノ當時ハ餘リ信號機ヲ氣ニ留メ居ラサリキ番小屋ニハ電話ノ設備アリテ列車カ延着スルトキハ大變驛ニ問合スコトニナリ居ルモ私ハ餘リ利用シタルコトナシ尙其ノ時汽車ノ音響ハ乗合自動車ノ機關ノ音響ニ消サレテ聞クコト能ハサリシカ右第二二四號列車モ前列車同様七分程ハ延着スルモノト思ヒ列車ノ進行スル音響ニ耳ヲ傾ケ居ラサリシコトハ悪シカリシ旨ノ供述
(三) 原審第一回公判調書中普通遮斷機ヲ降下スルハ列車ノ通過スル二、三分前ナリ列車カ通過スル時ニハ信號カ降下スル故其ノ時遮斷機ヲ降下シ通過時間ニナリテモ通過ノ信號カ降下セヌ時ハ遮斷機ヲ降下セヌ前列車(第二九四號列車)モ延着セシ故此度ノ列車(第二二四號列車)モ延着スルモノト思ヒ電話モ掛ケサリシ次第ナリ本件事故ハ女ト難談シ居リシ爲メ遮斷機ヲ降下スルコトヲ忘レタルモノニシテ遮斷機ヲ降下シ置ケハ本件事故ハ生セシテ濟ミタルモノト思フ旨ノ被告人ノ供述記載
(四) 被告人ニ對スル司法警察官ノ聽取書(昭和十四年九月三日付)中本日午前十時二十六分上リ貨物列車カ七分遅レ中線ニ入り來レル時私ハ(踏切番小屋ヨリ)出テ遮斷機ヲ降下セルカ其ノ時隣リノ三上照代カ踏切番小屋ニ來テ話ヲ爲シ居タリ次ノ上リ列車ハ午前十時二十四分大變驛着ナルカ前ノ貨物列車カ七分遅レタル故右列車モ七分以上遅レルモノト思ヒ私モ踏切番小屋ニ居リテ照代ト話シ居リタリ遮斷機ハ汽車ノ踏切通過前三、四分前ニ降下スルヲ適當トスヘキモ私カ自動車ノ音響ヲ聽キ

タルハ衝突前約一分ナル故其ノ時ハ既ニ遮断機ヲ降下スヘキ時機ヲ失ヒ居リタル次第ナリ三上照代カ來テ居リタル爲メ三、四分前ニ遮断スヘキ取扱ヒヲ誤リタル譯ナル旨ノ被告人ノ供述記載

(五) 被告人ニ對スル司法警察官ノ聴取書(昭和十四年九月五日付)中上リ列車ノ時ハ下孫驛ヲ發車スルト同時ニ信號機カ下リル故信號カ下ツテヨリ六分ニテ大變驛ニ着ク譯ナリ故ニ踏切警手ハ信號機ヲ常ニ注意シテ見テ居リ信號カ下リテヨリ三分位過キタルトキ踏切ヲ閉鎖スルコトカ列車ノ延着ノ様ナ場合一番適切ナル處置ナリ踏切警手トシテハ常ニ信號機ニ注意セサルヘカラサリシモ私ハ事故ノ當時近所ノ照代ト話ヲシテ居リタル爲メ信號機ノ下リタルコトニ氣付カス照代カ歸ルトキ信號機ノ下リ居ルコトニ初メテ氣付キタル故何時分ニ信號機カ下リタルカハ判ラサリキ私カ信號機ヲ見テ居リソレカ下リテヨリ三分位過キテ遮断機ヲ下シ通行ヲ止メテ置キサヘシタリシナラハ衝突スル様ナコトハナカリシナランモツイ私カ夫レヲ爲ササリシ爲メ衝突事故ヲ起シテ仕舞ヒタル旨ノ被告人ノ供述記載

(六) 原審證人照代事三上くりニ對スル訊問調書中私ハ昭和十四年九月三日大變驛踏切番小屋前ニ差蒐リタル際高橋弘カ小屋ノ中ニ這入レト申シタル故中ニ入り同人ト話ヲ爲シタルカ同人ハ其ノ話中ニ驛ヨリ掛リ來レル電話ヲ受ケ其ノ後一度自ラ驛ニ電話ヲ爲シタルモノニシテ之ハ間違ヒナシ私ハ十五、六分程番小屋ニ居リタルカ其ノ間ニ一度貨物列車カ通過シタリ私カ歸リテヨリ二、三分後自動車ト汽車トノ衝突事故アリタルモノナレハ該事故ニ就テハ良ク判ラサル旨ノ同證人ノ供述記載
ヲ綜合スレハ被告人ハ大變驛ニ於ケル諸般ノ驛務ニ熟達セルノ故ヲ以テ同驛ノ豫備驛手ヲ命セラレタルモノニシテ判示踏切ノ踏切警手トシテ盡ササルヘカラサル判示ノ如キ職務上ノ注意義務ニ就テハ之ヲ知悉シ居リタルモノト認ムヘク判示踏切ニ在リテハ上リ列車ニ對スル見透シノ視野廣カラサル爲メ上リ旅客列車ノ進行ヲ認メテ後踏切遮断機ヲ降下スルモ踏切ヲ横斷スル人馬車ニ對シ列車ノ踏切通過ニ因リ生スヘキ危害ヲ防止スルコト能ハス之ヲ完全ニ防止スルニハ列車ノ踏切通過約三分乃至五分

前ニ降下スヘキ上リ場内信號機ノ昇降ヲ注視シ其ノ降下アリタル時期ヲ標準トシテ列車ノ踏切通過時ヲ豫知シタル上適切ナル時機ニ遮断機ヲ降下スル外他ニ適確ナル右危害防止ノ方法ナカリシニ拘ラス被告人ハ判示事故ニ際シ此方法ヲ採ラサリシノミナラス上リ旅客普通列車カ見透シ視野範圍内ニ入り來リテヨリ判示踏切ニ差蒐ルマテノ經過時間ヲ辨セス且何等的確ナル根據ナキニ拘ラス前列車カ七分間遅延セルニヨリ後列車モ亦同時間遅延スルモノト推斷シタルママ踏切番小屋ニ設置セラレタル電話機ニヨリ判示第二二四號列車ノ遅延スヘキ時間ヲ問合ス等同列車ノ踏切通過時ヲ確認スヘキ何時ノ方途ヲモ請セス緊急ナル用件モアラサリシニ附近ノ婦女ヲ番小屋内ニ立入ラシメ本件事故發生約一分前マテ同女ト雜談ヲ交シ而モ右信號機カ降下シ居レルヲ目撃シナカラ右列車カ見透視野範圍内ニ入りテ後約二百三十米ヲ進行シタル地點判示踏切ノ北方約八十米ノ地點即チ遮断機ヲ閉鎖スルハ固ヨリ其ノ他何等ノ方途ヲ以テスルモ該踏切ヲ横斷セントシツ、アル人馬車ヲ列車ノ踏切通過ニ因ル危害ヨリ防止シ得サル地點ニ達スルマテ拱手傍觀何等危害防止ノ方途ニ出テス判示自動車カ判示踏切内ニ進入スルママニ放任シ因テ判示事故ヲ生セシメタルコトヲ認定セサルヲ得ス果シテ然ラハ判示死傷ノ結果ハ被告人カ前示業務上ノ注意義務ヲ怠リタルニ基因スルモノト謂ハサルヘカラス

尤モ判示事故ニ當リ原審相被告人山口健男カ判示乗合自動車ヲ運轉シ判示ノ如キ狀況ニ在ル判示踏切ヲ横斷セントスルニ際シテハ須ク踏切ニ立入ルニ先チ一旦停車シテ列車ノ進行シ來ルヤ否ヤヲ注意シ危險無キコトヲ確認シタル上横斷スヘキ業務上ノ注意義務アルモノニシテ同人カ此ノ注意ヲ怠リ該踏切ノ遮断機カ閉鎖セラレアラサリシ一事ノミニ依據シ漫然危險ナキモノト速斷シ該自動車ヲ該踏切内ニ進行セシメタル事實ハ之ヲ認メ得ラレサルニアラサルヲ以テ同人ノ過失モ亦判示死傷ノ結果ニ付一因ヲ爲スモノト謂ハサルヘカラスモ一方凡ソ踏切警手ノ如キ其ノ注意ヲ怠ルトキハ甚大ナル危害ヲ生スル惧レアル業務ニ從事スル者ハ危險豫防ノ爲メ萬全ノ注意ヲ爲スヘキ責任アルモノニシテ判示認定ノ場合ニ於テモ被告人カ第二二四號上リ旅客

列車ノ判示踏切通過定時ニ上リ場内信號機ヲ注視スル等ノ方法ヲ採リ該列車ノ該踏切通過時ヲ豫知シタル上適切ナル時機ニ該踏切遮斷機ヲ閉鎖シ居リシナランニハ判示自動車運轉者ニ右ノ如キ過失アリシトスルモ輒ク判示自動車ノ該踏切乗入レヲ阻止シ得テ本件ノ如キ事故ノ發生ヲ未然ニ防止シ得ヘカリシコトハ以上説示ニ依リ明カナルヲ以テ右山口健男ニ如上ノ過失アリトノ一事ヲ以テ被告人ノ過失責任ヲ免除スヘキニ非サルコトハ論ナキトコロト謂ハサルヘカラス

仍テ判示事實ハ總テ其ノ證明十分ナリトス
法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中松本チヨウニ對スル業務上過失致死川崎タマ外二十數名ニ對スル各業務上過失傷害ノ點ハ孰レモ刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情最モ重キ業務上過失致死罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮三月ニ處スヘク訴訟費用中主文第二項記載ノ分ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十二月二十四日

〇〇地方裁判所刑事部

一九九 業務上過失致死

判決

本籍並住居 廣島縣安藝郡坂村四千六百十九番地ノ二

鐵道踏切警手

山根福松

明治三十年二月十四日生

本籍 同縣豐田郡入野村二千七百七十八番地ノ三

住居 吳市三城通二丁目窪田光太郎方

鐵道踏切警手

大畑利夫

大正九年三月二十六日生

右者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付昭和十五年十月十四日吳區裁判所ノ言渡シタル有罪判決ニ對シ各被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人山根福松ヲ罰金七十圓ニ同大畑利夫ヲ同五十圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間各被告人ヲ勞役場ニ留置ス

訴訟費用ハ全部被告人兩名ノ負擔トス

理由

被告人兩名ハ孰レモ廣島鐵道局踏切警手トシテ吳市西本通三丁目ナル廣島保線區吳線路分區第三兩城踏切ニ勤務シ昭和十五年一月五日午後八時ヨリ同踏切ニ於テ勤務ニ就キ定刻ヨリ六分半遲レテ吳驛ヲ發車シ約一分後該踏切ヲ通過ス

一九九 業務上過失致死

七〇五

ル定刻同九時四十分吳驛發下り第一二九號列車ヲ警戒シ居リシカスル場合鐵道踏切警手タルモノハ互ニ相協力シテ
 (一)遲滞ナク遮斷機ヲ閉鎖シ通行人車馬ノ往來ヲ阻止シ踏切内ニ立入ル者ナキ様嚴ニ警戒ヲ爲シ (二)殊ニ一旦閉鎖
 シタル遮斷機ヲ開放シテ人車馬ノ通行ヲ許スニ際リテハ周到緻密ナル注意ヲ以テ列車ノ完全ニ通過セルコト若クハ列
 車通過迄ニ十分ノ時間的餘裕存シ危險發生ノ虞ナキコトヲ確認シタル上ニ於テ之ヲ爲スヘク (三)其ノ原因ノ如何ヲ
 問ハス萬一踏切軌道上ニ事故發生ノ危險顯著ナル事態發生スルニ及ヒテハ沈著冷靜ナル判斷ヲ持シ臨機應變不慮ノ災
 害ノ發生ヲ未然ニ防止スル爲機宜ノ措置ニ出ツヘキ業務上ノ注意義務アルモノト言ハサルヘカラス然ルニ被告人等ハ
 敘上ノ注意ヲ怠リ普通吳驛ヨリ發車信號アレハ(列車ハ吳驛ヲ發車シ同踏切迄約一分近クヲ要ス)直チニ遮斷機ヲ降
 下スル等警戒ニ着手スヘキ業態ナリシニ拘ラス尠モ右時間ヲ十秒餘遲レテ被告人山根ニ於テ把手ヲ操作シテ遮斷機ヲ
 降下シ被告人大畑ニ於テ通行人車馬ニ對スル警戒ニ當リ居リシ折柄偶々吳市海岸通方面ヨリ同踏切ヘ向ヒ接近シ來レ
 ル細美憲三操縦ノ沿岸自動車株式會社ノ乗合自動車ヲ認ムルヤ被告人山根ニ於テ該自動車ヲシテ同踏切ヲ通過セシム
 ル餘裕アリト輕信シ被告人山根ニ於テ右列車カ既ニ同踏切ヘ接近シ來ル虞ナキヤ否ヤヲ確認スルコトナクシテ漫然遮
 斷機ヲ開放シタル爲細美憲三ニ於テ右自動車ヲ踏切内ヘ乗入ルルニ及ヒテ前記列車ノ間近ニ進行シ來ルヲ覺知シ急遽
 狼狽シテ再ヒ遮斷機ヲ閉鎖シ爲ニ右自動車ハ進退ノ自由ヲ失ヒ其ノ儘踏切中央鐵道線路上ニ停車スルノ已ムナキニ至
 レリ事茲ニ至リテハ危險切迫セルヲ以テ被告人等ハ相協力シテ他ノ通行人車馬等ヲ警戒シツ、(殊ニ當時通行人車馬
 ナシ)臨機遮斷機ヲ開放シ自動車運轉手ニ呼掛ケ危險ニ瀕セル該自動車ヲシテ踏切外ニ脱出セシムル等機宜ノ措置ヲ
 執リ災害ノ發生ヲ未然ニ防止スル方途ヲ講スヘキニ拘ラス事茲ニモ出テス以テ業務上必要ナル注意ヲ重ネテ怠リ徒ニ

狼狽シ被告人大畑ニ於テ信號燈ヲ以テ列車ニ對シ急停車ヲ求メタルモ及ハス右列車ハ惰力ヲ以テ進行ヲ續ケ右自動車
 ニ衝突シ因テ其ノ乗客北村照ヲシテ右自動車前輪ノ下敷トナシ右胸部挫傷肋骨々折兼内臟損傷ヲ負ハシメ同日午後十
 時二十分頃同市藏本通七丁目一番地醫師大矢正己方ニ於テ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ。

證據ヲ按スルニ被告人等ニ業務上判示内容ノ注意義務アル點ヲ除キ其ノ餘ノ判示事實ハ

- 一、被告人等ノ當公廷ニ於ケル同人等ハ十分ナル警戒ノ下ニ所定ノ時間ニ遮斷機ヲ閉鎖スヘク操作シ且踏切ヲ警戒中ナリシニ拘
 ラス細美憲三ニ於テ右警戒ヲ無視シテ其ノ運轉セル自動車ヲ踏切内ヘ乗入レタル爲該自動車ハ自ラ進退不能ニ陥リ不慮ノ結果
 ヲ發生シタルモノニシテ本件事故ノ發生ハ判示ノ如キ被告人等ノ業務上過失ニ基因セルモノニ非ル旨辯疏スル外判示同趣旨並
 下リ列車ハ吳驛ヨリ發車信號ベルアリシ後約一分ニシテ判示第三兩城踏切ヲ通過スルヲ常トシ右信號アリシ時ハ必ス遮斷機ノ
 下降操作ヲ爲シ居リ判示日時ニ於テモ山根ニ於テ遮斷機ノ下降操作ヲ爲シタルカ遮斷機ニハ何等ノ故障ナク平素ノ如ク七、八
 秒ニテ降シ得ラレ尙本件事故發生當時其ノ現場ニハ他ニ通行ノ人車馬等ナカリシ旨ノ供述

一、當審公廷外ニ於ケル證人細美憲三ニ對スル訊問調書中同人ノ竝原審第一回公判調書中被告人細美憲三ノ各供述トシテ自分ハ
 昭和十五年十一月十七日迄吳市沿岸自動車株式會社ノ運轉手ヲ爲シ居リ判示日時頃吳市畑町ヘ向ケ乗合自動車ヲ運轉シテ判示
 第三兩城踏切ヘ差蒐リタルカ其ノ踏切ニ至ル百米位手前ニテ遮斷機ノ降り居ルヲ認メ速力ヲ落シテ徐行シ踏切直前ニ於テハ殆
 ト停車スル情態トナリタリ其ノ際遮斷機カ急ニ昇リシ故自分ハ通過シ得ルモノト思ヒエンヂンヲ掛ケ踏切内ヘ乗入レシトコロ
 突然遮斷機カ再ヒ降りタレハ吃驚シテブレーキヲ掛ケ停車シタリ其ノ瞬間列車カ進行シ來リ自動車ノ前横ヘ衝突シテ急停車シ
 其ノ爲ニ自動車ハ危ク顛覆ハ免レシカ反動ニテ吉浦ノ方ヘ向ヲ變ヘ乗客ハ一人ノ女客ヲ殘シ全部下車シ居リ自分モ降りテ見タ
 ルトコロ一人ノ男カ自動車ノ前輪ノタイヤノ下敷トナリ居タルヲ以テ其ノ場ニ居合セタル人々ト協力シテ其ノ男ヲ救ヒ出シ

一、當審公廷外ニ於ケル證人中河原佳司ニ對スル訊問調書中同人ノ供述トシテ自分ハ昭和十五年一月五日午後九時三十分頃吳驛へ赴ク爲同市西本通三丁目第三兩城踏切東北ノ藝南電鐵乗場安全地帯ニ於テ電車ヲ待合セ居タルカ當夜ハ寒カリシ爲人ノ通行車馬ノ往來孰レモ稀ニテ電車ハ容易ニ來ラス自分ハ汽車ノ時間ニ遅ル、コトヲ慮レバスカ來ラハ乗ラント思ヒ心焦リツツ踏切ヲ距テ、西本通一丁目ノ方ヲ注視シ居タリ其ノ折右踏切ヲ汽車カ通過スルヲシテ遮斷機カ降りタルトコロ間モナク沿岸バスノ自動車カ一臺相當ノ速力ニテ進行シ來リ踏切前迄來ルヤ速力ヲ落シテ停車ノ情態ニナリ一息シタリト思フ頃遮斷機カ昇リ掛ケタレハ自分ハ列車通過迄ニ猶餘裕アル爲好意的ニバスヲ通過セシムルモノト思ヒタリバスモ遮斷機ノ昇ルヲ見タル爲カ直ニ動キ出シタルトキ再ヒ遮斷機カ降下シ其ノバスハ線路ノ中ニ立往生スルニ至リシカ其ノ時吳驛方面ヨリ汽車ノ接近シ來ル音カ聞エ間モナク踏切へ現レシ汽車カ右ノバスへ接觸スルニ至レル旨ノ記載

一、倉本富一ニ對スル檢事ノ聽取書中同人ノ供述トシテ自分ハ廣島機關庫勤務ノ機關士ニシテ昭和十五年一月五日午後七時四十分糸崎發廣島行下り第一二九號列車ニ乗務シタルカ同列車ハ吳驛ヲ定刻ノ午後九時四十分ヲ六分半程遅レテ發車シ二河鐵橋中央邊ニテ注意汽笛ヲ吹鳴シ其ノ頃ヨリ時速四十五軒位ニテ進行シ判示第三兩城踏切ノ約八十米手前迄來リシ時同踏切ヲ望見シ得ルニ至リタリ其ノ時同踏切線路上ニ海岸通ノ方ヨリ北ニ向ケバスノ在ルヲ認メタレハ瞬間非常汽笛ヲ吹鳴スルト同時ニ非常制動ノ手配ヲ執リシカ約八十米進行シ右踏切中央邊ニテ該バスノ右側稍、前部ニ衝突シ約三米スリツブシテ停車シタル旨ノ記載

一、岸野武也ニ對スル同聽取書中其ノ供述トシテ自分ハ廣島保線區吳線路分區長ナルカ第三兩城踏切ノ如キハ下り列車カ吳驛ヲ發車スル信號ベルカ鳴リタルトキ遮斷機ヲ降シ右ベルカ鳴ラサルトキハ其ノ踏切ヨリ吳驛ニ近キ第一兩城踏切ノ遮斷機ノ降りルヲ見テ降スヘク吳驛ヨリ第三兩城踏切迄五百八十米ニシテ普通ノ列車ハ一分足ラスニテ到ルヘシ而シテ二河川鐵橋ノ中央邊

ニ列車カ來ルト右踏切ニテ列車ノ接近ヲ知ラスベルカ鳴ル裝置ニナリ居リ右鐵橋ヨリ踏切迄ハ二百米位シカナク右ベルヲ聞キ遮斷機ヲ降スハ遲キ旨ノ記載

一、當審公廷外ニ於ケル檢證調書中判示第三兩城踏切ハ吳市西本通三丁目ニ位シ東西ニ國有鐵道單線路敷設セラレ居リ右線路ハ東方吳驛方面へ向ヒ同踏切地點ヨリ漸次右曲角ヲ爲シ第二兩城踏切警手詰所西南端邊迄見透シ得ラルル情況ニアリ同踏切設置ノ遮斷機ハ目黒式ニシテ同踏切東西兩端ニ線路ヲ挟ミテ各二個宛合計四個在リ此等ハ同踏切北側西北端ナル警手詰所前ニ設置サレタル把手ノ操作ニ依リテ同時ニ上下シ得ル裝置トナリ居レリ而シテ同踏切現場ニ於ケル實驗ノ結果トシテ

(イ) 踏切内ニ自動車(本件自動車ト同一物)ヲ停車セシメ遮斷機ヲ閉鎖シタル情態ヨリ遮斷機ヲ該自動車(車體ノ高さ二米六十釐)ノ通過シ得ル迄ニ上昇セシメ自動車ヲ踏切外へ脱出セシムルト同時ニ再ヒ下降閉鎖スル迄ニ要スル時間十三秒五分四十分

(ロ) 被告人大畑利夫ヲシテ同人カ本件事故當時位置シタリト指示スル地點ヨリ當時列車ニ對スル危險信號ヲ爲シタリト指示スル地點迄當時ノ氣持ヲ以テ當時ト同一線路ヲ經テ走ラシメタルニ要スル時間十秒ニシテ同人カ同地點ニ於テ吳驛午後八時四十二分發下り第一〇七號列車ノヘッドライトヲ認メタル時ヨリ右列車カ第三兩城踏切ヲ通過スル迄ノ所要時間十六秒

(ハ) 被告人山根ヲシテ遮斷機ヲ地上二米九十釐(本件自動車ノ高さヨリ高キコト一尺ナリ)ニ上昇セシメタルニ要スル時間ト其ノ位置ヨリ之ヲ完全ニ下降セシメルニ要シタル時間ハ各六秒合計十二秒ナル旨ノ記載

一、(1)右掲記ノ(ロ)ノ各所要時間十秒ト十六秒(ハ)ノ所要時間十二秒及原審檢證調書ニヨリ認メ得ル本件遮斷機降下操作ニ要スル時間カ九秒ナルコトニ徴シ被告人等カ遮斷機ヲ降下スル等警戒ノ任ニ就キテヨリ列車カ本件踏切ニ到達スル迄要シタル時間カ合計四十七秒内外ナルコトノ明白ナル事實(2)被告人等ノ當公廷ニ於ケル普通列車カ吳驛ヲ發シ右踏切ニ差寬ル迄ニハ約一分ヲ要スル旨ノ各供述ヲ綜合スレハ被告人等カ本件列車ノ警戒ノ任ニ就キタルハ吳驛ヨリノ發車信號ト同時ニアラス約十秒以

上遅レ居タルモノト推認シ得ル事實

七一〇

一、醫師大矢正巳作成ノ北村照ニ對スル診斷書中昭和十五年一月五日午後十時頃同人ノ身體ニ付診斷セルニ判示ニ吻合スル各部位ニ判示ノ如キ各創傷アリテ種々救急療法ヲ試ミシモ效ナク同十時二十分頃胸腹部内臟特ニ肝臟ノ破裂ニ因リ絶命シタル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認ム而シテ鐵道踏切警手タルモノハ判示前段認定ノ如キ事情ノ下ニ於テハ遲滯ナク遮斷機ヲ閉鎖スル等踏切警戒ノ任ニ就キ且周到ナル注意ヲ拂ヒ事故發生ノ虞ナキコトヲ十分確認シタル上ニ非レハ一旦閉鎖セル遮斷機ヲ濫ニ開放スヘカラス又判示後段認定ノ如ク自動車ヲ列車ノ正ニ接近シ來ル踏切内ニ停車セシムルカ如キ緊急ノ事態ヲ現出スルニ及ヒテハ沈着機敏ニ臨機ノ措置ヲ執リ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルコト修理上當然ニシテ本件ニ於テ被告人等カ平常ノ如ク發車信號ト同時ニ警戒ノ任ニ就キ被告人山根ニ於テ一旦閉鎖セル遮斷機ヲ開放スルニ際リ周到ナル注意ヲ用ヒタランニハ事故ノ發生ナカリシナルヘク更ニ自動車ノ踏切内ニ進入セシトキヨリ列車カ同踏切ニ到達セル迄ノ所要時間ト臨機遮斷機ヲ開放シテ該自動車ヲ踏切外ヘ脱出セムシルニ要スヘキ時間トヲ比較考量セハ被告人等ニ於テ沈着冷靜機宜ノ措置ニ出テハ本件事故ノ發生ヲ未然ニ防止シ得タルヘク被告人等カ絞上ノ注意義務履踐ニ於テ未タ竭ササリシコト前掲證據ニヨリ明白ナルヲ以テ判示北村照ノ死亡ハ被告人等ノ競合セル絞上ノ注意義務懈怠ニ基因セルモノト斷セサルヲ得ス尤モ辯護人ノ提出セル辯第二號證據踏切警手心得ト題スル書面中「踏切及附近線路ニ支障カ起ツタ場合ハ一番先ニ列車ヲ停止スル手配ヲスルコト」ト掲記セラレ居リテ本件ニ於ケル被告人等ノ措置ハ判示後段ノ注意義務履踐ニ於テ缺クルトコロナカリシニ似タルモ前示ノ如ク被告人等ニ於テ冷靜ニ

機宜ノ措置ニ出テンカ事故發生ノ原因タルヘキ事情ヲ比較的容易ニ除去シ得ヘキ場合ニ於テ猶且之ヲ措キテ列車ヲ停止セシムルノ手配ヲ爲スヲ以テ唯一最善ノ方途ナリト爲スモノトハ解シ難ク原審竝當審各檢證調書ニヨリ明カナルカ如ク本件事故發生ノ現場ヨリ吳驛ヘ向ヒテ鐵道線路ハ曲角ヲ爲シ見透距離七八十米内外ニ過キス驀進シ來ル列車ヲ急停車セシムルモ踏切現場ヘ到達前ニ完全ニ之ヲ停車セシムル效果必シモ期待シ得サル情況下ニ於テ殊ニ然リト謂ハサルヘカラス

然ラハ判示事實ハ凡テ之カ證明アリタルモノトス

法律ニ照スニ被告人兩名ノ判示各所爲ハ夫々刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ其ノ所定金額範圍内ニ於テ被告人兩名ヲ各主文掲記ノ刑ニ處シ右各罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ從ヒ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間各被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人兩名ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十二月二十七日

廣島地方裁判所刑事部

二〇〇 業務上過失致傷、同致死

判決

二〇〇 業務上過失致傷、同致死

七一一

大正七年一月十五日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死傷被告事件ニ付昭和十三年九月十二日廣島區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告入ヨリ控訴ノ申立ヲ爲シタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ禁錮三月ニ處ス

原審ニ於ケル未決勾留日數中參拾五日ヲ右本刑ニ算入ス

理 由

被告人ハ昭和十二年八月二十三日鐵道省廣島保線區八本松線路班線路工事ヲ拜命シ爾來線路ノ保守ヲ爲スト共ニ工手長ノ命ヲ受ケ同管内踏切警手代務者トシテ踏切看守等ノ業務ニ從事中ノ者ナルカ昭和十三年七月二十三日工手長ノ命ニ依リ廣島縣賀茂郡西志和村字七條松坂山陽線八本松驛及瀨野驛間ニ存在スル番堂原第四踏切警手ノ代務者トシテ該踏切看守ノ任務ニ就キタルトコロ同所ハ山峽ニシテ東北(八本松驛方面)ヨリ西南(瀨野驛方面)ニ下リ勾配ヲ爲ス軌道ト東ヨリ西ニ上リ勾配ヲ爲ス幅員約十四尺ノ國道カ交叉シ軌道ハ灣曲シテ附近ノ見透十分ナラス下リ列車(八本松驛ヨリ瀨野驛ニ向フモノ)機關手及國道ヲ西走スル自動車運轉者ハ互ニ他ノ踏切ニ接近シ來ルヲ逸速ク覺知シ急停車等衝突ノ危險ヲ未然ニ防止スルニ適切ナル措置ヲ採ルヲ困難トスルニ依リ踏切警手ノ勤務時間中ハ踏切ニ設置シアル遮

斷機降下シアラサル以上ハ危險ナシト認メテ進行ヲ繼續スル處アルヲ以テ踏切看守ニ當ル者ハ列車通過ノ時刻ニ注意シ其ノ通過ノ定刻前ヨリ踏切ニ到リ線路並行人等ヲ引續キ監視シ適宜備付ノ遮斷機ヲ降下シテ交通ヲ遮斷シ以テ列車ノ通過ニ支障ナカラシムルト共ニ通行人ノ生命身體等ニ對スル危害ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス同日午後三時二十五分通過(定刻午後三時二十分)ノ下リ第一九、二、三等急行列車ノ進行シ來ルニ際シ其ノ定刻十分及五分前ノ二回ニ踏切附近ニ立出テ寸時附近ヲ監視シタルニ止マリ右列車カ阪神地方ノ水害ノ爲ニ、四分遅延スルコトアルモ間モ無ク通過スヘキコトヲ察知シ乍ラ遮斷機ヲ閉鎖セサル儘踏切附近ニ設置シアル番小屋ニ入りテ不覺ニモ假睡シ右列車ノ進行シ來ルヲ覺知セス以テソノ業務ニ必要ナル注意ヲ怠リ因テ右國道ヲ東ヨリ西ニ向ヒ廣第四四一一號貨物自動車ヲ運轉シ同踏切ニ差蒐レル松井政美ヲシテ右列車ノ進行シ來ルニ氣付カス容易ニ之ヲ遮斷シ得ルモノト確信シテ線路内ニ乗入ラシメ折柄時速約六十軒ヲ以テ同所ニ向ヒテ驀進シ來レル前記列車ノ機關士山本拓造ニ於テ踏切ノ東方約五十米ノ地點ニテ線路内ニ乗入レタル該貨物自動車ヲ認メ直チニ急停車ノ處置ヲ施シタルモ既ニ遅ク遂ニ右列車ノ機關車前方「デツキ」ヲ右自動車ノ機關部右側ニ激突シ之ヲ同所西南方約八、九尺下方ノ水田中ニ顛落セシメテ同乗ノ新山兼一(當五十年)ヲ頭部打撲ニ困ル腦震蕩ニ基キ即死セシメ右松井政美(當二十一年)ニ加療約一月ヲ要スル長サ十四種深サ骨膜ニ達スル頭蓋顛頂部裂創等ノ傷害ヲ、同乗ノ新山敏則(當十六年)ニ加療約四週間ヲ要スル左顛顛部裂創等ノ傷害ヲ各負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中業務上ノ過失ニ因リ新山兼一ヲ死ニ致シタル點並松井政美、新山敏則ニ各傷害ヲ負

上遅レ居タルモノト推認シ得ル事實

七一〇

一、醫師大矢正巳作成ノ北村照ニ對スル診斷書中昭和十五年一月五日午後十時頃同人ノ身體ニ付診斷セルニ判示ニ吻合スル各部位ニ判示ノ如キ各創傷アリテ種々救急療法ヲ試シモ效ナク同十時二十分頃胸腹部内臟特ニ肝臟ノ破裂ニ因リ絶命シタル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認ム而シテ鐵道踏切警手タルモノハ判示前段認定ノ如キ事情ノ下ニ於テハ遲滯ナク遮斷機ヲ閉鎖スル等踏切警戒ノ任ニ就キ且周到ナル注意ヲ拂ヒ事故發生ノ虞ナキコトヲ十分確認シタル上ニ非レハ一旦閉鎖セル遮斷機ヲ濫ニ開放スヘカラス又判示後段認定ノ如ク自動車ヲ列車ノ正ニ接近シ來ル踏切内ニ停車セシムルカ如キ緊急ノ事態ヲ現出スルニ及ヒテハ沈着機敏ニ臨機ノ措置ヲ執リ事故ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルコト修理上當然ニシテ本件ニ於テ被告人等カ平常ノ如ク發車信號ト同時ニ警戒ノ任ニ就キ被告人山根ニ於テ一旦閉鎖セル遮斷機ヲ開放スルニ際リ周到ナル注意ヲ用ヒタランニハ事故ノ發生ナカリシナルヘク更ニ自動車ノ踏切内ニ進入セシトキヨリ列車カ同踏切ニ到達セル迄ノ所要時間ト臨機遮斷機ヲ開放シテ該自動車ヲ踏切外ヘ脱出セムシルニ要スヘキ時間トヲ比較考量セハ被告人等ニ於テ沈着冷靜機宜ノ措置ニ出テナハ本件事故ノ發生ヲ未然ニ防止シ得タルヘク被告人等カ救上ノ注意義務履踐ニ於テ未タ竭ササリシコト前掲證據ニヨリ明白ナルヲ以テ判示北村照ノ死亡ハ被告人等ノ競合セル救上ノ注意義務懈怠ニ基因セルモノト斷セサルヲ得ス尤モ辯護人ノ提出セル辯第二號證據踏切警手心得ト題スル書面中「踏切及附近線路ニ支障カ起ツタ場合ハ一番先ニ列車ヲ停止スル手配ヲスルコト」ト掲記セラレ居リテ本件ニ於ケル被告人等ノ措置ハ判示後段ノ注意義務履踐ニ於テ缺クルトコロナカリシニ似タルモ前示ノ如ク被告人等ニ於テ冷靜ニ

機宜ノ措置ニ出テンカ事故發生ノ原因タルヘキ事情ヲ比較的容易ニ除去シ得ヘキ場合ニ於テ猶且之ヲ措キテ列車ヲ停止セシムルノ手配ヲ爲スヲ以テ唯一最善ノ方途ナリト爲スモノトハ解シ難ク原審竝當審各檢證調書ニヨリ明カナルカ如ク本件事故發生ノ現場ヨリ吳驛ヘ向ヒテ鐵道線路ハ曲角ヲ爲シ見透距離七八十米内外ニ過キス驀進シ來ル列車ヲ急停車セシムルモ踏切現場ヘ到達前ニ完全ニ之ヲ停車セシムル效果必シモ期待シ得サル情況下ニ於テ殊ニ然リト謂ハサルヘカラス

然ラハ判示事實ハ凡テ之カ證明アリタルモノトス

法律ニ照スニ被告人兩名ノ判示各所爲ハ夫々刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ其ノ所定金額範圍内ニ於テ被告人兩名ヲ各主文掲記ノ刑ニ處シ右各罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ從ヒ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間各被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人兩名ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十二月二十七日

廣島地方裁判所刑事部

二〇〇 業務上過失致傷、同致死

判決

二〇〇 業務上過失致傷、同致死

七一一

本籍並住居

廣島縣賀茂郡西志和村字七條柵坂四百六十番地

鐵道線路工事

井 上 好 清

大正七年一月十五日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死傷被告事件ニ付昭和十三年九月十二日廣島區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ
被告人ヨリ控訴ノ申立ヲ爲シタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ禁錮三月ニ處ス

原審ニ於ケル未決勾留日數中參拾五日ヲ右本刑ニ算入ス

理 由

被告人ハ昭和十二年八月二十三日鐵道省廣島保線區八本松線路班線路工事ヲ拜命シ爾來線路ノ保守ヲ爲スト共ニ工手
長ノ命ヲ受ケ同管内踏切警手代務者トシテ踏切看守等ノ業務ニ從事中ノ者ナルカ昭和十三年七月二十三日工手長ノ命
ニ依リ廣島縣賀茂郡西志和村字七條柵坂山陽線八本松驛及瀨野驛間ニ存在スル番堂原第四踏切警手ノ代務者トシテ該
踏切看守ノ任務ニ就キタルトコロ同所ハ山峽ニシテ東北(八本松驛方面)ヨリ西南(瀨野驛方面)ニ下リ勾配ヲ爲ス軌道
ト東ヨリ西ニ上リ勾配ヲ爲ス幅員約十四尺ノ國道カ交叉シ軌道ハ灣曲シテ附近ノ見透十分ナラス下リ列車(八本松驛
ヨリ瀨野驛ニ向フモノ)機關手及國道ヲ西走スル自動車運轉者ハ互ニ他ノ踏切ニ接近シ來ルヲ逸速ク覺知シ急停車等
衝突ノ危險ヲ未然ニ防止スルニ適切ナル措置ヲ採ルヲ困難トスルニ依リ踏切警手ノ勤務時間中ハ踏切ニ設置シアル遮

斷機降下シアラサル以上ハ危險ナシト認メテ進行ヲ繼續スル虞アルヲ以テ踏切看守ニ當ル者ハ列車通過ノ時刻ニ注意
シ其ノ通過ノ定刻前ヨリ踏切ニ到リ線路並行人等ヲ引續キ監視シ適宜備付ノ遮斷機ヲ降下シテ交通ヲ遮斷シ以テ列
車ノ通過ニ支障ナカラシムルト共ニ通行人ノ生命身體等ニ對スル危害ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務ア
ルニ拘ラス同日午後三時二十五分通過(定刻午後三時二十分)ノ下リ第一九、二、三等急行列車ノ進行シ來ルニ際シ其
ノ定刻十分及五分前ノ二回ニ踏切附近ニ立出テ寸時附近ヲ監視シタルニ止マリ右列車カ阪神地方ノ水害ノ爲三、四分
遅延スルコトアルモ間モ無ク通過スヘキコトヲ察知シ乍ラ遮斷機ヲ閉鎖セサル儘踏切附近ニ設置シアル番小屋ニ入り
テ不覺ニモ假睡シ右列車ノ進行シ來ルヲ覺知セス以テソノ業務ニ必要ナル注意ヲ怠リ因テ右國道ヲ東ヨリ西ニ向ヒ廣
第四四一一號貨物自動車ヲ運轉シ同踏切ニ差蒐レル松井政美ヲシテ右列車ノ進行シ來ルニ氣付カス容易ニ之ヲ横斷シ
得ルモノト確信シテ線路内ニ乗入ラシメ折柄時速約六十軒ヲ以テ同所ニ向ヒテ驀進シ來レル前記列車ノ機關士山本拓
造ニ於テ踏切ノ東方約五十米ノ地點ニテ線路内ニ乗入レタル該貨物自動車ヲ認メ直チニ急停車ノ處置ヲ施シタルモ既
ニ遅ク遂ニ右列車ノ機關車前方「デツキ」ヲ右自動車ノ機關部右側ニ激突シ之ヲ同所西南方約八、九尺下方ノ水田中ニ
顛落セシメテ同乗ノ新山兼一(當五十年)ヲ頭部打撲ニ困ル腦震蕩ニ基キ即死セシメ右松井政美(當二十一年)ニ加療約
一月ヲ要スル長サ十四樞深サ骨膜ニ達スル頭蓋顛頂部裂創等ノ傷害ヲ、同乗ノ新山敏則(當十六年)ニ加療約四週間ヲ
要スル左顛顛部裂創等ノ傷害ヲ各負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中業務上ノ過失ニ因リ新山兼一ヲ死ニ致シタル點並松井政美、新山敏則ニ各傷害ヲ負

ハシメタル點ハ各刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ以上ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ル、場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ犯情重シト認ムル新山兼一ニ對スル業務上過失致死罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ所定期刑範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮三月ニ處シ尙同法第二十一條ヲ適用シ原審ニ於ケル未決勾留日數中三十五日ヲ右本刑ニ算入スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十三年十月三日

廣島地方裁判所刑事部

二〇一 業務上過失致傷、同致死

判決

本籍並住居 長崎縣諫早市原口名五百三十八番地ノ一

踏切看守人

立川シチ

明治十九年十二月十七日生

本籍並住居

長崎縣島原市千百六十一番地

機關手兼運轉手

藤本八百喜

明治二十八年四月十五日生

本籍並住居

長崎縣諫早市船津名三百二十六番地

自動車運轉手

宮崎逸美

大正八年九月二十八日生

右者等ニ對スル業務上過失致傷、同過失致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルト左ノ如シ

主文

被告人立川シチヲ禁錮六月ニ被告人藤本八百喜及被告人宮崎逸美ヲ各禁錮四月ニ處ス

理由

被告人立川シチハ島原鐵道株式會社踏切看守人、被告人藤本八百喜ハ同會社機關手兼運轉手、被告人宮崎逸美ハ西肥自動車株式會社乗合自動車運轉手ナルトコロ

第一、被告人立川シチハ昭和十六年一月二十六日島原鐵道諫早市上門口踏切ニ於テ踏切看守勤務中定刻ヨリ約十六分後レテ同日午後六時五分頃被告人藤本八百喜ノ運轉セル島原鐵道株式會社ガソリンカー第一〇一號カ小野村驛ヨリ本諫早驛ニ向ヒ同踏切ヲ通過スルニ際リ該踏切ヲ看守シテ同所ヲ往來スル一般通行人及車馬ノ交通ヲ遮斷シ未然ニ危害ノ發生ヲ防止スルト共ニガソリンカーヲシテ安全ニ踏切通過ヲ爲サシムル義務アリ且ツ之ヲ果シナハ優ニ衝突ヲ防止シ得タルニモ拘ラス偶々豫定ノ時刻ニ列車カ進行シ來ラサルヨリ列車ノ進行シ來ルマテニハ尙相當時間ノ餘裕アルヘシト速斷シ自家ニ立歸リ夕食後ノ片附ヲ爲シテ如上措置ニ出テサリシ爲前同時刻過頃ニ前同踏切ニ進行シ來リタル前記ガソリンカー(乗客約八十名)ト同時刻頃ニ同踏切ヲ通過セントシテ差蒐リタル被告人宮崎逸美ノ運轉

1101 業務上過失致傷、同致死

ニ係ル乗合自動車(乗客約三十名)トヲ其ノ場ニ於テ衝突スルニ至ラシメ

第二、被告人藤本八百喜ハ前記午後六時五分頃乗客約八十名ヲ搭載シタル前記ガソリンカーヲ運轉シテ小野村驛ヨリ本諫早驛ニ向ヒ進行ノ途中前記踏切ニ到ル手前約四百三十九尺ノ地點附近ヨリ同踏切ニ至ル迄ノ間ハ鐵道線路ノ屈曲多ク而モ數個ノ踏切サエ近接散在スル特殊狀況ノ場所ナルヲ以テ平素ヨリ該場所ニ差蒐リタルトキハ列車ノ速度ヲ減退シ徐行ニ移スト共ニ警笛ヲ連續吹鳴スルハ勿論前記四百三十九尺ノ地點ヨリハ優ニ前記上門口踏切ノ遮斷機ヲ望見シ得ルヲ以テ之カ開閉ヲ望見スルニ努メ若シ該遮斷機ノ開放ノ儘ナルヲ認メナハ同踏切ニ於テ何等カ異變ノ發現シ居ルモノト豫想シ更ニ一層慎重ノ注意ヲ拂ツテ何時ニテモ同踏切手前ニ於テ停車シ得ルニ足ル措置ヲ講シテ徐々ニ進行スルト共ニ警笛ヲ間斷ナク吹鳴シテ踏切看守人ノ注意ヲ喚起シ且ツ踏切通行者ニ警戒ヲ與ヘ以テ危害ノ發生ヲ未然ニ防止スル義務アリ且ツ之ヲ果シナハ優ニ衝突ヲ避ケ得タルニモ拘ラス小野村驛ヲ發車シタル際既ニ定刻ヨリ約十六分遅延シ居リタル爲之ヲ取戻サントシテ時速約三十五軒ノ速度ヲ以テ進行シ來リ前記四百三十九尺ノ地點ニ差蒐リタルトキ如上措置ニ出テスシテ尙前同一ノ速度ヲ以テ進行ヲ續ケ漸ク前同踏切手前約九十六尺ノ地點ニ差蒐リタル際突如貨物自動車カ同踏切ヲ横斷スルヲ認メテ初メテ該踏切ノ遮斷機カ開放サレ居ルニ氣付キ茲ニ速度ヲ僅ニ時速二十五軒ニ減減シ警笛ヲ三回吹鳴シタルニ止マリ而シテ間モナク該自動車ノ通過シ了ルヲ認ムルヤ最早後發ノ危險ナシト速斷シ漫然又モヤ時速二十八軒ノ速度ニ復活シ而モ警笛ヲモ吹鳴セスシテ進行シタル爲同踏切手前約五十三尺ノ地點ニ於テ又復タ被告人宮崎逸美ノ運轉ニ係ル乗合自動車カ同踏切ヲ横斷セムトスルヲ認メテ惶惶急停車ノ處置ニ出テムトシタルモ狼狽ノ結果漸ク同踏切手前僅々約一間ノ所ニ於テ急停車ノ措置ヲ講シタルモ

已ニ及ハスシテ前記時刻過頃前同所ニ於テ自己運轉ノ前記ガソリンカーノ前面左半部ヲ前記自動車ノ左側後半部ニ衝突スルニ至ラシメ

第三、被告人宮崎逸美ハ前記時刻頃約三十名ノ乗客ヲ搭載シタル西肥自動車株式會社乗合自動車ヲ運轉シ時速約十四軒ノ速度ニテ前記上門口踏切ニ差蒐リタル際約二十間前方ヲ同一方向ニ向ヒ進行シ居リタル貨物自動車一臺カ同踏切ヲ横斷通過シタルヲ認メタルモ同所踏切看守人ノ姿ヲ認メサルヲ以テ遮斷機コソ依然開放ノ儘ナルヲ認メタリト雖モ遮斷機ハ往々故障アルヲ免レス且ツ又看守人怠慢ノ爲遮斷機ノ開放サレ居ル場合ナキヲ保シ難キヲ以テ斯カル場合踏切ヲ横斷通過セントスルニ先チテハ必ス踏切手前ニ於テ一旦自動車ノ進行ヲ停止シ又ハ徐行シテ左右鐵道線路上ヲ見透シ其ノ他通過ニ危険ナキコトヲ確認シタル上横斷スヘキ義務アリ且ツ之ヲ果シナハ優ニ衝突ヲ防止シ得タルニモ拘ラス前方進行ノ貨物自動車カ踏切ヲ横斷通過シタル一事ヲ以テ漫然安全ナリト輕信シ毫モ如上ノ措置ニ出テスシテ漫然前同一ノ速度ニテ前記踏切ヲ横斷セント企テ鐵道線路上ニ進入シタル爲其ノ利那ニ於テ自己運轉ノ自動車ノ左側後半部ニ前記ガソリンカーノ前面左半部ヲ衝突スルニ至ラシメ

因テ被告人三名ノ如上業務上過失ノ競合ニ基キ衝突ヲ招キテ其ノ際前記乗合自動車ノ乗客後田ツゲノ外七名ニ腦底骨折等ノ傷害ヲ負ハシメ之ニ因リ同人等ヲ死亡セシメ馬場八重子外二十數名ニ重輕傷ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人シチ、同八百喜及同逸美ノ各判示所爲ハ孰レモ刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人シチヲ禁錮六月ニ同八百喜、及同逸美ヲ夫々禁錮四月ニ處スヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年二月二十四日

七一八

大村區裁判所

二〇二 業務上過失船舶覆没、業務上過失致死

判決

本籍 廣島縣佐伯郡沖村大字岡大王五百三十九番地
住居 廣島市西地方町三十番地
船員

北山俊造

明治三十二年七月十四日生

右ノ者ニ對スル業務上過失船舶覆没、業務上過失致死被告事件ニ付昭和十四年一月二十六日廣島區裁判所カ言渡シタル有罪ノ判決ニ對シ原審檢事並被告人ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ禁錮五月ニ處ス

原審並當審ニ於ケル訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

理由

被告人ハ數年前沿岸乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受ケ爾來瀬戸内海ヲ航行スル發動機船ノ船長ヲ爲シ來リ昭和九年頃廣島縣安藝郡江田島村江田島汽船株式會社ニ雇ハレ昭和十二年七月頃ヨリ同會社所有ノ發動機船綠丸(總噸數一四噸四九)ノ船長トシテ廣島市宇品港ト廣島縣佐伯郡大柿町大君港間及同港ト吳市川原石港間ノ定期旅客運送ノ業務ニ從事シ居タルモノニシテ昭和十三年一月二日モ平素ノ如ク午後三時三十分頃宇品港ニ入港シタル上午後四時頃同港ヲ發シ第一寄港地タル廣島縣安藝郡江田島村切串港ニ向ハントシタルカ同日ハ朝來曇天ニシテ時折小雪アリ午前十時五十分ニハ廣島測候所ヨリ「沿岸部北西ノ風強シ」トノ氣象特報發セラレ、正午頃ヨリ秒速十米内外ノ西北西又ハ西ノ風吹キ荒ヒ、午後四時頃ニハ風力稍衰ヘタリト雖モ海上ニハ尙相當ナル強風アリ、又右宇品港ヨリ切串港ニ至ル航路ノ内宇品島南端ト似島北端トノ間ハ地勢上西又ハ西北風ヲ遮ルモノ存在セサル爲平素ヨリ風浪一入烈シク殊ニ落潮ノ際ハ西方ヨリ來ル風ト西ニ向ハントスル潮流トカ相激シ海面ニハ俗ニ「サヤ波」ト稱スル波浪立騒クコトアリテ同航路中ノ最難所ト目セラレ居リ被告人ニ於テモ同日午後三時三十分頃前記ノ如ク宇品港ニ入港シタル際宇品警察署ノ屋上ニ掲出セラレタル氣象特報ノ標識ヲ認メ且ツ當日ハ午後四時過頃カ干潮時ニ當リタル爲當時前叙ノ如キ強風ト相俟ツテ宇品港沖合海面ハ波頭白ク碎ケ「サヤ波」生シ居ルコトヲ承知シ居タルノミナラス、前記綠丸ハ船體ノ重心比較的上位ニアル爲其ノ復原力弱キコトモ熟知シ又其ノ前日ハ元旦ニテ休航シタル故例年ノ經驗上其ノ日ノ船客ハ相當多數ニ上ルヘシト推測シ居タル程ナルヲ以テ斯カル場合其ノ船長タルモノハ須ク風位、風速、波浪、周圍ノ地勢等ニ注意シ場合ニ依リテハ航海ヲ一時中止スルカ然ラストスルモ豫メ乗船者ノ人員ヲ十分ニ調査シ苟モ定員ヲ著シク超過スルカ如キコトナ

二〇二 業務上過失船舶覆没、業務上過失致死

七一八

キ様其ノ制限ヲ爲スハ勿論船體ノ傾斜又ハ動搖ニ應シテ適宜船客ノ整理ヲ爲シ以テ極力船體ノ平衡保持ニ努ムルト共ニ右字品島南方地點ヲ航行スルニハ風波ヲ船首ヨリ右舷四點以內ニ受クル様進路ヲ(イ)金輪島東側ニ採リ同島南端ニ竝行スル頃ヨリ峠島ニ向ヒテ進ミ其ノ北方ニ至リテ始メテ東南方ニ向フカ(ロ)先ツ金輪島西側ニ近接シテ進ミタル後似島北端ニ向ヒ同島ト峠島トノ中間北方地點ニ至リテ東南方ニ轉スルカ(ハ)字品島南端ニ竝行スル頃ヨリ徐々ニ右轉シ似島北方迄進ミタル後東南方ニ向フ等所謂縫航々法(但シ右(イ)及(ロ)ノ航路ヲ航行スルニハ豫メ陸軍運輸部長ノ許可ヲ要スルモ臨時ニ航行スルトキハ容易ニ其ノ許可ヲ受ケ得ルモノナリ)ヲ採リテ航進スヘク假ニ普通航路ヲ進ミタル場合ト雖モ若シ字品島南端ヲ過キ風浪共ニ烈シキ地點ニ差蒐リ右舷ニ大浪ヲ受ケテ船體著シク左舷ニ傾斜シタル場合ニ於テハ次ニ來ルヘキ風浪ニ備ヘ迅速ニ船首ヲ左轉スルト共ニ船員ヲ督勵シテ救命具ノ用意ヲ爲サシメ或ハ船客ニ警告シテ避難ノ準備ヲ爲サシムル等船舶及乗員ノ安全ヲ期スル爲萬全ノ處置ヲ講スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ漫然格別ノ危險無カルヘシト輕信シ其ノ航海ヲ中止セサリシノミナラス船客ノ人員調査スラ爲サス定員四十五名ノ右綠丸ニ大小人合計八十一名ノ客ヲ載セ(船員ハ定員五名ノトコロ四名乗組)テ出航シ剩ヘ船客ノ整理、進路ノ變更其ノ他船上ノ如キ適宜ノ運航方法ヲ採ラス普通航路ヲ船體稍左ニ傾キタル儘時速七哩半ノ速度ニテ進航シタルトコロ字品島南端ヲ通過スルヤ果然強烈ナル風ヲ其ノ右舷ニ受ケテ波浪亦高カリシニ之ヲ顧慮セス依然同速度ヲ以テ難航ヲ續ケ居ル内同日午後四時十五分頃字品港沖合同港大阪船株式會社棧橋ヨリ南方約三千米ニシテ字品島、金輪島、峠島、似島ノ略中間ノ海上ニ到リタル際右舷ニ大浪ヲ受ケテ船體ハ一層左側ニ傾キ覆没ノ危險ニ瀕シタルニ被告人ハ尙モ其ノ間救命具ノ用意、船客ニ對スル警告等避難準備ノ爲適切ナル措置ヲ採ラス船體ヲ立直サントシテ急

遽舵ヲ右ニ切リタル爲船體ハ更ニ大キク左舷ニ傾キタルトコロ重ネテ右舷ニ突風ヲ受ケタルヲ以テ益々傾斜シ遂ニ左舷ヨリ浸水ノ結果瞬時ニシテ右地點ニ於テ沈没シ因テ船客高橋渡平外四十一名及船員竹本貫一ヲシテ溺死スルニ至ラシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ

敘上事實中船長ニ判示ノ如キ業務上ノ注意義務アルコトヲ除ク其ノ餘ノ事實ハ

一、被告人ノ當公廷ニ於ケル判示綠丸ノ覆没シタルハ不可抗力ニシテ自分ノ過失ニ因ルモノニ非サル旨辯疏スル外風速ノ點ヲ除キ判示同趣旨並綠丸ノ船體及機關部等ニハ遭難當時何等故障ナカリシ旨ノ供述

一、當審第三回公判調書中證人高呂富吉ノ供述トシテ自分ハ明治四十一年十一月乙種二等運轉士ノ免狀ヲ受ケ爾來引續キ陸軍運輸部ニ勤務シ居ルニヨリ廣島灣ニ於ケル潮流、淺瀬、暗礁等航海上注意ヲ要スル點ハ良ク承知シ居ルカ字品港ヨリ切串港ニ向フ航路ノ内字品島ノ南端ト似島ノ北端間ハ島嶼等ノナキ關係上西方又ハ西北方ヨリ吹キ來ル風ノ爲何時モ波力高ク、ソレニ西ニ向フ引潮ノ際其ノ潮流カ右兩島間ニテ風ノ爲ニ起ル波ト相接シテ大浪立チ海上カ荒ルルコトニナルカ斯ル場合ハ字品ノ陸上ニテモ字品港外ハ波ノ爲ニ東西ニ白線ヲ引キタル如ク望見シ得ラルルニヨリ海上ノ荒レ居ルコトハ直ニ判明スル次第ニシテ其ノ附近ヲ航海スル船長ハ良ク右事實ヲ知り居ル筈ナリ又昭和十三年一月二日ハ朝來相當強キ西北又ハ西ノ風吹キ時々小雪ヤ雨アリテ海上ハ波浪激シク午前十時五十分ニハ氣象特報發セラレタル狀況ニテ運輸部ニテハ午前十時頃以降危險ノ虞アリタル故五十噸以下ノ船ハ字品港沖合ニ出サヌ様ニ致シタルカ同日ハ陰曆十二月一日ニ該日午後四時過頃カ千潮ナリシ關係上午後四時頃ニハ字品港沖合ハ風ト潮ノ爲白浪立チテ荒レ居ルコトカ字品ノ岸カラモ看取シ得ラレタル旨ノ記載

一、原審第二回公判調書中證人金川治三郎ノ供述トシテ自分ハ昭和五年十月以來廣島測候所長ヲ致シ居ルモノナルカ昭和十三年

一月二日ハ低氣壓カ日本海ニ在リ北日本ヲ横斷シテ太平洋ニ出タルヨリ西北ノ風強ク午前十時五十分ニハ氣象特報ヲ發シタル旨並當日ノ風ノ方向速力等ハ曩ニ廣島測候所ヨリ廣島地方裁判所檢事局ニ電話ヲ以テ報告セル如クナルカ該風速ハ各表示時刻ノ二十分以前ヨリ表示時刻迄ノ平均秒速ニシテ同日午後四時ヨリ五時迄ノ間ニ強キ瞬間風速ハナク又同日午後四時五十四分三秒ニ人體ニ感スル程度ノ地震アリタルモ震源地ハ岡山縣阿哲郡ナルヲ以テ之カ爲宇品港ニ大津浪ノ起キシ様ナコトハナカリシ旨ノ記載

一、廣島測候所ヨリ廣島地方裁判所檢事局宛電話報告書(第四丁以下)中昭和十三年一月二日正午西南西ノ風一〇、二米午後一時西北西ノ風一〇、六米、同二時西ノ風八、八米、同三時北々西ノ風一三、一米、尙四時西北西ノ風六、七米同五時西ノ風六、五米ナル旨ノ記載

一、司法警察官代理ノ山本虎雄ニ對スル聽取書(第四七丁以下)中其ノ供述トシテ自分ハ廣島市宇品町ノ宮友本店ニ勤務シ能美、江田島線、吳線ノ巡航船ニ對スル切符ノ發賣係ヲ致シ居ルカ右航路ヲ運航スル船ハ判示綠丸ノ外第一千代丸、第二千代丸、吳丸、第五切串丸、博丸、第一博丸、豊丸等ニシテ毎日十回宇品ヲ發航シ居リ判示日時ニハ午後四時ニ綠丸カ發航スル番ナリシカ自分カ其ノ前即チ二時三十分ニ出航セル船ヨリ四時ノ綠丸迄ニ發賣シタル切符ハ四、五十枚ナリシモ切符ハ前二買ヒタル人モアリ切符ハ買ヒテモ後刻ノ船ニ乗ル人モアリ或ハ往復切符ノ復航券ヲ所持セル者モアルニヨリ切符ノ發賣數ト乗船者トハ必スシモ一致セス船ノ定員ニ付テハ船長ノ方ニテ適當ニ處理シ居ル故自分ノ方ニテハ定員ノ點ヲ顧慮スルコトナク切符ヲ發賣シ特ニ客ニ對シ此ノ船ハ人員過剩ニナル故次ノ船迄待ツテ吳レト注意ヲ與フルカ如キコトハ爲ササル旨ノ記載

一、檢事ノ第二回檢證調書(第二五二丁以下)中昭和十三年一月三日前日ニ引續キ宇品港沖合ノ海上ノ檢證ヲ爲スニ事故現場ハ判示ノ如キ地點ニシテ元宇品南端ト似島トノ間ニ於テ西北方及東南方ニハ陸地ナキ爲同方面ノ風當リ最モ強キ箇所ナル旨ノ記載

一、鑑定人香川卓二作成ニ係ル鑑定書(第三八二丁以下)中鑑定人カ昭和十三年一月二日午後十時頃ヨリ同月八日ニ至ル迄五回ニ亙リ宇品警察署外一箇所ニ於テ檢屍シタル四十一個ノ屍(別紙被害者名簿列記ノ被害者中下荒地美智子、前川友市ノ兩名ヲ除キタル以外ノ者但シ同鑑定書中松脇タツミハ松脇カツ子ノ、松脇チヨノハ松脇キヨノノ、空廉造ハ空廉藏ノ、横西甲太郎ハ横西公太郎ノ各誤記ト認ム)ハ何レモ溺死屍ニシテ死後鑑定時迄六時間乃至數日間ヲ經過セルモノナル旨ノ記載

一、醫師西村節士提出ニ係ル前川友市及下荒地美智子ニ對スル各死體檢案書(第三三二丁及第三三三丁)中夫々昭和十三年一月五日檢案スルニ右兩名ハ何レモ溺死者ニシテ夫々死後數十時間ヲ經過セルコトヲ確認スル旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認メ

旅客運送ニ從事スル判示ノ如キ小機船ノ船長ニハ判示ノ如キ業務上ノ注意義務アルコトハ

一、海上ヲ航行スル小型船舶ハ風浪ヨリ蒙ル危險甚タ大ニシテ殊ニ旅客ヲ運送スル船舶ニ在リテハ一度事故ノ發生センカ其ノ被害僅少ニ止マラサル顯著ナル事實

一、檢事ノ囑託ニ基キ渡邊四郎作成ニ係ル鑑定書中判示綠丸ハ空貨狀態ニ於テモ一般汽船ニ比シ復原力大ナラサルモノナルカ其ノ遭難當時ノ天候ノ下ニ在リテハ之ヲ冒シ航行スルコトハ復原力比較的大ナル船ニテモ小型汽船トシテハ相當危險ナルヲ以テ況ヤ前記ノ如キ綠丸カ乗客過剩ノ爲著シク安全率ヲ低下シ且出帆ノ際左舷側ニ幾分傾斜シ居ル狀態ニテ右舷側正横ニ秒速十米位ノ風壓及相當隆起セル波浪ヲ受ケテ航海スルコトハ甚タ危險ニシテ安全ナル航海ハ期シ難シ從テ其ノ船長ハ假ニ出帆當時危險ヲ感セストモ船カ元宇品島ノ鼻ヲ航過ノ頃ヨリ風力増大シ波浪モ高キコトヲ目睹シタルトキハ直ニ引返スコトヲ考慮セサルヘカラサリシモノニシテ又遭難直前北山俊造ハ危險ヲ感シ急ニ船首ヲ右轉スヘク操舵シ居ルカカ爲左舷側ニ傾斜シ居タル船カ一層其ノ側ニ傾斜シ風壓ト浪ノ爲ニ終ニ顛覆スルニ至ラシメタルハ船長トシテノ判斷及臨機ノ處置カ適切ナラサリシニ起因

一、當審ニ於ケル鑑定人高呂富吉作成ニ係ル鑑定書中判示ノ如キ狀況ノ下ニ於テ被告人カ綠丸出港ノ決意ヲ爲セルハ必スシモ不可トハセサルモ旅客定員ノ點ニ付深ク調査セス且其ノ超過ニ對シ何等處置ヲ講セサリシハ不注意ニシテ又出港セル場合ニ於テハ判示(イ)乃至(ハ)ノ如キ航路ヲ探ルヲ安全トスヘク斯ル場合ハ波浪中ヲ航行スル迄ニ乗客ニハ波浪中動搖ノ危險ヲ告ケ絶對船體ノ平均ヲ保ツヘク注意シ同時ニ機關部員ニハ機關操作上ノ命令ヲ特ニ嚴守スル機甲板部員ニハ救命具ノ用意汚水及排水ノ準備ヲ命シ然ル後目的ノ針路ヲ航進シ大浪中ハ波浪ニ對スル操舵及速力ノ加減ハ時機ヲ失セス應用シ横波ヲ避クルハ勿論突風及「サヤ波」ニ注意スルヲ要スヘク特ニ綠丸沈没現場附近ハ落潮ノ終リ前後三十分間俗稱「サヤ波」ノ發生アルモ此ノ波ハ極メテ不規則ニシテ一定方向ニ進マサル甚タ危險性ノモノナリ而シテ判示遭難現場附近ニ於テ判示ノ如ク右舷ニ大浪ヲ受ケ更ニ大浪ヲ受ケントスル危險アル場合ニ於テハ二度目ノ風浪ヲ待タズ迅速ニ左轉シ大浪ヲ船尾ニ受ケ其ノ場ヲ避クルヲ安全ト認ムル旨ノ記載

一、前掲判示第一事實認定ニ學示セル當審第三回公判調書中證人高呂富吉ノ供述記載、並司法警察官代理ノ山本虎雄ニ對スル聽取書中ノ供述記載

ニ徴シテ明白ニシテ以上ヲ綜合スレハ判示機船覆没並乗船者ノ致死ニ付被告人ニ業務上過失ノ存シタルコトモ亦十分之ヲ認メ得ヘキヲ以テ判示事實ハ總テ其ノ證明アリタルモノトス

法律ニ照スニ被告人ノ所爲中業務上ノ過失ニ因リ船舶ヲ覆没セシメタル點ハ刑法第二百二十九條第二項ニ、業務上過失ニ因リ人ヲ死ニ致シタル點ハ各同法第二百一十一條ニ該當スルトコロ右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ基キ犯情最モ重キ業務上ノ過失ニ因リ高橋渡平ヲ死ニ致シタル罪ノ刑ニ

從フヘク所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮五月ニ處シ原審並當審ニ於ケル訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ則リ全部被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年四月二十八日

廣島地方裁判所刑事部

二一〇三 業務上過失致死

判決

本籍並住居

岐阜縣海津郡東江村大字秋江六百六十三番地

農兼渡船船夫

馬場三郎

明治四十三年十二月二十日生

右被告人ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付昭和十一年十月三十日大垣區裁判所カ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ禁錮參月ニ處ス

理由

二一〇三 業務上過失致死

被告人ハ昭和五年以來岐阜縣所管ノ愛知縣海部郡八開村大字給付及岐阜縣海津郡東江村大字秋江間ノ木曾川渡シ(水面平時幅員約二百三、四十間)ノ越立人夫トシテ同渡船場ニ於テ乘客並荷物ノ運搬業務ニ従事シ居リタルモノナル處昭和十一年六月二十一日午前十時二十分頃右渡船場ノ東岸(給付)ヨリ西岸(秋江)ニ向ヒ木造ノ定員大人二十人乗(一人十五貫ノ割合)ノ渡船(長サ三十尺五寸最大幅員五尺二寸)ニ乘客並荷物ヲ積載シテ漕行スルニ際シ其ノ渡船ノ形態構造カ體ノ部分ヨリモ軸ノ部分ニ於テ低クナリ居リシヲ以テ該渡船場ノ越立人夫トシテハ常ニ木曾川ノ水勢並水深ヲ熟知セルコトナレハ自己ノ操縦スル渡船ノ右形態構造並積載量ニ深く留意シ軸及體ノ吃水ヲ適度ナラシムルヤウ乗船者又ハ荷物(十五貫ヲ大人一人ト計算ス)ノ積載ヲ統制制限シテ定員ヨリ著シク超過セサルコトニ努メ萬一右積載量以外ニ乗船シ又ハ荷物ヲ積載セントスルモノアル場合ニハ之ヲ制止シ以テ漕行ノ中途ニ於テ發生スルコトアルヘキ危險ヲ未然ニ防止スル爲メ周到ナル注意ヲ用フヘキ業務上ノ義務アルニモ拘ラス不注意ニモ右業務ニ背キ前記積載量ヲ顧慮セス何等乘客ニ對シ制止ノ手段ヲ講スルコトナク乘客二十九名(内兒童二名)並自轉車十八輛(一輛平均約六貫)ヲ滿載シ而モ軸ノ部分ハ體ノ部分ヨリ重ク積載シテ漕キ出サントシタルモ積載量過重ノ爲メ離陸セス止ムヲ得ス乘客中ノ二名カ丸太棒ニテ船底ニ挺子ヲ掛ケ押出シタル程ニシテ其ノ當時既ニ軸ノ部分ハ約三寸ヲ殘ス程度ニ吃水シ居リタルヨリ此儘漕行スルニ於テハ吃水愈々深クナリ沈没スルノ危險アルヘキコトヲ認識シ得ヘキニ拘ラス漫然漕行シ得ヘシト輕信シ敢テ航路ヲ西南(川下)ニ採リ運航ヲ開始シタル爲メ漕行後程ナク軸ヨリ船内ニ浸水シ始メタルモ其ノ儘漕行ヲ繼續シタルヨリ漸次浸水ノ度ヲ増シ西岸渡船場ヨリ流ノ中央ニ向ヒ約百四十三間突出セル沈床ノ尖端附近ノ水深最モ深キ處ニ至リタル際航路ヲ西北(川上)ニ轉換セントスルヤ危險ヲ感シタル乘客中ノ二名カ水中ニ飛込ミタル爲メ乗タルモノナリ

客並船體ニ動搖ヲ來シ絞上ノ如ク定員ヲ著シク超過シ積載シタル爲軸ノ吃水益々深クナリテ軸ヨリ多量ノ水一時ニ浸水シ即時同所ニ該渡船ヲ沈没セシメ因テ乘客ナル大野幸雄(名古屋控訴院判事)外男五名女二名ヲ溺死スルニ至ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當シ而モ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法律第五十四條第一項前段第十條ニ依リ最モ重キ大野幸雄ヲ死ニ致シタル罪ノ刑ニ從ヒ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮三月ニ處スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

(本件控訴ハ理由アリ)

昭和十二年二月六日

〇〇地方裁判所刑事部

二〇四 業務上過失傷害及致死

判決

本籍 山形縣西田川郡東郷村大字角田二口甲二十番地
住居 鶴岡市南町二十一番地 須田久太郎方

二〇四 業務上過失傷害及致死

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害及致死被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

被告人ヲ禁錮四月ニ處ス

主 文
理 由

被告人ハ自動車運轉手トシテ鶴岡市サカエ自動車商會事須田久太郎方ニ雇ハレ鶴岡市及山形縣東田川郡本郷村大字熊出(俗稱落倉)間ノ定期乗合自動車運轉ノ業務ニ從事中昭和十一年七月十四日鶴岡發落合行自動車(山形第九一號)ニ石原鏡外十五名ヲ乗車セシメ之ヲ運轉シテ同日午前七時十分頃同市十三軒町十五番地雜貨及油類商阿部修次郎方前ニ停車シガソリン補給ヲ爲シタルカ該自動車ハガソリンタンク(約五ガロン入)カ運轉臺後方床下ニ在リテ其ノ圓形給油口(内經約一寸八分)ハ運轉臺後部ヨリ一尺一寸ノ所ニ開口シ存スル爲右阿部方ノガソリン補給ホースハ運轉臺右手ノ車窓ヨリ入レ運轉手ノ膝上ヲ通シ其ノ先端鑿形金屬性口金(外經九分)ヲ右給油口ニ差シ込ミ補給スル爲メ右給油口トホース口金トノ間隙ヨリ氣化シタルガソリンガスカ車室内ニ進出發散シ特ニ機關廻轉中ハ引火爆發スル虞レアレハ喫煙等ノ火氣ヲ近付ケサル様注意シ右危險ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ十數分間市内ヲ運轉シ機關ヲ廻轉セシメタル儘停車シタル爲氣温上昇シタル同車室内ニ於テ約三ガロンノ給油ヲ了シタル頃當時給油中ニ喫煙シタルコトアルニヨリ引火スルコト無シト輕信シ不注意ニモ運轉臺ニ坐シタル儘喫煙セントシテ漫然

燐寸ニ點火シタル爲メ其ノ火焰カ折柄右給油口ヨリ車室内ニ進出擴大シツツアリタル氣化セルガソリンガスニ引火爆發シ因テ石原鏡、安孫子春野、清水てつ、東海林よしヲ別表記載原因ニヨリテ同表記載年月日ニ各死亡スルニ至ラシメ別表記載ノ如ク乗客本間梅江外六名及車掌三浦清女ニ各傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルコト右ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ從ヒ最モ重キ石原鏡ニ對スル罪ノ刑ニ從ヒ其ノ所定刑中禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ禁錮四月ニ處スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十一年九月十八日

鶴岡區裁判所

(別表)

氏 名	死 亡	原 因	死 亡 年 月 日
石 原 鏡	死	全身ニ及ヘル二度火傷ニヨリ發生セル毒物ニヨル急性自家中毒	昭和十一年七月十四日
安孫子春野	死	顔面部胸部背部四肢二度火傷ニヨリ發生セル毒物ニヨル急性自家中毒	同日
清 水 て つ	死	顔面兩上肢二度火傷後ニ於ケル全身衰弱	同年七月三十一日
東海林よし	死	顔面兩上肢左下腿二度火傷後ニ於ケル全身衰弱	同年八月十六日

業務上過失傷害及致死

傷害ノ部位	程度
本間 梅江	顔面兩前膊左下腿第二度火傷右下腿擦過傷
小野 梅子	顔面背部兩上肢兩大腿部第二度火傷
大久保 イチ	兩側下腿並兩側前膊第二度火傷左顔面部第一度火傷
難波 彦太郎	臂部兩下肢第一度及第二度火傷
坂野 亥之吉	顔面一般二度ノ火傷頭部一般一度ノ火傷
田澤 好吉	左手背前膊前面顔面一般頸部二度ノ火傷
加藤 永吉	顔面一般二度ノ火傷左手背ニ長サ三厘米皮下ニ達スル裂傷並左右手背ニ於ケル第一度火傷
三浦 清子	顔面部一度ノ火傷

二〇五 業務上過失致死傷

判決

本籍 茨城縣那珂郡木崎村大字南酒出六百六十番地
 住居 福島縣石城郡磐崎村大字上湯長谷字長倉番地不詳
 炭礦坑内保安係 松本 甚四郎

明治三十九年十二月二十八日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死傷被告事件ニ付平區裁判所カ昭和十五年十月十四日言渡シタル有罪ノ判決ニ對シ檢事某及被告人ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ罰金四百圓ニ處ス
 右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ被告人ヲ百日間
 勞役場ニ留置ス

理由

被告人ハ福島縣石城郡磐崎村大字上湯長谷字長倉所在磐城炭礦株式會社社長倉坑本坑北進斜坑本線斜卸擔當ノ坑内保安係員ナルトコロ坑内保安係員トシテ勤務時間中ハ其ノ擔當區域内ノ鑛夫ノ就業場所通行場所其ノ他危險ノ虞アル場所ヲ巡視シテ落磐瓦斯爆發等危險ノ有無ヲ檢査シ若シ坑内ニ可燃性瓦斯充滿シ或ハ充滿スル虞アリト認ムルトキハ作業ノ中止通行ノ遮斷ヲ爲ス等適宜應急ノ處置ヲ講シ又瓦斯排除ノ爲局部扇風機カ設置セラレ其ノ運轉停止セル場合ハ之ヲ運轉セシムル等適當ノ處置ヲ爲シ勤務交替ニ際シテハ次番坑内保安係員ニ瓦斯發生其ノ他保安上必要ナル事項ニ付引繼ヲ爲シテ危險ノ發生ヲ未然ニ防止スヘキ業務上當然ノ注意義務アルニ拘ラスカ義務ヲ怠リ昭和十五年五月十九日午後五時ヨリ翌二十日午前五時迄ノ勤務時間中坑外ノ檢身所ニ於テ不覺ニモ假睡シ居リタル儘一同モ擔當區域ノ巡視ヲ爲サス只漫然ト被告人ノ助手ニシテ瓦斯檢査能力ノ充分ナラサル同坑支柱夫佐藤清作及村松覺治ヨリ坑内ニ異

狀ナキ旨ノ報告ヲ受ケタルノミニシテ坑内冷却並瓦斯排除ノ爲設置セラレタル常運轉局部扇風機カ停止シ其ノ爲擔當
區域内ナル前記斜卸切端附近ニメタン瓦斯カ湧出充滯シ居リタルコトニ氣附カス輕卒ニモ坑内ニ異狀ナキモノト速斷
シ右二十日午前五時四十分頃次番坑内保安係員越智廣徳ニ昨夜ハ巡視セサリシモ異狀ナカリシ旨引繼ヲ爲シ之ヲ信シ
タル同人ニ於テ番割ヲ爲シテ入坑セシメタル班長須藤常道外十四名ノ鑛夫中ノ何人カ同日午前六時過頃前記斜卸
切端附近ニ於テ禁ヲ犯シテ同所迄延長サレタル電燈線ヲ動カシタル際電氣ノスパーク起ルヤ之ヨリ同所ニ充滯シ居リ
タルメタン瓦斯ニ引火シテ爆發ヲ惹起セシメ因テ右須藤常道外十四名ノ鑛夫ヲシテ殆ト又ハ略全身ニ亘ル火傷ヲ負ハ
シメ之カ爲右鑛夫中渡邊靜二外八名ヲ同日ヨリ翌月六日頃迄ノ間ニ死亡スルニ至ラシメ阿久津柱雄外五名ニ治療約十
五日乃至七十日ヲ要スル傷害ヲ負ハシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中判示業務上ノ業務ヲ怠リ巡視ヲ爲サマリシ點ハ鑛業警察規則第十四條第二項第七十
九條第一項ニ業務上過失致死傷ノ點ハ夫々刑法第二百一十一條ニ該當スルトコロ以上ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ
觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ最モ重キ渡邊靜二ニ對スル業務上過失致死罪ニ付定メ
タル刑ニ從ヒ其ノ所定刑中罪金刑ヲ選擇シ其ノ罰金額ノ範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金四百圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコ
ト能ハサルトキハ刑法第十八條ニ則リ被告人ヲ百日間勞務場ニ留置スヘキモノトス
仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年一月九日

福島地方裁判所刑事部

二〇六 業務上過失致死

略式命令

住居 阿寒郡阿寒村雄別炭山番外地
坑内助手

持 館 修

當三十六年

右者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付略式命令ヲ爲スコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ罰金百圓ニ處ス

但シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金貳圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞務場ニ留置ス

事 實

被告人ハ豫テヨリ阿寒郡阿寒村雄別炭礦鐵道株式會社ニ雇ハレ同坑内火藥取扱掛兼保安掛員トシテ落磐防止等ノ業務
ニ從事シ居ルモノナル處昭和十五年七月十九日午前九時頃同坑第一坑左九片ニ於テ發破作業ヲ實施シタルカ其ノ直後
右發破箇所及其ノ附近ノ天磐ノ一部ニ支柱不足ノ箇所アルコトヲ發見シタルヨリ右發破ノ結果磐面ニ弛緩ヲ生シ落磐
ノ危険アルコトハ容易ニ察知シ得ル所ナルヲ以テ斯ル場合保安掛員タルモノハ須ク急遽該箇所ニ支柱ヲ施シ以テ落磐

ノ危険ヲ防止スヘキ業務上ノ注意義務アルニ拘ラス被告人ハ不注意ニモ何等危険ナカルヘシト輕信シ坑夫ヲシテ其ノ附近ニ於テ採炭ニ從事セシメ前記發破作業後約四十分經過シタル頃漸ク落磐ノ危険ヲ感知シ採炭夫ニ命シテ支柱材ヲ取寄セシメントシタルモ時既ニ遅ク同日午前九時四十分頃突如該支柱不足ノ個所ヨリ長サ約二尺幅約一尺ノ天磐カ其ノ直下ニ於テ作業中ナリシ採炭夫申載博(當一十二年)ノ背部ニ落下シ因テ同人ヲシテ右落磐ノ強壓ニヨル胸椎脫臼骨折ノ爲間モナク同所雄別炭礦病院ニ於テ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

適條

刑法第二百一十一條第十八條

昭和十五年八月十日

釧路區裁判所

被告人ハ此命令送達ノ日ヨリ七日内ニ正式裁判ノ請求ヲ爲スコトヲ得

二〇七 業務上過失傷害、失火

判決

本籍 那覇市垣花町三丁目十六番地
住居 同市同町二丁目八十三番地

會社従業員

金城秀暢

明治三十二年六月八日生

右ノ者ニ對スル失火、業務上過失傷害被告事件ニ付昭和十五年十月五日那覇區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ罰金二百圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

理由

被告人ハ那覇市住吉町一丁目一番地所在石油共販株式會社沖繩油槽所ノ従業員トシテ雇ハレ石油ノ搬入搬出及破損セ
ル石油罐ノ修繕等ノ業務ニ從事シ居リタルモノナルトコ昭和十五年二月二十六日入港ノ神榮丸ヨリ同日及翌二十七日ノ二日間ニ亘リ人夫約三十名ヲ指揮シテ航空機用竝自動車用揮發油、マシン油、燈油等約一萬二千罐ヲ右油槽所ノ第一號倉庫及之ニ接続スル第二號倉庫ニ搬入セシメタルカ其ノ際破損セル揮發油及燈油入ノ約二百罐ハ右第二號倉庫ノ入口ニ近キ内部ト入口近ク該倉庫ニ接続セル物置庫ニ藏置シ置キ翌二十八日午前八時三十分頃臨時人夫高良龜、奥間樽ノ兩名ト共ニ破損セル右石油罐ノ修繕ヲ爲スヘク炭火ヲ入レタル「ハンダ」附用鐵製焜爐(俗稱カンテキ)ヲ携ヘ右第二號石油倉庫前ニ赴キタルカ之ヨリ曩被告人ハ同日午前六時三十分頃該倉庫附近ヲ見廻リタル際右第二號倉庫入口附近ノ地面ハ入口ヨリ約二間位ノ地點迄倉庫或ハ物置内ノ前記破損罐ヨリ搬入ニ際シ又ハ搬入後漏出シタル揮發油等

二〇七 業務上過失傷害、失火

七三五

濕潤シ之ニ火氣ヲ接近セシムルニ於テハ直チニ引火シ重大ナル災厄ヲ惹起スヘキ危険ノ狀況ニアルコトヲ認識シ居タルヲ以テ斯ル場所ニ於テ石油罐ノ修繕ニ從事セムトスル者ハ火氣ノ取扱ニ尤モ慎重ヲ期シ殊ニ焔爐ノ如キハ倉庫入口ヨリハ勿論油ノ濕潤セル個所ヨリ相當隔離シテ之ヲ置ク等苟モ生命、身體、財產等ニ危害ヲ及ホスコトナキ様周密ナル注意ヲナスヘキ業務上ノ義務アルニ拘ラス被告人ハ之ヲ怠リ不注意ニモ一旦所携ノ焔爐ヲ右第二倉庫入口ヨリ約二間半ノ地點ニ置キタルヲ更ニ一間半ノ地點迄引寄セ同倉庫内ヨリ取出シタル木炭ヲ焔爐内ノ炭火ニ加ヘタル爲忽チ地面ニ濕潤セル揮發油ニ引火シ次第第二號倉庫内ノ揮發油ニ點火シ該石油倉庫及第一號倉庫ヲ爆發セシメ因テ石油共販株式會社所有ノコンクリート建倉庫一棟、航空機用揮發油六千二百二十六罐、自動車用揮發油三千四百五十六罐、燈用石油二千二百罐、マシ油二百四十八罐(以上價格合計約九萬圓)及附近ノ比嘉三良外二名所有ノ住家四棟等(價格合計約九千六百圓)ヲ燒燬シ尙右倉庫ノ爆發ノ際現場ニ居合セタル前記高良龜及奥間樽ノ各顔面等ニ各治療一ヶ月餘ヲ要スル火傷ヲ蒙ラシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中失火ノ點ハ刑法第一百六條第一項ニ業務上過失傷害ノ點ハ同法第二百一十一條ニ各該當スルトコロ以上ハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸ルル場合ナルヲ以テ同法第五十四條第一項前段第十條ニ則リ重キ業務上過失傷害罪ノ刑ニ從ヒ其ノ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ其ノ金額範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金二百圓ニ處シ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ同法第十八條ニ依リ金二圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年十一月二十五日

那覇地方裁判所刑事部

二〇八 業務上過失致死

判決

本籍 佐賀縣神埼郡仁比山村大字の二百七十八番地
住居 同縣同郡神埼町大字神埼四十一番地第三

齒科醫師

田代英麿

明治三十五年三月十五日生

右ノ者ニ對スル業務上過失致死被告事件ニ付昭和十四年九月四日佐賀區裁判所ニ於テ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事某關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ罰金百圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金壹圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

原審及當審ニ於ケル訴訟費用ハ全部被告人ノ負擔トス

二〇八 業務上過失致死

被告人ハ肩書住居ニ於テ齒科醫ノ業務ニ從事中ノモノナルトコロ昭和十三年六月十二日佐賀縣神埼郡西郷村大字本告
 牟田武田鶴松方ニ於テ同人ノ内縁ノ妻木村ウメ(當時五十七年)ヲ診察シタルカウメハ同年五月上旬發病シ爾來快癒ス
 ルニ至ラス當時ハ臥床中ニシテ左側上顎臼齒部カ急性顎骨炎ニ罹リ居リタルモ尙消化器系統ニ於ケル痛種慢性敗血症
 重症貧血症白血病アキラヌロチトゼ又ハ結核症等ノ疑ヲ有スル高熱及貧血ヲ伴ヒタル内科的重症患者ニシテ體防衛
 力低下シ身體衰弱シ居リ從テ同人ニ對スル拔牙ハ絕對ニ禁忌スヘキモノナリシヲ以テ被告人ハ拔牙手術ヲ避ケ局部ニ
 出來得ル限り刺戟ヲ與ヘサル切開法ノ如キヲ施スヘク或ハ假ニ拔牙ヲ必要ナリトスル場合ニ於テモ木村ウメハ内科主
 治醫アルヲ以テ右拔牙ヲ同主治醫ニ諮リタル後之ヲ施ス等右患者ノ生命保持ニ付周到ナル手段ヲ講スヘキ業務上ノ注
 意義務アルニ拘ラス之ヲ怠リ右ウメノ體温三十八度五分ニシテ相當身體衰弱セルヲ知悉シ乍ラ其ノ内科的疾患ハ之ヲ
 看過シ同人ノ病名ハ齒槽膿漏、齒性顎骨炎、齒牙中心感染症ナリト輕信シ同日午後一時十五分ヨリ同日午後二時四
 十五分迄一時間三十分ニ亘リ右ウメニ多量ノ注射ヲ施シ其ノ上下兩顎左右ノ患齒牙合計十六本ヲ拔去シ同人ニ長時間
 ニ亘リ多大ノ刺戟ヲ與ヘ以テ其ノ病症ヲ頓ニ惡化セシメ虚脱ノ状態ニ陥ラシメ終ニ同月十四日午前一時頃敗血症ノ著
 明ナル症狀ヲ呈セル重症貧血症ノ爲メ死ニ到ラシメタルモノナリ

證據ヲ按スルニ右事實ハ

一、被告人カ肩書住居ニ於テ齒科醫ノ業務ニ從事中ノモノナルコト昭和十三年六月十二日佐賀縣神埼郡西郷村大字本告牟田武田
 鶴松方ニ於テ同人ノ内縁ノ妻木村ウメヲ診察シタルカウメハ同年五月上旬發病シ爾來快癒セス當時ハ臥床中ニシテ體温三十八

度五分アリ相當衰弱シ居リ齒槽膿漏、齒性顎骨炎、齒牙中心感染症ノミト診斷シタルコト、同人ニハ内科主治醫アリタルモ
 之ニ諮ルコトナク同日午後一時十五分ヨリ同日二時四十五分迄ニウメノ上下兩顎左右ノ齒牙合計十六本ヲ拔去シタルコト、同
 人カ昭和十三年六月十四日午前一時頃死亡シタルコトハ孰レモ被告人ノ當公庭ニ於ケル其ノ旨ノ供述

一、鑑定人金森虎雄作成ノ鑑定書中ニ木村ウメノ病名ハ被告人ノ手術前ニ於テハ消化器系統ニ於ケル痛種、慢性敗血症、重症貧
 血症、白血症、アキラヌロチトゼ又ハ結核症等ノ疑ヲ有スル内科的疾患ニ罹患セルモノノ如シ故ニ同人ハ體防衛力低下シ身
 體衰弱スルカ爲メニ被告人カ施シタル長時間ノ手術、多量ノ注射液、比較的多量ノ出血等ノ爲メニ虚脱ノ状態ニ陥リ貧血ノ度
 ヲ増シ高熱ヲ發シ病症頓ニ惡化シ俄ニ敗血症ノ著明ナル症狀ヲ呈セル重症貧血症ニテ死亡シタルモノナラムト思考ス。木村ウ
 メハ病初ヨリ貧血ヲ伴ヒタル重症患者ニシテ早晚死亡スヘキ状態ニアリタルモノノ如ク被告人ノ施シタル手術ノ結果病症頓ニ
 惡化シ死期ヲ早メタルモノト考ヘ得ヘシ。昭和十三年六月十二日被告人カ拔牙手術ヲ施シタル際ハ木村ウメハ貧血ヲ伴ヘル内
 科的重症疾患ニ罹患シ且左側上顎臼齒部ニ於ケル急性顎炎ヲ有セシモノナラム而シテ高熱ヲ有シ貧血ヲ呈セルモノナレハ此際
 拔牙ハ禁止スヘキモノナリ、單ニ貧血ヲ呈セルモノニ對シテモ拔牙ヲ行フ迄ニハ極メテ慎重ナル態度ヲ要シ全身ノ精査ハ勿論
 血液検査ヲ施シ重症貧血又ハ白血病ノ時ニハ拔牙ヲ禁忌ス其ノ他ノ貧血ヲ伴フ疾患ニ於テモ萬止ムヲ得サル場合ノ外ハ拔牙ヲ
 避クルヲ以テ常法トスル所ナリ又高熱ヲ有スル場合ニ於テモソレカ齒性疾患ニ因ルモノニシテ拔牙ニヨツテ充分ナル排膿法カ
 講セラルル場合例ヘハ當該齒牙カ頗ル動搖シ其ノ基底部分ニ化膿ヲ有シ其ノ排膿ノ進路ヲ妨クル時ノ如キ極メテ狭メラレタル
 範圍ニ於テ局所ニ強刺戟ヲ與フルコト無ク容易ニ拔牙手術ヲ行ヒ得ル場合ニハ之ヲ行フコトアレトモ拔牙以外ノ簡單ナル排膿
 法例ヘハ切開法ノ如キヲ施シテ出來得ル限り局所ニ刺戟ヲ與ヘサルコトヲ以テ通法トスル所ニシテ被告人ノ施シタルカ如キ一
 度ニ多數ノ齒牙ヲ拔去シ長時間ニ亘リ患者ニ多大ノ刺戟ヲ與フルコトハ最モ禁忌スヘキモノナリ殊ニ此ノ場合ニ於テハ高熱ヲ

有シ且貧血ヲ呈スルモノナレハ拔牙ハ絕對ニ禁忌スヘキモノナリト思フ。被告人ハ木村ウメノ内科的疾患ハ歯牙ノ疾患ニノミヨルモノナリトノ過信ヲ以テ手術シタルコトハ注意周到ナル齒科醫ノ探ルヘキ手術ニ非ス加之同人ニハ既ニ主治醫有リテ當時診療中ノモノナリシニモ拘ラス之ニ一言ノ相談モナク手術シタル點モ亦注意周到ナル齒科醫ノ探ルヘキ手段ナリト思ハレス被告カ診定シタル如ク當時木村ウメニ齒性顎骨炎症、齒槽膿漏、齒牙中心感染症アリト雖モ木村ウメノ場合ニ於テハ拔牙ハ絕對ニ禁忌スヘキモノト信ス。被告人ノ手術ニヨツテ敗血症ト重症貧血症トカ初メテ發生セシモノトハ思ハレスト雖モ其ノ既存セシモノト想像シ得ル疾病ヲシテ更ニ増悪セシメタルモノナリト認メ得被告人ノ木村ウメニ對スル拔牙手術ハ齒科醫師トシテノ處置ニ過失アルモノト認ムルコトヲ得ル旨ノ記載

一、鑑定人間田亮次同藤原教悅郎作成ノ鑑定書中木村ウメカ高度ノ貧血及衰弱ノ状態ニアリタルニ拘ラス醫師タル主治醫ノ意見ヲ徵スルコトナクシテ之ニ拔牙手術ヲ行ヒ爲メニ同人ヲ死ニ致シタルハ齒科醫トシテ當然顧慮スヘキ點ニ付周到ナル注意ヲ爲シ手術ヲ施シタルモノト認ムル能ハス拔牙手術ニ付キ禁忌症ノ存在ヲ無視シテ之ヲ敢行セシモノト斷定シ得ル旨ノ記載

一、原審第二回公判調書中證人石丸常夫ノ供述トシテ自分ハ木村ウメヲ昭和十三年五月十八日以降主治醫トシテ診療シ居リシカ同人ハ慢性胃腸加答兒ノ爲全身ノ栄養障害、貧血ヲ來シ居レリ判示ノ十二日午後三時一寸過キニ往診シタルニ前日トハ丸テ連ヒ病勢ハ非常ニ惡化シ居リ即チ心臟ハ極度ニ衰弱シ脈搏ハ頻少トナリ口ノ周圍ハ紫色ヲ呈シ顔面蒼白ノ程度モ加ハリ熱ハ三十七度二、三分ニ下リ手足ハ冷クナリ衰弱ノ程度ハ殆ト意識不明トナリ居リタリ此ノ病勢惡化ノ原因ハ恐ラク拔牙ニ因ル虚脱症狀ト思フ常識的ニ判斷シテモ亦衰弱セル當時ノウメノ状態ヨリ觀ルモ拔牙ハ絕對ニ禁忌スヘキモノナルニ十六本ト言フ多數ノ拔牙ヲ爲シタルコトヲ聽キ失神セン許リニ驚キタリ、ウメノ夫鶴松ニ對シ主治醫ノ僕ニ何故一言ノ知ラセモノササリシヤト尋ネタルトコロ知ラセ様ト思フテ居タカ田代カ自分ニ任セロト言フタノテ知ラセサリシト鶴松ハ申シタリ若シ手術ノ際自分カ立

會ヒシナラハ當然拔牙ヲ差止メタル筈ナリ之レ患者ノ衰弱ヨリ觀テ拔牙ノ爲ニ生命ヲ亡クスル様ナ處アリタレハナリウメハ十四日午前一時頃死亡シタルカ死因ハ敗血症兼重症貧血ト思惟スル旨ノ記載

一、同上公判調書中證人永原勇ノ供述トシテ自分ハ齒科醫ニシテ昭和十三年六月十一日木村ウメヲ初診ス同人ハ齒槽膿漏ノ外ニ右大白齒ノ局所的ニ急性齒槽骨膜炎アリト診斷シタリ患者ハ拔牙ヲ希望シタルモ自分ハ血液カ充血シテ居ルカラ拔牙スレハ多量ノ出血アリ尙全身衰弱、食慾不振ノ状態ニ在ルヲ以テ抜イテハイケナイト患者、武田及娘ニ申シタルニ皆納得シタリ自分ハ拔牙ヲ禁シ置キタルニ拔牙シテ居ルトノコトナレハ石丸醫師ニ隨イテ往キタルカ患者ハ口許ハ全部腫上リ唇ハ紫色ヲ呈シ眼球ノ動行ハ鈍ク所謂虚脱症狀ヲ呈シ居リタリ自分ハ木村ウメノ當時ノ病狀ニテハ絕對拔牙ヲシテハナラヌト言フ意見ヲ有シ居リタリトノ旨ノ記載

一、志村宗平ニ對スル檢事ノ聽取書ニ(記錄第一八八丁表以下)同人ノ供述トシテ昭和十三年六月十一日木村ウメヲ診察シタルカ同患者ノ症狀トシテハ貧血カ相當著明、衰弱モ亦相當高度ノ状態ニ在ルモノト認メタリ此ノ時敗血症ノ如キ症狀ハ少シモ認メサリキ此ノ患者ニ其ノ後食慾カ出テ來レハ病氣ハ漸次快復ニ向フモ若シ食慾カ出テ來スソシテ一般症狀カ現狀ノ儘ナラハ漸次死ノ轉歸ヲ取ルモノト思ハル斯様ナ食慾不振ノ患者ニ對スル療法トシテハ通常滋養並ニ強心劑ノ注射ヲ爲シ其ノ間ニ順次食慾ヲ生シテ來ルノカ普通テアルカ若シ然ラサル場合ハ引續キ滋養強心劑ノ注射ヲ施シテ居タナラハ自分ノ診察後二週間位ノ生命ヲ保チシモノト思ハル併シ乍ラ二、三日中ニ急ニ死ノ轉歸ヲ取ルト言フ如キ病人ニテハ非サリシ旨ノ記載

一、石丸常夫ニ對スル第一回檢事聽取書ニ同人ノ供述トシテ(記錄第一三五丁裏以下)木村ウメハ判示ノ拔牙ナカリセハ療法ニヨリテハ漸次食慾カ生スル見込アリ從テ病氣快復ノ見込モ或ハアツタモノト思惟ス假令食慾カ出テ來ナカツタトシテモ心臟カ非常ニ丈夫テアツタノテアノ儘自分カ治療ヲ續ケテ居レハ同患者ノ生命ハ更ニ一ヶ月カ又ハ夫レ以上ハ十分ニ保チ得タモノト思

フ旨ノ記載

ヲ綜合シテ之ヲ認ム

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ所定刑中罰金刑ヲ選擇シ該罰金額ノ範圍内ニ於テ被告人ヲ罰金百圓ニ處シ同法第十八條ニ則リ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金壹圓ヲ一日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置スヘク訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ依リ全部被告人ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十四年十二月二十六日

佐賀地方裁判所刑事部

二〇九 業務上過失致死

判決

本籍 岡山縣淺口郡西阿知町大字片島千五百五十五番地
住居 大阪市住吉區今西川町六ノ四十六 上東清次方

無職

古 角 ハ ル

明治十六年三月十五日生

右被告人ニ對スル傷害致死被告事件ニ付昭和十四年九月六日岡山地方裁判所ノ言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人ヨリ控訴シタルヲ以テ當院ハ檢事某關與更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人ヲ禁錮八月ニ處ス

原審ニ於ケル未決勾留日數中六十日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用ハ其ノ二分ノ一ヲ被告人ノ負擔トス

理 由

被告人ハ三十三歳ノ頃健康ヲ害シテ病身ト爲リ更ニ四十三歳ノ時卵巢ヲ病ミタルモ貧困ニシテ十分ナル醫療ヲ加フルコト能ハサリシカ香川縣小豆島ニ參拜シテ弘法大師竝不動尊ヲ信仰シタル頃ヨリ病狀漸次輕快シタル爲神佛ニ對スル信仰心ヲ深メ四十五、六歳ノ頃岡山縣兒島郡莊内村五流院ヨリ加持祈禱ノ免狀ヲ受ケ爾來加持祈禱ノ業務ニ從事シ居リタルモノナルトコト曩ニ被告人ノ祈禱ヲ受ケ被告人ニ師事シテ修業ヲ積ミ天臺宗三井寺ヨリ加持祈禱ノ免狀ヲ受ケ平素被告人ト共ニ加持祈禱ノ業務ニ從事シ居リタル原審相被告人岩井仲次郎カ昭和十四年六月中旬頃岡山縣淺口郡玉島町大字阿賀崎千二百八十一番地武繩加免のヨリ同女ノ長男ニシテ精神病者ナル武繩逸雄(當時十八年)ノ病氣平癒ノ祈禱ノ依頼ヲ受ケ來リ被告人ニ其ノ應援ヲ依頼スルヤ之ヲ承諾シ仲次郎ト共ニ同月二十二日前記加免の方ニ到リ午前八時頃ヨリ同家六疊ノ間ニ祭リタル神前ニ逸雄ヲ靜座セシメ仲次郎ト共同シテ祈禱ヲ始メタルカスル場合ニハ患者ノ心身ニ生理的機能障害ヲ誘發セサル様周到ナル注意ヲ爲スヘク異常ナル暴力行使ノ如キハ嚴ニ之ヲ慎ムヘキハ祈禱業

者當然ノ義務ナルニ拘ラス被告人ハ祈禱開始後逸雄カ逃走セントシテ暴レ出シタルヨリコハ同人ニ狐狸ノ類カ取憑ケルニ因ルモノナリト妄信シ神佛ニ祈願シテ之ヲ追落シ以テ其ノ病氣ヲ治癒セシメンコトヲ專念スルノ餘リ祈禱師トシテ業務上必要ナル前示注意ヲ怠リ岩井仲次郎ヲシテ紐(證第一號)及帶(證第五號、同第七號、同第十號)ヲ用ヒ逸雄ノ兩手ヲ後ニ廻シテ該兩手及兩足首竝兩膝關節部ヲ縛リタル上兩手ヲ縛リタル帶ト兩足ヲ縛リタル帶トヲ連絡シテ兩足ヲ後方ニ吊上ケシメ其ノ自由ヲ制縛シタル儘神前ニ轉カシ朝來飲食物モ殆ト之ヲ給與セスシテ讀經祈願中狐狸ヲ逸雄ノ體内ヨリ追出ス爲ナリト仲次郎ト交々逸雄ノ腋下、股其ノ他身體各所ヲ屢次錫杖(證第八號)ノ柄尻ニテ突キ又ハ捏廻シ午後九時頃ニ至リ一旦之ヲ中止シタルモ家人ニ逸雄ノ緊縛ヲ解クコト及飲食物ヲ與フルコトヲ禁止シテ前記制縛ノ儘同人ヲ同所ニ放置シ翌二十三日午前八時頃ヨリ右制縛ノ儘再ヒ仲次郎ト共ニ祈禱ヲ繼續シ因テ逸雄ヲシテ身體制縛等ニ基ク外傷性中毒性「シヨック」ノ爲同日午後四時頃同所ニ於テ死亡スルニ至ラシメタルモノナリ

證據ヲ接スルニ右ノ事實ハ

一、被告人ニ對スル第二回豫審訊問調書(記錄第三九三丁以下)中私ハ三十三歳ノ時サキエヲ産ミテヨリ何ウ云フモノカ躰ノ具合カ悪ク、頭カオカシクナツタリ、足カ痛シタリ躰中々ニ患ヒタリ、四十三歳ノ時卵巢ヲ患ヒタルモ藥價カ十分支拂ハレサル爲醫者ニモ確ニ診テ貰フコト能ハサリシカ其頃知人ヨリオ大師様ヲ信心スレハヨイト云ハレ小豆島ヘ參拜シオ大師様ト不動様ヲ禱ミタルニ漸次躰ノ具合カ快クナリタルヲ以テ、神様ノオ蔭ヲ受ケタルモノト信シ益々信仰スル様ニ爲リ爾來毎年高野山ニモ參詣シ居レリ其ノ様ナ次第ニ他ノ病人ニモオ蔭ヲ受ケサセテ上ケタイト云フ氣ニ爲リ四十五、六歳ノ頃兒島郡莊内村五流院ヨリ加持祈禱ノ免狀ヲ貰ヒ今日(昭和十四年七月)迄引續キ病人ノ祈禱ヲ爲シ居レリ、岩井仲次郎ハ十年許リ前私カ祈禱シテ

結核ヲ治シ遣リタル爲爾來私ニ隨イテオ經ヲ唱ヘサセタリ他ヘ修業ニ遣ツタリ等シテ私ノ弟子ト爲シ同人モ加持祈禱ノ免狀ヲ受ケ大抵私ト二人一緒ニ病人ノ祈禱ヲ爲シ居リタリ、本年六月二十二、二十三ノ兩日ハ岩井カ武繩加免ノヨリ依頼セラレタル同女ノ長男逸雄ノ精神病ヲ治シテ遣ル爲祈禱シタルカ其ノ遣リ方カ少シ手荒カリシ爲病人ハ遂ニ死亡シタリ、祈禱ノ方法ハ武繩方佛壇ノ前ニ逸雄ヲ坐ラセ同人カ暴ルルニ因リ豫テ履ヒ來サセ居リタル二人ノ男ニ逸雄ヲ擱ヘサセテ置キ私ト岩井ノ二人カ其ノ後ニ坐リテ錫杖ヲ振り鳴ラシ經文ヲ唱ヘテ祈禱シタルモノナルトコロ逸雄カ暴レテ仕方ナキ爲晝頃附添ノ男ニ振伏セサセ岩井カ逸雄ノ兩手ヲ背ノ方ニ廻シ同人カシ居リタル白キ帶ノ先ニ縛リ付ケタルモ尙暴レタルニヨリ午後七、八時頃更ニ兩足ヲ擱ヘ兩親指、兩足首及其ノ上ノ方ヲ縛リタリ、其ノ内兩方ノ母指ハ私カ元緒ニテ縛リ、足首ハ赤キ腰紐、上ノ方ハ黒キ帶ニテ縛リ、帶ニテ縛リタル處ト手ヲ後手ニ縛リ居ル處ヲ引張り寄セテ前ノ帶ニテ縛リ付ケ兩手兩足ヲ後方ニ曲ケタル儘動かカヌ様ニシ其ノ儘疊ノ上ニ轉カシテ祈禱シタリ、午後九時頃祈禱ヲ終リテ近所ノ風呂ニ行キテ武繩方ニ歸リタルニ逸雄ハ相變ラス喧シク叫ビ居リタルニヨリ同家ニ在リタル猿子ヲ同人ノ頭ヨリ被セ、首ノ處ヲ手拭ニテ縛リ其ノ上ヲ神様ニ供ヘアリタル鹽昆布ニテ縛リ逸雄ノ母ニ朝迄其ノ儘ニシテ置カナクテハイケナイト命シ置キテ歸リタリ、翌二十三日朝私ハ岩井ヨリ一足先キニ行キタルトコロ逸雄カゴ飯ヲ吳レト申シタルニヨリ神様ニ供ヘタルゴ飯ヲ二箸許リ食ハセ湯吞ニ二杯オ茶ヲ飲マセ遣リタルカ其ノ日ハ大分元氣カナクナリ餘リ暴レル様ナコトモナク私等ハ一生懸命祈禱シ居ル間ニ誰カカ逸雄ノ兩手ヲ解キ居リ逸雄カ午後三時カ四時頃祈禱ノ最中匍フテ逃ケントシタルニヨリ私カ同人ヲ俯伏セシ押ヘ付ケ腰ノ邊ニ馬乘リト爲リ祈禱中逸雄ノ容態カ變リタルヲ以テ私ハ下ニ降り其ノ足ノ親指ニ灸ヲ据ヘタルモ間モナク死亡シタリ、右祈禱中私ト岩井ノ二人ニテ逸雄ノ躰ノ中ニ居ル理ヲ祈禱ノ力ニテ追出ス爲手ヤ錫杖ニテ突イタリ叩イタリシタカ、從來モ神經病ノ祈禱ハ何時モ手足ヲ縛リ居リタル故大シタ事ニハナルマイト思ヒタルニ今度ノ分ハ今迄ニナキ荒イ病人ナリシ爲私ノ方ニテモ少シ遣方カヒトカリシコトハ相違ナ

キモ私共ハ別ニ逸雄ヲ虐メル考ヘテハナク出來ル丈病氣カ快クナル様ニト思ヒ一生懸命ニ爲リタル結果左様ナコトニナリタルモノナル旨ノ供述記載

七四六

一、被告人岩井仲次郎ニ對スル當審第二回公判調書中同被告人ノ供述トシテ私ハ十二年前肺結核ニテ醫者ニ見離サレ神佛ニ纏ラントテ古角ヘルニ依頼シ祈禱シテ貰ヒ一心ニ信心シタルトコロオ蔭ヲ受ケテ段々快ク爲リタル爲病氣テ困ル人達ニオ蔭ヲ受ケサセテ上ケタイト考ヘ古角ノ弟子ト爲リ遂ニ天台宗三井寺ヨリ加持祈禱ノ免狀ヲ受ケ加持祈禱ノ看板ヲ掲ケ人ノ依頼ニヨリ病氣ノ祈禱ヲシテ遺ル様ニナリ祈禱ヲ業トスルニ至リタルカ本年(昭和十四年)六月中旬頃武繩加免のヨリ其ノ長男逸雄ノ精神病治癒ノ祈禱ヲ頼マレタルニヨリ之ヲ引受ケ古角ニ祈禱ノ手傳ヲ頼ミ同月二十二、二十三日ノ兩日ニ亙リ加免の方ニ於テ祈禱ヲ爲シタリ、其ノ祈禱ハ加免の方六疊ノ間佛壇ノ前ニ小机ヲ置キ、道通様ト金神様ヲ祭り私ト古角トカ白衣ヲ着ケ逸雄ニハ石槌様ノ判ノ押シアル白ノ襦袢ノ様ナモノヲ着セ白キ帯ヲ締メサセ神前ニ坐ラセ其ノ兩脇ニ逸雄カ暴レ出シタルトキハ取押ヘ貰フ爲加免のカ頼ミ置キタル男二人カ附添ヒ私ト古角ハ其ノ後ニ坐リ心經ヲ唱ヘナカラ之ヲ爲シタルカ其ノ内逸雄カ逃出サントテ暴レ出シタルニヨリ右附添ノ男ニ逃サヌ様ニ捕ヘテ貰ヒタルカオ經カ重ナルニ連レテ逸雄ハ段々ト暴レ出シ午後二時ニ至リテハ始末ニツカヌ様ニナリタル故附添ノ男ニ言付ケテ逸雄ニ締メサセ居リタル端ニテ其ノ兩手ヲ後手ニ縛ラセ目隠ヲ施シテ摺ヘサセ居リタリ、逸雄ハ祈禱ヲ始メテ二時間位シタル頃後ノ山ノ方ニ向ヒ「來イ、來イ」ト度々申シタリ、這ハ逸雄ニ狐カ憑キ居ル爲山ニ居ル友ヲ呼ビタルモノト思フ、狐狸ハ病人ノ腋ノ下、股、足ノ裏等ニ潛ミ居ルモノナル故ニオ經ヲ唱ヘツツ錫杖ニテ其處ヲ突ケハ逃ケルト云フ風ニ教ハリ居リタルヨリ左様ナ個所及錫杖ニテ押ヘテ見テ逸雄カ妙ナ聲ヲ出シタル個所ニモ狐狸カ居ルヲ以テ其所等ヲ錫杖ノ尻ニテ突キタリ、午後八時頃尙暴レテ仕方ナキ爲經ノ邊ト足首ノ二個所ヲ紐ヤ帯ニテ縛リ足ヲ後ニ曲ケサセ手ヲ縛リタル帶ニ括リ合セテ動ケヌ様ニ爲シタル上横ニ轉カシ置キ尙古角ハ兩足ノ親指ヲ元結ニテ縛リ私ト共

ニ祈禱シ午後九時ニ至リテハ祈禱ヲ中止シテ私等ハ歸宅シタルカ其ノ間逸雄ニハ湯呑ニ一杯位ノ水ト神様ニ供ヘタル飯一口位ヲ與ヘタルノミナリ、尙私カ歸宅スル際逸雄ハ右ノ如ク縛リタル儘ニシ頭ヨリ狼子ヲ被セテ夫レヲ神様ニ供ヘタル昆布ニテ括リ置キ食事ヲ與ヘサル様注意シ置キタリ、私ハ何モ逸雄ヲ苦シムルカ目的テナキ故同人ノ病氣ヲ快癒セシメン爲一日モ早クオ蔭ヲ受ケサセ度キ一心ヨリ左様ナ注意ヲモ爲シタルモノナリ、翌二十三日モ午前八時加免の方ニ行キ再ヒ祈禱ヲ爲シタルカ逸雄ハ頭ニ被セ置キタル狼子カ取レ居リタルノミニテ其ノ他ハ前夜私等カ歸宅スル際ニ於ケル状態ノ儘ナリシカ大分大人シク爲リ居リ食物ヲ要求シタルニヨリ神様ニ供ヘタル御飯二口位ヲ與ヘ更ニ前日同様經文ヲ唱ヘテ祈禱シ最後ニ古角カ逸雄ノ體ノ上ニ跨リ珠數ニテ其ノ胸元ヲ摩リ居リタル際逸雄カ「オ母サン自分カ悪カッタ」ト叫ビ顔色變リタルニヨリ古角ハ直ク下ニ降り私共ハ逸雄ノ制縛全部ヲ解キ兩足ノ親指ニ灸ヲ据ヘタルモ容態漸次悪化シ同日午後四時頃遂ニ死亡シタリ、私ハ逸雄ノ如キ病人ヲ右様ノ方法ニテ祈禱シ病氣ヲ治シタル例澤山アルヲ以テ斯様ナ結果ニナルトハ夢ニモ思ハサリシカ結果ヲ見ルニ至リ少シ遺憾キタル感アリ、御示ノ證第一號ハ逸雄ノ足首ヲ括リタル紐、證第五號ハ其ノ腰ヲ括リタル帶、證第九號ハ手ト足トヲ括リ合セタル帶、證第八號中大ナル方ハ私、小ナル方ハ古角カ夫々用ヒタル錫杖、證第十號ハ逸雄ニ締メサセタル私所有ノ帶ナル旨ノ記載

一、證人武繩加免のニ對スル當審判事ノ訊問調書(記録第四〇四丁以下)中逸雄ハ私カ大正十一年五月五日亡夫脇地六三郎トノ間ニ儲ケタル私ノ長男ナルカ私ハ六三郎死亡後郷里玉島町ニ歸リ逸雄カ十歳ノ時古物商岡本初次郎ト夫婦ニ爲リ文房具商ヲ始メ本年(昭和十四年)四月初次郎死亡ノ爲五月二十二日只今ノ所(玉島町阿賀崎一二八一番地)ニ移轉シ逸雄ト二人住ヒニテ文房具商ヲ續ケ居リタリ、逸雄ハ小サイ時ヨリ頭ノ具合カ悪ク學校ノ成績ハテンテ駄目ナリシモ何ウヤラスウヤラ昨年高等小學校ヲ卒業シタルカ同年十一月頃ヨリ精神ニ異狀ヲ來シタル爲祈禱師岩井仲次郎、古角ハルノ兩名ニ依頼シテ本年六月二十二、二十

三兩日ニ亘リ祈禱ヲ爲シ賈ヒタルカ岩井ハ其ノ前日ナル二十一日私ニ對シ祈禱ニ要ル品ヲ用意シ且病人カ暴レルノヲ取押ヘル爲シツカリシタ男二人許リヲ雇フテ置ケ尙澤山ノ人カ一緒ニ拜ム方カ利キ目カ早イカラ近所ノ人モ集メテ置ケト申シタニヨリ私ハ其ノ通りノ用意ヲ致シ山下幸太郎ト三宅ト云フ男トヲ雇ヒ置キタリ、二十二日朝七時頃岩井カ來、次テ古角カ來テ祈禱ヲ始メ近所ノ人モ一緒ニ心經ヲ唱ヘタルカ其ノオ經ノ始マル前古角カ點火シタル束線香ニテ逸雄ノ口ヤ顎ノ邊ヲ撫テル様ニシタル爲逸雄カ火傷スルト云ヒ立テ逃ケントシタルトコロ岩井ト古角ハ逸雄ヲ押ヘ付ケ山下、三宅等モ手傳ヒテ逃カサヌ様ニシテ居リタル様子ナリ、私ハ逸雄ノ病氣ヲ治シテ賈ヒ度イ一心ニテ一生懸命ニオ祈リシタルカ岩井ト古角ノ兩名ハ痛イ、痛イ許シテ呉レト泣叫フ逸雄ノ胸ヤ腹其ノ他體中ヲ錫杖ヲ突キマタルニヨリ可哀想ニテ度々逸雄ノ方ヲ見ヤウトシタルモ二人ノ行者カ其ノ度毎ニ母親ヤ左様ナコトテハオ蔭ハナイト云ヒテ叱リ錫杖ニテ何回モ私ノ頭ヤ顔ヲ殴リツケタリ、祈禱ヲ始メテ間モナク逸雄ニ白キ衣ヲ着セ白キ帯ヲ締メサセ兩手ヲ後テ合セ一緒ニ縛リ目隠シヲ爲シタルカ午後八時過頃ニ至リ逸雄ノ兩足ヲ一緒ニ縛リ兩足ノ親指ヲ一緒ニ元結ニテ縛リ兩手ト兩足ヲ帶ニテ連絡シテ後ニ曲ケタル樓臺ノ上ニ轉カシ身動キノ出來ヌ様ニシタルカ間モナク兩名ハ風呂ニ行キタリ其ノ時兩名ハ朝迄縛ツテアル所ヲ解イテハイケナイ、食ヘ物モ、飲ミ物モヤツテハイケナイト申シタリ、翌二十三日朝ハ古角カ先ニ來テ逸雄カ何カ食ヘタイト申シタルニヨリ神様ニ供ヘタルゴ飯ヲ三粒位分ノ量ヲ二箸食ヘサセオ茶ヲホンノ一乗程飲マセタリ、其ノ日モ岩井ト二人ト同様ナル祈禱ヲ爲シタルカ錫杖ニテ突キマタル様ナコトハナカリシ、午後四時頃古角カ逸雄ヲ仰向キニ寢サセ夫レニ馬乗りニナリテ祈禱シ居リタル際逸雄カ元氣ノナキ聲ニテ「オ母サン自分ハ悪カッタ之カラハ云フコトヲ肯イテ惡イコトハシナイカラ許シテ呉レ」ト申シタルヲ以テ私ハ可哀想ニテ何カ返事ヲシ遣ラント思ヒタルモ古角カキツイ聲ニテ「オ母サンハ此處ニハ居リハシナイ」ト云ヒ逸雄ハ「怖ロシイ」ト一聲上ケ顔色カ變リ間モナク唇カ痙攣シ夫レキリ動カヌ様ニナリ古角ハ逸雄ノ體ヨリ下リ其ノ足ノ親指ニ灸ノ藥敷ラシタルモ夫レキリ生キ返ラサリ

シ旨ノ供述記載

一、強制處分ニ依ル鑑定人遠藤中節ノ鑑定書中武繩逸雄ノ死體ニハ其ノ顔面、頸部、胸部、腹部、左右上肢、左右下肢及背面ニ合計四十有餘ノ皮下組織間出血或ハ表皮剝脫ヲ存シ夫レ等ノ一々ハ蓋シ強大ナラサルモ以テ如何ニ數多ノ外力カ生前本屍ノ體表ニ作キタルヤヲ推知シ得ヘク殊ニ左右前膊ノ手腕關節部、左右大腿ノ膝關節部上方及左右下肢ノ足關節部上方ニ於ケル皮下出血斑ノ形狀ハ何レモ當該部分ノ緊縛セラレタルヲ推定セシメ左右ノ手部特ニ右手背部ニハ腫脹ヲ認メラル、然リ而シテ重要ナル内臟諸器ニハ死亡ヲ原因スヘキ創傷又ハ病變等ナク又體表ニモ如上ノ創傷以外ニ重要ナル創傷或ハ多量ノ出血ヲ來シタル如キ原因ヲ發見セス本屍ノ死因ハ外傷並緊縛等ニ因ル外傷性中毒性「シヨック」ト推定セラルル旨ノ記載

一、押收ニ係ル證第一號(紐)證第五號、第七號、第十號(帶)證第八號(錫杖二本)ノ存在ヲ綜合シテ之ヲ認メ得ヘキニヨリ其ノ證明十分ナリ

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲ハ刑法第二百一十一條ニ該當スルヲ以テ禁錮刑ヲ選擇シ其ノ刑期範圍内ニ於テ主文ノ刑ヲ量定處斷シ同法第二十一條ニ依リ原審ニ於ケル未決勾留日數中六十日ヲ右本刑ニ算入シ訴訟費用ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニ依リ其ノ二分ノ一ヲ被告人ノ負擔ト爲スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年九月二十七日

廣島控訴院 刑事部

二二〇 業務上過失傷害

七五〇

略式命令

本籍 嘉穂郡二瀬町大字伊岐須三番地
住居 鞍手郡宮田町大之浦五坑西部社宅
坑内採炭係

越智 金太郎

明治三十四年二月二十八日生

右ノ者ニ對スル業務上過失傷害被告事件ニ付略式命令ヲ爲スコト左ノ如シ

主 文

被告人金太郎ヲ罰金貳拾圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金壹圓ヲ壹日ニ換算シタル期間被告人ヲ勞役場ニ留置ス

事 實

被告人金太郎ハ鞍手郡宮田町大之浦八坑ノ發破係ナル處昭和十六年一月二十九日同坑第一捲右一片拂ニ於テダイナマイト四十本ヲ裝填シ之カ發破ヲ爲シタルカ内一本ノダイナマイトノ發破ヲ爲ササリシニ拘ラス之ヲ忘却シ何等ノ措置ヲ構セサリシ爲附近ノ發破作業ニ依リ右忘却ノダイナマイトハ遂ニ崩レタル石炭中ニ紛レ込ミ翌三十日午前九時十五分頃同坑採炭夫城ヶ島登カ採炭中同人ノ打下シタ鶴嘴ニヨリ發火爆發シ同人外一名ニ對シ二週間乃至二十日間ノ治療ヲ要スル傷害ヲ加ヘタルモノナリ

適 條

被告人ニ對シ刑法第二百一十一條第十八條

昭和十六年二月十九日

直方區裁判所

被告人ハ此ノ命令送達ノ日ヨリ七日内ニ正式裁判ノ請求ヲ爲スコトヲ得

第二十九章 墮胎ノ罪

二二一 墮胎

判 決

本籍並住居 大分縣下毛郡山口村大字田口二千九百三十三番地
小學校訓導

楠 木 謙 十 郎

明治三十一年十一月十日生

本籍 延岡市大字岡富甲四千二百二十一番地
住居 大分縣下毛郡山口村大字田口

二二一 墮胎

七五一

右被告人兩名ニ對スル墮胎被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

大正十年五月一日生

主 文

被告人謙十郎ヲ懲役六月ニ

被告人キミエヲ懲役參月ニ

各處ス

但被告兩名ニ對シ本判決確定ノ日ヨリ四年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

理 由

被告人謙十郎ハ昭和十一年五、六月頃ヨリ被告人キミエノ肩書住居ニ於テ同被告人ト情交關係ヲ繼續シ昭和十五年八月頃妊娠セシムルニ至リタルトコロ被告人兩名ハ外聞ヲ差チ共謀ノ上墮胎セムコトヲ決意シ右謙十郎ハ同年十二月二十五日頃前示キミエ居宅ニ於テ墮胎ノ目的ヲ以テ同女ニ服用セシムル爲水銀凡ソ二十瓦ヲ證第二號ノ硝子壺ニ入レタル儘交付シ被告人キミエハ昭和十六年一月二十一日頃自宅ニ於テ右水銀全部ヲ嚙下シ其ノ後間モ無ク水銀ニ因ル中毒症ヲ惹起シ因テ同年二月四日午後八時頃福岡縣築上郡椎田町椎田病院ニ於テ妊娠約七ヶ月ノ皮膚褐黑色ノ生産男兒ヲ分娩シ以テ所期ノ目的ヲ遂ケタルモノナリ

敏上ノ事實中

一、被告人キミエノ分娩シタル生産兒カ褐黑色ニシテ妊娠約七ヶ月ノ胎兒ナル點及水銀ニ因ル中毒症惹起ノ點ヲ除キタル點ハ被告人兩名ノ當公廷ニ於ケル判示同趣旨ノ供述並證第一號ノ硝子壺ノ存在ニ依リテ之ヲ認メ

一、被告人キミエノ分娩シタル生産兒カ褐黑色ニシテ妊娠約七ヶ月ナル點ハ當公廷ニ於ケル證人安部幾治郎ノ供述ニ依リテ之ヲ認メ

一、水銀ニ因ル中毒症惹起ノ點ハ鑑定人ノ北條春光作成鑑定書中ニ鑑定

一、妊娠セル婦人水銀ヲ嚙下セハ母體並ニ胎兒ニ種々ノ影響ヲ及ホス可キ可能性ヲ存ス、服用セル水銀ノ純度並ニ水銀ノ保存方法、水銀ノ新舊ノ差ニヨリ多少ノ差違アルヘキモ口中ノ厭フ可キ金屬味感、咽頭ノ灼熱感、疼痛、身體諸所ノ粘膜炎(喉ノ如キモノハソノ一症狀ト見得ヘシ)粘膜ヨリノ出血、粘膜ノ潰瘍(從ツテ胃腸障礙、腎臟病等ヲ併發スヘシ)齒齦部ノ黑色着色、嘔吐、等ノ中毒症狀ヲ惹起スル事アルヘシ。又胎兒ニ對シテモ間接的ニ即チ母體ノ貧血、腎臟腸ノ症狀等ノ結果惡影響ヲ及ホシ或ハ直接的ニ即チ胎盤ヲ通シテ水銀ノ中毒作用ヲ及ホス事アルヘシ。一般ニ金屬水銀ハ水銀化合物ノ如ク中毒作用劇甚ナラス。金屬水銀ノ服用多量ナリトモ母體ニ對シ致死的ニ作用スルモノトハ限ラス、服用ノ大部分ノモノハソノ儘大便ト共ニ排泄セラレ極メテ少量ノモノノミカ體內テ變化吸收セラレ毒作用ヲ發揮スルモノナリ。

二、古來水銀ハ墮胎藥トシテ各國ニ於テ使用セラルルモノナリ。ソノ量ハ一瓦以下例ヘハ〇・二一〇・三瓦ニテ墮胎ノ目的ヲ達スル場合アリトセラル。サレト實例ニ依ルニ三瓦又ハ六瓦或ハ九瓦ニテ墮胎ヲ來セルモノアルニ百三十瓦服用セシニ拘ラス母體ニ著シキ疾病モ惹起セス墮胎ノ目的ヲ達セサリシモノアリ。從ツテソノ量ハ一定ナルモノト言ヒ難シ、ソノ理由ハ金屬水銀ソノモノハ比較的ニ毒作用少ク或ハ寧ろ毒作用ナキモノニシテ、金屬水銀カ或ハ酸化セラレ又ハ體內テ變化シ發生セル水銀化合物カ吸收セラレテ中毒作用ヲ及ホスモノナレハ如何ナル水銀ヲ服用セシモノナリヤ或ハ服用セシ水銀カ體內ニ於

テ幾何吸收セラレシヤト云フ事ト關係スル事大ナルヲ以テナリ。水銀服用後流産スル迄ノ時日幾何ナリヤトノ問題モ亦上述ノ事ト關係スルヲ以テ一概ニ論シ難シ、實例ニ依ルニ二十瓦ノ水銀ヲ服用シ一週間半ニシテ流産セシ例、度々多量ノ水銀ヲ服用シタル後最初ノ服用日ヨリ數ヘテ三週間目ニ流産セシ例、或ハ六十瓦ノ水銀ヲ服用シタルニ拘ラス十二週間後ニ初メテ流産セシ例アリ。是ノ如ク一定セサルモノニシテ大約一二週間乃至數週間ノ日時アルモノト稱スルヲ得ンカ。然シテ妊娠月數少キモノハ多ク流産ス。妊娠月數多ク生産兒ヲ産ム場合ニ於テモ該兒ハ死亡スルコト多シ。墮胎兒皮膚ニ黒色調ヲ呈スル場合アルヘシ。

ノ記載アルト

被告人キミエノ當公庭ニ於ケル子供ハ非常ニ小サク髮毛ハ薄ク短ク泣聲モ餘リ發セス自分カ今迄見タ赤ン坊ハ色カ赤クアリシカ自分カ生ンタ赤ン坊ハ色カ赤黒クシテ弱ク二月六日午前六時頃死亡シタル旨及水銀嚙下ヨリ嬰兒ヲ分娩シ該嬰兒死亡ニ至ル迄ノキミエノ身體ノ狀況ニ關スル供述ヲ綜合シテ之ヲ認ム

以上ニ依リ判示事實ハ其ノ證明アリタルモノトス

法律ニ照スニ被告人兩名ノ判示所爲ハ各刑法第二百二十二條第六十條ニ該當スルヲ以テ其ノ刑期範圍内ニ於テ主文ノ刑ヲ量定處斷スヘキトコロ犯情愞量スヘキモノアルカ故ニ被告兩名ニ對シ刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ各刑法第二十五條ニ則リ本判決確定ノ日ヨリ四年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘキモノトシ主文ノ如ク判決ス

昭和十六年四月二十四日

中津區裁判所

二二二 墮胎、死體遺棄

判決

本籍及住居

福島縣石川郡野木澤村大字中野字八斗蒔二十二番地

農

鈴木ミチ

當三十九年

右ニ對スル墮胎死體遺棄被告事件ニ付當裁判所ハ檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ懲役六月ニ處ス

但本判決確定ノ日ヨリ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫ス

理由

被告人ハ數年前夫ヲ亡クシ獨身中ノ者ナルトコロ

第一、昭和十四年八月中ヨリ居村小見山喜一郎ト情ヲ通シ懷胎スルヤ親及小供等ニ對シ面目ナキノミナラス世間體モ恥シキ故寧ロ墮胎スルニ如カスト思惟シ昭和十五年一月中旬頃ヨリ十數日ニ互リ被告人肩書居宅ニ於テ毎夜就寢ノ際密カニ重量約一貫目ノ石ヲ下腹部ニ載セテ同部ヲ壓迫シ且冷却セシムルト共ニ毎朝居郡石川町ニ野菜賣ニ出ツル際途中俗稱石川山ノ坂路ヲ通行スルニ際シ重量約二、三十貫目ノ野菜ヲ載セタルリヤカーノ引手ヲ自己ノ下腹部ニ

當テ、歩行シ以テ子宮壁ノ收縮ヲ誘起セシメ尙子宮體ニ強力ナル衝激ヲ及ボシテ胎盤ノ部分的剝離作用ヲ惹起セシメ因テ同年二月一日朝前示居室ニ於テ妊娠六ヶ月ノ胎兒ヲ死産シテ墮胎シ

第二、次テ右胎兒ノ死體ノ處置ニ窮シ同年二月五日頃該死體ヲ新聞紙ニ包ミ情ヲ知ラサル被告人ノ長男勝保ニ命シ同人ヲシテ之ヲ前記居室庭ニ在リタル堆肥内ニ埋没セシメテ右死體ヲ遺棄シタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人ノ判示所爲中墮胎ノ點ハ刑法第二百十二條ニ死體遺棄ノ點ハ同法第九十條ニ該當スルトコロ以上八同法第四十五條前後ノ併合罪ナルヲ以テ同法第四十七條第十條ニヨリ重キ死體遺棄罪ノ刑ニ併加重ヲ爲シ其ノ刑期範圍内ニ於テ被告人ヲ懲役六月ニ處スヘク但其ノ犯情刑ノ執行ヲ猶豫スルヲ相當ト認メ同法第二十五條刑事訴訟法第三百五十八條第二項ニ從ヒ本判決確定ノ日ヨリ三年間右刑ノ執行ヲ猶豫スヘキモノトス仍テ主文ノ如ク判決ス
昭和十五年十月十五日

白河區裁判所

二二三 囑託墮胎、墮胎幫助

判決

本籍並住居

新潟縣北蒲原郡京ヶ瀬村大字月崎九十五番地ノ一

按摩兼農

花澤長一

當三十五年

本籍並住居

新潟縣北蒲原郡笹岡村大字笹岡千九十九番地

瓦製造業

渡邊安太郎

當五十五年

右被告人長一ニ對スル囑託墮胎囑託墮胎致死被告事件ニ付新發田區裁判所カ昭和十五年三月二十七日言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人長一ヨリ右被告人安太郎ニ對スル墮胎致死教唆被告事件ニ付同區裁判所カ同年四月五日言渡シタル有罪判決ニ對シ被告人安太郎ヨリ夫々適法ナル控訴ノ申立アリタルヲ以テ當裁判所ハ檢事清田一郎關與ノ上更ニ審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人長一ヲ懲役八月ニ被告人安太郎ヲ懲役三月ニ各處ス

被告人長一ニ對シ原審ノ未決勾留日數中十五日ヲ右本刑ニ算入ス

訴訟費用中證人小野爲清ニ支給シタル分ハ被告人安太郎ノ負擔トス

被告人安太郎ノ墮胎致死教唆ノ點ハ無罪

理由

第一 (一) (イ) 被告人安太郎ハ昭和十年春頃ヨリ北蒲原郡笹岡村大字笹岡關川ハルノト私通シハルノハ妊娠スルニ至リタルカ同女カ世間態ヲ恥チ墮胎手術ヲ受ケントシタルモ貧困ニシテ其ノ費用ニ窮シ昭和十二年八月頃被

告人安太郎ニ墮胎手術料三十圓ノ供與方求ムルヤ被告人安太郎ハ右ハルノノ求メニ應シハルノ方居宅ニ於テ右墮胎手術料トシテ三十圓ヲ供與シ以テ右ハルノヲシテ同年九月頃笹岡村大字笹岡小野爲清方ニ於テ被告人長一ニ手術料二十五圓ニテ墮胎手術方ヲ依頼スルニ至ラシメ

(ロ) 被告人長一ハ右ノ如ク昭和十二年九月頃小野爲清方ニ於テ右ハルノヨリ手術料二十五圓ニテ墮胎手術方ノ囑託ヲ受クルヤ之ヲ承諾シソノ二三日後右ハルノ方居宅ニ於テ同女ノ子宮腔内ニ酸漿ノ果ヲ挿入シ因テソノ翌日頃妊娠四ヶ月位ノ胎兒ヲ排出セシメ

以テ被告人長一ハ右ハルノヲ墮胎セシメ被告人安太郎ハ右ハルノノ墮胎ヲ幫助シ

(二) (イ) 被告人安太郎ト右ハルノハソノ後モ情交ヲ續ケ居タルカ右ハルノハ又亦妊娠スルニ至リタルヨリ世間態ヲ恥チ墮胎手術ヲ受ケントシタルモ貧困ニシテソノ費用ニ窮シ昭和十三年九月頃被告人安太郎ニ墮胎手術料三十圓ノ供與方ヲ求ムルヤ被告人安太郎ハ右ハルノノ求メニ應シ右ハルノ方居宅ニ於テ右墮胎手術料トシテ金三十圓ヲ供與シ以テ右ハルノヲシテ同年十月頃同居人居宅ニ於テ被告人長一ニ手術料三十圓ニテ墮胎手術方ヲ依頼スルニ至ラシメ

(ロ) 被告人長一ハ右ノ如ク昭和十三年十月頃右ハルノ方居宅ニ於テ右ハルノヨリ手術料三十圓ニテ墮胎手術方ノ囑託ヲ受クルヤ之ヲ承諾シ四五日後右ハルノ方居宅ニ於テ前同様同女ノ子宮腔内ニ酸漿ノ根ヲ挿入シ因テソノ翌日頃妊娠六ヶ月位ノ胎兒ヲ排出セシメ

以テ被告人長一ハ右ハルノヲ墮胎セシメ被告人安太郎ハ右ハルノノ墮胎ヲ幫助シ

第二 被告人長一ハ

(一) 昭和十三年十二月二十六日頃北蒲原郡笹岡村大字笹岡小野爲清方ニ於テ同村同字長尾キソヨリ墮胎手術方ノ囑託ヲ受ケ同所ニ於テ酸漿ノ根ヲ右キソノ子宮腔内ニ挿入シ因テ其ノ二三日後妊娠四ヶ月位ノ胎兒ヲ排出セシメ

(二) 昭和十四年一月十七日頃被告人肩書居宅ニ於テ北蒲原郡水原町大字水原遠山トヨヨリ墮胎手術ノ囑託ヲ受ケ同月二十日頃右遠山トヨ方居宅ニ於テ前同様酸漿ノ根ヲトヨノ子宮腔内ニ挿入シ因テ其ノ二三日後妊娠四ヶ月位ノ胎兒ヲ排出セシメ

以テ墮胎セシメ

タルモノニシテ右被告人長一ノ所爲ハ犯意繼續ニ係ルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ被告人長一ノ所爲ハ刑法第二百三十三條前段第五十五條ニ該當スルヲ以テ其ノ所定期刑範圍内ニ於テ被告人長一ヲ懲役八月ニ處スヘク被告人安太郎ノ所爲ハ刑法第二百三十二條第六十二條第一項ニ各該當スルヲ以テ同法第六十三條第六十八條第三號ニ則リ法定ノ減輕ヲ爲シ右ハ同法第四十五條前段ノ併合罪ニ係ルヲ以テ同法第四十七條第十條ニヨリ犯情重キ判示第一(二)ノ罪ノ刑ニ併合罪ノ加重ヲ爲シタル刑期範圍内ニ於テ被告人安太郎ヲ懲役三月ニ處スヘク尚被告人長一ニ對シテハ刑法第二十一條ニ依リ原審ニ於ケル未決勾留日數中十五日ヲ右本刑ニ算入シ訴訟費用中證人小野爲清ニ支給シタル分ハ刑事訴訟法第二百三十七條第一項ニヨリ被告人安太郎ヲシテ負擔セシムヘキモノトス

本件公訴事實中被告人安太郎カ昭和十四年九月關川ハルノヨリ同人カ重ネテ妊娠シタルコトヲ聞知シ墮胎手術ヲ受ケ
 シコトヲ共謀シ昭和十五年一月五六日頃右ハルノ方ニ於テ同人ヨリ被告人長一ニ墮胎手術方ヲ依頼セシメ以テ被告人
 安太郎ハ被告人長一ニ右ハルノヲ墮胎セシメンコトヲ教唆シ被告人長一ハ右依頼ニ基キ同所ニ於テ酸漿ノ根ヲハルノ
 ノ子宮内ニ挿入シテ卵膜ヲ剝離スル墮胎手術ヲ爲シハルノヲシテ該手術ニ因リ腹膜炎ニ罹リ遂ニ同月十七日死亡スル
 ニ至ラシメタリトノ點ハ右ハルノカ昭和十五年一月五六日頃被告人長一ヨリ墮胎手術ヲ受ケタルコト竝胎兒ヲ排出ス
 ルニ至ラスシテ同年一月十七日死亡シタルコト明白ナレトモ右ハルノノ死亡カ右墮胎手術ニ因レルモノナル事實ヲ認
 ムヘキ證明十分ナラス從ツテ被告人安太郎ニ對シテハ刑事訴訟法第三百六十二條後段ニ則リ此ノ點ニ付無罪ノ言渡ヲ
 爲スヘク被告人長一ニ對シテハ右ハ判示第一(一)ノ(ロ)第二(一)ノ(ロ)第三(一)ノ(ロ)ノ犯行ト連續犯ノ關係アリトシテ起
 訴セラレタルモノト認ムルヲ以テ主文ニ於テ特ニ無罪ノ言渡ヲ爲サス
 仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和十五年六月二十九日

新潟地方裁判所刑事部

二二四 姦通、墮胎教唆

判決

本籍 熊本縣八代郡植柳村大字植柳五千六百八十七番地

住居 同縣同郡太田郷町大字松江九百十番地

會社工場職工

山田 米 雄

大正四年十一月三十日生

本籍 熊本縣八代郡八代町字徳淵町二百二番地

住居 不定

無職

木 島 キ ミ

大正二年三月二十八日生

本籍並住居 熊本縣八代郡植柳村大字植柳五千二十番地

玩具商

澤 田 サ ミ

明治十五年三月七日生

右被告人米雄ニ對スル姦通墮胎教唆、被告人キミニ對スル姦通墮胎、被告人サミニ對スル受託墮胎各被告事件ニ付キ
 檢事某關與審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主 文

被告人木島キミヲ懲役八月ニ處シ被告人山田米雄、澤田サミヲ各懲役六月ニ處ス

但被告人木島キミニ對シテハ未決勾留日數ノ一部十日ヲ本刑ニ算入シ被告人澤田サミニ對シテハ本裁判確定ノ日

ヨリ三年間刑ノ執行ヲ猶豫ス

理由

第一、被告人木島キミハ昭和四年十二月九日關添猛ト婚姻シ同十四年七月三日離婚シタルモノニシテ被告人山田米雄ハ被告人キミカ前記ノ如ク有夫ノ婦ナルコトヲ知悉シ居タルモノナル處右被告人キミ、米雄ノ兩名ハ關添猛カ支那事變ニ應召出征不在中ノ昭和十四年一月頃ヨリ同年五月頃迄ノ間ニ互リ犯意繼續シテ八代郡太田郷町ナル被告人米雄方其他ニ於テ數度情交ヲ爲シテ姦通シ

第二、被告人米雄ハ昭和十四年五月、六月頃自宅其他ニ於テ相被告人キミヨリ右姦通ノ結果妊娠シタル旨告ケラル、ヤ其頃同人ニ對シ該胎兒ヲ墮胎スヘキ旨申向ケテ墮胎ヲ教唆シ因ツテ後記ノ如ク同人ヲシテ墮胎セシメ

第三、被告人キミハ前記ノ如ク相被告人米雄ノ教唆ニ基キ墮胎ノ決意ヲ爲シ昭和十四年六月十二日頃相被告人澤田サミ方ニ至リ同人ニ對シ墮胎手術ヲ囑託シ同日及同月十五日頃ノ夜ノ二回ニ互リ右サミ方ニ於テ同人ヨリ墮胎手術ヲ受ケ同月二十四日頃八代郡八代町ナル當時ノ自宅ニ於テ妊娠三ヶ月位ノ胎兒ヲ體外ニ排出シテ墮胎シ

第四、被告人澤田サミハ前記ノ如ク相被告人キミヨリ墮胎ノ囑託ヲ受クルヤ之ヲ承諾シ昭和十四年六月十二日頃同十五日頃ノ兩度ニ互リ肩書自宅ニ於テキミノ子宮内ニ竹箸ノ一片(證第二號)ヲ挿入シテ墮胎手術ヲ施シ因ツテ同月二十四日頃キミヲシテ同人ノ自宅ニ於テ前記ノ如ク胎兒ヲ體外ニ排出シテ墮胎セシメタルモノナリ

(證據略)

法律ニ照スニ判示被告人キミノ第一ノ所爲ハ刑法第八十三條第一項第五十五條ニ該當シ第三ノ所爲ハ同法第二百一十二條ニ該當スル處右ハ併合罪ナルヲ以テ同法第四十五條第四十七條第十條ニ依リ最モ重キ姦通罪ノ刑ニ併合罪ノ加重ヲ爲シ其刑期範圍内ニ於テ同被告人ヲ懲役八月ニ處スヘキ處同被告人ニ對スル未決勾留日數中ノ一部十日ハ刑法第二十一條ニ依リ本刑ニ算入スルヲ相當ト認メタリ次ニ判示被告人米雄ノ第一ノ所爲ハ刑法第八十三條第一項第五十五條ニ該當シ第二ノ所爲ハ同法第二百一十二條第六十一條第一項ニ該當スル所右ハ併合罪ナルヲ以テ同法第四十五條第四十七條第十條ニ依リ最モ重キ姦通罪ノ刑ニ併合罪ノ加重ヲ爲シ其刑期範圍内ニ於テ同被告人ヲ懲役六月ニ處スヘキモノトス

次ニ判示被告人サミノ所爲(第四事實)ハ刑法第二百一十三條前段ニ該當スルヲ以テ其刑期範圍内ニ於テ同被告人ヲ懲役六月ニ處スヘキ處同被告人ニ對シテハ同法第二十五條ニヨリ刑ノ執行猶豫ヲ爲スヘキ情狀アリト認ムルニヨリ三年間其刑ノ執行ヲ猶豫シタリ而シテ押收物件中證第一、二號ハ共ニ同法第十九條第一、二項ニ依リ沒收スヘキモノト認メ仍テ主文ノ通り判決シタリ

昭和十四年十月十三日

八代區裁判所

二一五 墮胎

本籍 三重縣名賀郡名張町字本町三百十四番地

二一五 墮胎